

甲乙人―たれかれ

廷尉―酒義經

諷人遺誠云々―詩經小雅巷伯に「彼諷人者、誰適與謀、取彼諷人、投車豺虎、豺虎不食、投車有北、有北不受、投車有矣」とあるに

逃出でて、駿河國清見關にいたる。折節的場より歸りける甲乙人行きあひて、怪しみ思ひ、矢を射かけ追ひければ、梶原、狐崎にて返し合せ、蘆原小次郎、飯田五郎、吉香小次郎とあひ戦ひて、景茂うたれぬ。國內の兵ども、集まり攻めければ、景國、景宗、景則、景連も死にぬ。景時、景季、景高は、うしろの山にてうたれしを、山中より其首をさがし出して、道路に梟しける。梶原は辯口ありとて、武將の近習なりしが、廷尉の事を常にあしく申せし事、人のあまねくいふ事なり。

源君兄弟本連枝 何事一朝恩愛衰 猶有讒人遺誠在

不投豺虎死狐崎

淺間

和歌に、志豆機山とよめるは、是なりと聞えし。醍醐帝の時、富士本宮を爰に遷して、新宮と申すよしかたり侍る。

乘輿時々詣淺間 黄昏唯見一僧還 風光應是靈神愛

前有清流後有山

臨濟寺

蘭若隔林隣府闕 遊人眼裡對孱顏 立談不及世間事

亦是浮生半日閑

建穂寺

此寺は、むかし役行者の草創せしやうにいひ傳へたり。中比より、密家の者移りて、今にいたるまであり。

密家―眞言宗

此地元來法界宮 水雲心性似虛空 吟眸所々不知暮

石徑霜深古寺楓

八幡

此神の垂跡、國々にあり。殊にいぢるきは、宇佐、箱崎、男山、譽田、鶴岡、その外もあまた多し。此駿河國に勸請しけるは、いつの時の事にか侍るやらん。此秋河内の譽

宇佐―豊前箱崎―筑前男山―京都譽田―河内、ほむだとも訓ず

田の縁起を、社僧江戸へ持下りしを見侍る。神功皇后の縁起二卷、譽田の宗廟の縁起三卷、永享年中普廣院寄進せらる。五卷ともに土佐が繪にて、宗廟の三卷は、普廣院親筆に事書をうつされけり。唯今爰の八幡を見て、かの縁起の事を思ひ出し、聊しるし侍る。

無方變化本非恒 五彩靈鳩金色鷹 神不惑人人却惑 唯嫌巫祝有依憑

久佐奈岐

はき一佩用し 遠かたや一祝詞の句

延喜式に、駿河國草薙神社といへるは是なり。むかし日本武尊、吾孀國に下り給ひし時、この所にて夷賊おこり、原野に火を放ちて尊を燒殺さんとしければ、尊はき給へる劍をぬき、遠かたやしけきをもとをやい鎌の利鎌をもちて打はらふ事のごとくと、唱へ祓ひて、劍をふりたまひければ、あたりの草盡くなぎはらはれて、夷賊の方へ烟なびきて、尊は恙もまします。さてこそ初は天のむら雲の劍と申せしを、草薙の劍とは名づけけれ。尊これより奥へ下りて、東夷をたひらけ、のほり給ふ時に、かの劍を熱田の神宮へをさめ給ふ。我國歴代傳寶の三種の神器の其一なり。其尊を燒むとしける所をば、

燒津と名づけ、草をはらひたまふ所をば、草薙と名づけて、何れも駿河國にあり。

欲爲黎民解倒懸 東征到處幾山川 腹間一自蛇龍動

雲氣吹消蔓草烟

宇都山

在原業平この山を過ぎし時、葛楓いとしけりて道もなし、修行者にあひて、歌をよみて言傳てける事、人のあまねく知れる事なり。俗者内屋ともかけり。

山中回首費吟呻 遺愛葛楓秋又春 今古冥々名與境

業平詞後更無人

大井川

大井川は駿河と遠江との境なり。明日香川ならねど、霖雨ふれば淵瀬かはる事たびなれば、東の山の岸を流れて、島田の驛河原の中にある事あり、西の方に流れて、金谷の山にそふ事もあり、一すぢの大河となりて、大木沙石を流す事もあり、あまたの支流

燒津一今音便に「やいづ」と呼ぶ、燒津は靜岡の西にあり、草薙は靜岡の東にあり、其間相距る五六里、古來此事に關し諸説紛々たり 倒懸一非常の苦しみ 歌一駿河なるうつしの山邊のうつしにも要にも人にあはぬなり けり一伊勢物語

明日香川ならねど一世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵は今日の瀬となる

徒杠與梁—徒杠は徒歩して渡るべき橋、與梁は駕籠の通るべき廣き橋、孟子一歳十一月徒杠成、十二月與梁成、民未病涉也、賣炭翁—白居易の詩に出づ

揭厲—もすををかき上げて徒渉すること

となりて、一里ばかりが間にわかる事もあり。さればいにしへより、徒杠與梁もなり難き故に、往來の人馬、川の瀬を知らざれば、金谷に待つもあり、島田にとどまるもあり、渡りかよりて溺ると者もあり、辛うじてむかひの岸に至るもあり。島田の民おのが家は漂ひ流るれども、旅客の囊をむさほる故に、洪水をよろこぶ。賣炭翁が單衣にして、年の寒きを待つが如し。河水の家を流し、田をそこなふ故に、防鴨河使、防葛野河使を置かれし昔の事も、唯今思ひ出でざらんや。

尋常揭厲必過腰 吐馬呼奴魂欲銷 來往就中何處苦
無舟無筏復無橋

小夜中山

圓位法師が、「いのちなりけり佐夜の中山」と詠ぜしは爰にての事なり。

坂道升降是早天 夢殘馬上不成眠 此山無限西行壽
能使詠歌千古傳

圓位法師—西行いのちなりけり—上句—年を経てまた越ゆべしと思ひきや—詩に西行壽とあるはこの歌をいふ也

西坂

西坂を新坂とも書けり。此所の民、わらび餅を賣る。往還のもの飢をすくふ故に、いにしへより、新坂のわらび餅とて、其名あるものなり。或は葛の粉をまじへて蒸餅とし、豆の粉に鹽かてゝ旅人にすゝむ。人その蕨餅なりと知りて、其葛餅といふ事を知らず。諸越に、茯神を買うて老芋を得たる人もありけるとかや。

婆叫蕉兮婦喚烘 停人鄙食在途中 憑誰救得西山餓
馬首吹來餅餌風

中泉

見附、濱松の間に、中泉といへる所は、鳧雁の多き所にて、遊獵によるしき地なれば、大相國年毎に放鷹せさせ給ひてありしが、余も御供に待りしに、「芒碭雲一去。鴈鶩空相呼」と、此たび打誦すべしとは思ふべしやは。駿遠二州、今は中將殿の知らせ給ふ國なれば、封建のむかしも、今にあらざらめかも。

かてゝ—加へて 茯神—茯苓をいふ、本草に「多年樵飲之松根之氣味抑鬱未絶精英末論其精氣盛者發泄於外結爲茯苓故不抱根離其本體有零之義也、精氣不盛上爲付、結本根既不離本、故曰茯神、芒碭—山の名、前漢書高帝紀に「隱芒碭山澤間」

決雲兒一鷹

春蒐冬狩跡猶遺
更無人放決雲兒

霜露凄々野草衰

鴻鴈自來還自去

池田

美濃の青墓、遠江の池田、駿河の手越、いづれも長者遊君ありて、むかしは往還の武士、
輕薄の少年、鞍馬を門につなぎ、千金笑ひを買ふ所なれば、かの江口の津にも、いかで
劣り侍らん。矢島大臣のめされし湯谷も、此池田の宿のむすめにてはんべる事、世にか
くれなし。今は此宿、天龍の河の東のはたに、形ばかり残りて、わづかなる小民ども、渡
りを守りて居侍りける。大天龍小天龍とて、二の河ありけるが、新田左中將の、尊氏と
戦ひ負けてのほられける時、うき橋の桁のなかりけるを、飛越えられけるも、爰のこと
なり。江都が輕捷の有りけるにや。濱松のそばなる細流を、小天龍の事なりと、今ぞい
ふめる。

湯谷一又熊野、侍従と號す羅を平宗盛に専らにせり本文矢島大臣といふは即ち宗盛

池田驛長本倡家

處子嬋娟天下誇

腰似楚王宮裏柳

面如巫女廟前花

古今不盡洪河水

淵瀬相移兩岸沙

治亂興亡非我事

征鞍暫憩且嘗茶

今切

遠州荒井の濱より奥の山、五里ばかり海となりて、大船も出入る事、むかしは山に續き
たる陸地なりしが、中比山より法螺の貝おびたどしくぬけ出でて海へ入りける。其跡か
くの如く海となりて、今切と名づくるよし、古老言ひ傳へたり。我國は、伊弉諾伊弉册
のうみ給ひ、大已貴、少彦名の造られけるといへば、其むかしはいかゞ侍りけむ。もろ
こしの華山を、巨靈が擘開して、水をやりける事も侍るにや。

一葉扁舟寄旅身

瀨波通信遠州濱

海山何借巨靈手

我國元來造化神

潮見坂

白須賀より西のかたへのほる一の坂あり、大洋眼前にあれば、潮見坂となづく。余嘗て
詩を作りて云ふ。

山看の韻―山は
刪、看は寒の
韻
三百篇―詩經
楚人の詞―楚辭

八句―律詩

波浪雲天俱一色 東南溟海更無山 聖門有術人何敢

律にかよはらず、快活のやうなれども、山看の韻、世俗の思ふ所、通韻は廣きが故に易く、切韻は狭き故に難しとなん。三百篇、楚人の詞には、協韻のみ多かり。いかんぞ聖人の刪修、屈宋が文を慕はずして、沉約江老のいやしきを學ばむとや。世間流布の韻鏡にも、協通の音を專とし、洪武正韻、洪武韻府にも、むかしにかへり、中比の韻をあらためたらす。志あらん人の、いかでか我に同じからざらん。しかはあれど、初學の律偶に拘る者は、先なやみて後に得べき事とおほえ侍る。されば不律にあらんよりは、先づ律をまもるべし。絶句を學ばむよりは、先八句を作るべし。意到らず、風高からざれば、古にあらず。句到らず、情深からざれば、律にあらず、是詩學の捷徑なりと、さる人の語りしは、誠にけにもとおほしくて、耳にとどまり侍る。

天地豈識幾層瀾 舒卷古人方寸端 滿目不遮潮見坂
大鵬飛盡水漫々

三河國

しほ見坂より二河の間に、纔なる溝あり。是なん遠江三河の境なりといふ。いつぞや菅野の眞道が史を見侍りしに、持統天皇、三河國行幸ありとしるせれど、いづれの郡郷、いづれの村里といふ事を知らず。眞道は光仁桓武の時なれば、世久しく知らざるにや、事略して書きもらせるにや、口惜し。

先王若要慰民生 定有壺漿簞食迎 遺恨翠華巡狩跡
未聞行在頓宮名

吉田

江戸より京までの間に大橋四あり。武藏の六郷、三河の吉田、矢矧、近江の勢多なり。ひとり矢矧のみ土橋なれば、洪水によりて絶ゆる事もあり。此比新に板橋となりけるにや。爰にしも、誰か周處が三害をやめて、留侯が一篇を傳へむや。

行々何日窮 相送數州風 馬過曉霜上 龍横道路中

菅野眞道が史―
續日本紀也、眞
道は山守の子、
百濟辰孫王の後
也、其續日本紀
を修して奉りし
は延暦十六年伊
勢守の時にし
て、弘仁の始め
參議常陸守に至
りて致仕す
翠華―風輦をい
ふ

周處が云々―周
處は三國時代の
人、甚だ粗暴な
りしが、父老が
南山の白額の猛
虎と、長橋下の

蚊と、子周處を指す。と并せて三害となすと歎ずるを聞き、虎と蚊とを殺し、自ら善行を積めりといふ。留侯が一篇、留侯張良子房が下邳圯上にて黄石より一篇の兵書を傳へられし故事。

甘棠意―後人が遺徳を慕ふをいふ。周の太保召公奭南方を巡行して文王の政を宣ぶる時甘棠(コリンゴ)樹下に宿りしが、後人召王を慕ふ餘り其樹まで愛したる故事。

昆吾―古への名劍の名。失桑榆―日暮に失ふ、後漢書「失之東隅、收之桑榆」の誤案。

川流無晝夜 人物有西東 一枕還鄉夢 家書久不通

長澤

昔在轅門見玉鞍 豈圖今日淚闌干 林間應是甘棠意 遺愛歲寒千百竿

矢矧

矢矧は岡崎の西一里ばかりにあり。建武の時、足利氏鎌倉にありて、天子の命に違ひしかば、新田氏節刀使を奉りて東征し、此所にて鎌倉の軍兵と戦ひ勝ちて、鷺坂まで逃るを追打つて、官軍利を得し所なり。後に箱根、竹下の戦に、官軍敗績して、中書王の走り給ひし事こそ、まことに不幸ならずや。

森々白刃是昆吾 波激河邊千萬夫 恩賜旌旗如日色 東隅雖得失桑榆

八橋

三河國八橋は、杜若の名所なる事、在五中將の歌にてかくれなし。今岡崎より池鯉鮒にいたる道より、北の方一里ばかりに、それなんむかしの八橋なりとて、所の人、遙かに指をさして教へ侍る。久しく田となりて、今は杜若なし。三四年前、余が作りける詩にも、「古人遺跡鐵鑪步。只有三河杜若名ことなん。」

六々歌中第幾仙 風流千歲慕幽立 世間一瞬皆陳迹 杜若爲薪澤作田

熱田

日本武尊、東よりかへり給ふ時、尾張の稻種宿禰がむすめ 宮簀媛が家に宿しましたますより、此社の神といはひ申すなり。然るに世俗の説に、熱田を蓬萊といふなれば、楊貴妃を祭るといふ。されば宋大史が日東の曲にも、國に楊妃が祠ありといへり。此社のみならず、巫覡の託宣、世間の傳説は、おほやう覺束なき事多かる。

在五中將の歌―伊勢物語「からころもきつくなれにし妻しあれははるゝきぬるたびをしぞ思ふ」八橋にて葉平がかきつばたの五文字を頭に置きて詠める歌六々歌中―三十六歌仙中

おほやう―概ね

馬嵐坡下鬼一楊
貴妃の靈魂、貴
妃馬嵐山下に殺
されたるよりの
ふ

東征功就凱旋時
一朝來此立靈祠

宿所會徵宮簀姬

誰道馬鬼坡下鬼

清見原天皇一天
武天皇

桑名

熱田より海路七里渡りて、伊勢國桑名に至る。むかし清見原天皇、吉野より潛幸ありし時、皇后も伴ひたまひて、天皇は此所より美濃國不破關に赴かせ給ひ、皇后は此地に留まり給ふ。天皇大友の王子と位を争ひ、不破の關にて、東西の兵相戦ひしに、天皇利を得させたまひて、位につかせ給ふ。天武天皇是なり。皇后は天智天皇の娘、大友王子と連枝にてまします。女主にて、後に持統天皇と申しよなり。桑名におはせし頓宮、今いしつれの所なる事を人に問へども、知れる者なし。又聖武天皇の時、藤原廣繼、西國にて野心をおこすと聞えければ、官軍をつかはし、退治し給ふ。天皇は伊勢太神宮に參詣ましくして、祈らせ給ひ、それより此桑名に渡御ありて、美濃にかより、近江路を經て還幸なりぬ。その間に、廣繼伏誅のよし、捷書を馳せて奏しける。日本紀續日本紀を見侍りし事を、聊か爰にしるしける。

連枝一御兄妹
頓宮一かりみや

會聞一帝此停車

憾在吾邦未見書

今問先蹤人不識

誰賡風土補方輿

石薬師

方輿一土地、地
は方にして物を
載するの義

四日市場より三里ばかり西に、薬師の石像ある所を、石薬師と名づく。余が心に不圖思ふやう、浮圖をかさね、五輪をきざみ、退凡下乗をたて、佛菩薩を石にて造るは、所々多けれど、碑銘墓誌石表などは一もなし。嵯峨の二尊院に、源空沙門が行狀なりとて、苔蘚の間に、文字纒に残りて侍る。誠に今の人の祖先を問ふに、會高の名をだにも知らず、遠きを追ふの心なきこそ、かなしき事なれ。諸州諸郡をありき見侍りしに、寺院佛閣は、いかなる小民村里にもあまた侍れども、庠序學堂とは名をだにも聞かず、ましてむかしの礎もなし。延天の比までは、都には大學を建て、國郡には國學を立て、二仲の釋奠行はれしに、いつの時にかかく捨れけるぞや。足利の學校さへ、近比まで誰にても得業の人居侍りしに、此四五十年より、僧法師の住所のやうになりぬ。浮圖五輪のために石を刻まんよりは、螭首龜踏を建てよかし、蕃神黠胡の爲に堂を造らむよりは、精

腹ふくろ云々
徒然草「おぼ
しき事いはねば
腹ふくろくわざ
なれば」

廬家塾をせよかしと、心あらん人の腹ふくるよほど思へども、いひ入るべき穴をほらすや。

一地衆生承願恩 温公會比藥師尊 若磨此石作鍼去
甘草人參不足言

庄野

輪子のせい輪
子は絹布の名、
せいは精巧の略
稱か
伏波馬援也、
南士の蕙政を一
車に載せて還る
事後漢書馬援傳
に見ゆ
苞苴いへづ
と、みやげ

石藥師の西、龜山の東に、庄野あり。此所の民家に、火米をちいさき俵に入れて、毎戸ならべておく。其俵の大きこぶしの如く、又は槌の如くなるもあり。輪子のせいに包み、縛へてあるを、旅人買取りて、家づとにすといふ。先年余が僮僕、馬のあとにかけて來りしを見て、昔の伏波は蕙政を一車にのせ、伯顔は梅花を檐頭に挿みしに、今此小俵あまた取來るこそ、ほとゝろむばかりをかしくて、彼法道仙人越智の大徳が俵米を飛せし事も、思ひ出られてありしが、今又都にのほり、苞苴の物とし、我をまつ小兒の歡笑を見むとのみにて行きぬ。

唐人詩句漢人書

記得燒耕火米畚

可憐孩提求口實

終朝咀嚼齒牙餘

鈴鹿

關地藏より鈴鹿の坂の下まで、あまたの河あり、八十瀬の河とは是なり。爰にまします明神は、天武天皇の行逢ひたまへる老人にて侍らん。世の婦人小子の口遊める鈴鹿御前の物語とやらむは、おほつかなし。此所にありし鬼を、菟田丸が討從へたりといふ、是も又おほつかなし。むかしより山賊ある所と言ひ傳ふれば、それを鬼とは言ふにや。伊勢三郎も鈴鹿の山賊なりけるとなむ。

九折盤紆鈴鹿坡 行人征馬恐蹉跎 祇今四海恩風遍

八十瀬河無白波

土山

土山といへど山はなし。鈴鹿より西の坂を下りて、二里ばかりにあり。釋詁毛傳などに石山を土の山とよみ、土山をいしの山とよむ事を思ひて、

鈴鹿御前一坂上
田村磨勒を奉じ
て鈴鹿の山の鬼
女を征し囚とせ
しが後山に逃げ
入りしを田村磨
追到して夫婦に
なる この鬼女
即ち鈴鹿姫なり
との俗傳
白波一河の波に
盜賊の意を兼ね

崔嵬―山路の險
しき形容

行李東西久旅居
知是崔嵬知是岨

風光日夜憶鄉閭

梅花繫馬土山上

水口

學而の篇―論語
の最初の篇

去歲八月四日、大相國二條の御所を出御ありて、翌日此所に著かせ給ふ。其日より打續
き雨ふりければ、三日逗留ましくけるに、夜更るまで御前に余も侍りし時、學而の篇
をよめと仰せければ、跪づき開きはんべりしに、「能竭其力。能致其身」とある所を、み
づから御讀ありて、能といふ字に心をつくべきなり、なほざりにては忠孝たち難し、親
には力をつくし、君には身をいたすといつば、いづれかまされるといふ評論あるべしと
仰せけるに、余もかの趙苞が故事を引て答へ奉りしが、只今忘れ難くて、すどろに袂を
しほり侍る。

愛生從子親

義立自君臣

侍讀古年雨

淚痕今日人

草津

石部より草津にいたりしに、馬につきたる奴隸共の語りしは、近江國は本より相撲の者
多く有りて、石部、草津、出合ひ相撲をとるに、石部勝つ時もあり、草津勝つ時もあり
といふを聞きて、事のおこりを人の尋ねしかば、當麻の蹶速、野見宿禰より初めて、那
都羅、善雄力を比べ、俣野、河津に至るまで、其名聞え侍る、年中行事にも、相撲の節
會とて、内裏にも行はせ給ふなど、やうく物語りし行くほどに、勢田になりぬ。相撲
の詩を作れと、人のいひければ、

氣似烏兎出野塙

力如鼈背戴方壺

龍紋絶贖今猶古

聞否少年相撲徒

勢田

蒙塵―天子戰亂
を避けて京師の
外に出て給ふこ
と
内相―惠美押勝
大弟―大海人皇
子、後に天武天
皇

勢田は古戰場なり。承久の役には、一皇輿の敗績して、外に蒙塵ありし事を悲しみ、孝謙
の御宇には、内相が奔らんとするに橋絶えて、高島にて亡びし事を喜ぶ。是のみならず
日本紀を見れば、天智帝崩御あらむとする時、大弟は沙門とならせ給ひて、吉野山に入
らせ給ふ。大友皇子その時は太政大臣にてありしが、天智の讓をうけられしに、大弟吉

方壺―海中にあ
る仙山、列子に
見ゆ

伯林維經—伯林は曾太子申生をいふ、維經は首をくくりて死すること
南董が筆—董孤が筆と同義なるべし、歴史を掌るもの、直筆して忌み憚るなきをいふ

野より潛に出でて、和州、伊賀、伊勢を過ぎ、濃州不破關にて尾州の兵を召集め、皇子の兵と戦勝ちて、近江の瀬田まで攻のほり給ふ。皇子みづから此橋の邊に陣をとつて合戦ありしが、大弟の兵勝つに乗りて、皇子敗北して、竹中に入つて伯林維經の跡をふめり。大弟は清見原、天皇是なり。壬申の亂とは此時の事をいふなり。懷風藻は勝寶年中に編集せしが、其中に、「大友皇子は天智帝の長子なり。壬申の役に、天命遂けずして薨じぬ」といへり。舍人親王は、皇考王父のために文を婉して、南董が筆をいかと思ひけん。懷風藻は、親王の時を去る事遠からざれば、其事の實を隠さるゝにや。近比大明に、燕王が建文を殺して、白帽子を戴けるも、異域同日の物語なるべし。
勝敗興亡憂更憂 千年人事落棊楸 積骸爲帶血爲水
都入勢田橋下流

比叡山

湖水の邊より比叡山を見て、いつぞや人の和韻をし侍る詩を、爰にしるして云ふ、「興公昔作四明遊、能使遺文後世留、杉洞窟深蛇鱗動、竹生島泛浮萍幽、三朝烟草若王殿、

舌本こはし—ししたの根のこはばるをいふ、世説文學下篇に、「川日不讀道德經、便覺舌本問強、むばら—うばら、荆棘、江山のたすけ—自然の景が吟懐を誘ふをいふ、東西南北人—四方周遊の人、張翰—晉の吳縣の人、洛に在りて秋風に故郷の鱸魚膾を思ひ家に歸りし有名の人

夜風波内相舟。只有舊時今不改。山雲湖影日悠々、一一一は孫興公が天台山の賦の事をいひ、三四は登覽の景をいひ、五六は懷古の感慨をのべ、尾句は景情を合せていふ。此詩を作りし時は、余が年二十七八にてやありけん。久しく公務の暇なくて、吟咏する事もなし。古人三日の間にも舌本こはしとこそ言ふに、まして余が筆硯塵積りて年経ぬれば、口中のむばら、いかでか詞林にまじはらむ。しかれども江山のたすけもあれがしと思ふ心のゆくにまかせて、紀行の詩、今日までにて若干首に成りぬ。

良嶽從來守紫宸 先王立作國家鎮 雲波五色三津浦
星斗千年七社神 湖水朦朧空得月 山櫻寂寞自過春
好風美景非無意 吾亦東西南北人

大津

大津をすぎて相坂にいたり、肩輿より清水の流を見て
九陌大津隈 忽々繁往來 一亭群馬聚 十里遠帆開
鮒上任公釣 鱸傳張翰盃 潺湲相坂水 烏帽掃塵埃

元和二年十一月日

羅浮子

丙辰紀行終

野ざらし紀行

松尾芭蕉

千里に旅立ちて路糧をつとまず、三更月下無何に入るといひけん、昔の人の杖にすがりて、貞享甲子秋八月、江上の破屋を立ちいづる程、風の聲そぞろ寒けなり。

野ざらしを心に風のしむ身かな

秋十とせ却りて江戸をさす故郷

關越ゆる日は、雨降りて山みな雲に隠れたり。

霧しぐれ富士を見ぬ日ぞ面白き

何某千里といひけるは、此度路の助となりて、萬いたはり心をつくし侍る。常に莫逆の

交深く 朋友信ある哉、此人。

深川や芭蕉を富士に預け行く

千里

路糧を云々江
湖風月集三山偃
溪聞和尚の偈
「路不資糧笑復
笑、三更月下入
無何」
江上の破屋―深
川芭蕉庵
秋十とせ―賈島
の詩「客舍并州
已十霜、歸心日
夜懷咸陽、無端
更渡桑乾水、却
望并州是古鄉
莫逆の交―心持
のしつくりと合
ふつき合ひ

野ざらし紀行

小萩がもと一源
氏物語桐壺「宮
城野の露吹きむ
すぶ風の音に小
萩がもとを思ひ
こそやれ」

性のつたなき
うまれつきの不
運

杜牧が早行
「垂鞭信馬行、
數里未鷄鳴、林
下帶殘葉、葉落
時驚鷺、霜凝孤
雁廻、月曉遠山
橫、宿憊休辭、
險、何時世路平」

浮屠一塔婆の梵
語、轉じて僧の
意に用ふ、一本
浮屠の上に「髮
なきものは」と
あり

西行ならば云々
一西行江口の遊
女との唱和をい
ふ

古郷一伊賀
北堂の云々一母
も死して亡きを
いふ、詩經「焉

富士川の邊を行くに、三つばかりなる捨子の哀けに泣くあり。此川の早瀬にかけて、浮世の波をしのぐにたへず、露ばかりの命まつ間と捨置きけん、小萩がもとの秋の風、今宵や散るらん、明日やしをれんと、袂より喰ものなけて通るに、

猿を聞く人すて子に秋の風いかに
いかにぞや 汝父にくまれたるか、母にうとまれたるか。父は汝を悪むにあらじ、母は汝をうとむにあらじ。只是天にして、汝が性のつたなきを泣け。

大井川越ゆる日は、終日雨降りければ、

秋の日の雨江戸に指折らん大井川

馬上吟

道のべの木槿は馬にくはれけり

二十日あまりの月かすかに見えて、山の根際いとくらきに、馬上に鞭をたれて、數里いまだ鷄鳴ならず。杜牧が早行の殘夢、小夜の中山に至りて忽ち驚く。

馬に寐て殘夢月遠し茶のけむり
松葉屋風瀑が伊勢に在りけるを、尋ね音信れて、十日ばかり足をとどむ。

びす、襟に一囊をかけて、手に十八の珠を携ふ。僧に似て塵あり、俗に似て髮なし。我僧にあらすといへども、浮屠の屬にたぐへて、神前に入る事をゆるさず。暮れて外宮に詣で侍りけるに、一の華表の陰ほのぐらく、御燈處々に見えて、また上もなき峯の松風、身にしむばかり、深き心を起して、

三十日月なし千とせの杉を抱く嵐
西行谷の麓に流あり、女どもの芋洗ふを見るに、

芋洗ふ女 西行ならば歌よまん

其日のかへるさ、或茶店に立寄りけるに、てふといひける女、あが名に發句せよと云うて、白き絹出しけるに、書付け侍る。

蘭の香や蝶の翅にたきものす

閑人の茅舎をとひて、

薦植ゑて竹四五本のあらしかな

長月の初 古郷に歸りて、北堂の萱草も霜枯果て、今は跡だになし。何事も昔にかはりて、はらからの鬢白く、眉皺よりて、只命ありてとのみ言うて、詞はなきに、兄の守袋

得萱草言樹之
昔萱草はうき
わすれぐさ、昔
は北堂にて母の
住む所

所は一本「所
にいたる此所
は」

牛をかくす大
木の形容
斧斤の罪伐採
の厄

廬山一白樂天の
草庵を營みて住
みし有名の地

をほどきて、母の白髮拜めよ、浦島の子が玉手箱、汝が眉もやと老いたり、暫く泣き

て、
手にとらば消ん涙ぞあつき秋の霜

大和國に行脚して、葛城の郡竹の内といふ所は、彼の千里が舊里なれば、日頃とどまり
て足を休む。藪より奥に家あり。

綿弓や琵琶に慰む竹の奥

二上山當麻寺に詣で、庭上の松を見るに、凡そ千年もへたるならん、大さ牛をかくすと
もいふべけん。かれ非情と雖も、佛縁にひかれて、斧斤の罪をまぬかれたるぞ、幸にし
て尊し。

僧あさがほいく死にかへる法の松

獨よし野の奥にたどりけるに、誠に山深く、白雲峯にかさなり、烟雨谷を埋んで、山賤
の家處々にちひさく、西に木を伐る音東に響き、院々の鐘の聲は、心の底に答ふ。昔よ
り此山に入つて、世を忘れたる人の多くは、詩にのがれ歌にかくる。いでや唐土の廬山
といはんも、亦むべならずや。或坊に一夜をかりて、

坊が妻抄に
「按ずるに、よし
野には喜藏院南
陽院などいへる
妻帯の寺ありと
ぞ」
とくく、の清水
一西行「とくと
くと落つる岩間
の若涌水くみは
す程もなき住居
かな」
扶桑一日本

義朝殿に云々
守武千句に「月
見てや常磐の里
へ歸るらん」と
いふ前句に「義
朝殿に似たる秋
風」と附けたる
をいふ

碓打つて我にきかせよや坊が妻
西上人の草の庵の跡は、奥の院より右の方、一二丁ばかり分け入る程、柴人の通ふ道のみ
はつかに有て、さかしき谷を隔てたる、いと尊し。彼とくく、の清水は、むかしに變ら
ずと見えて、今もとくく、と雫落ちける。

露とくく、試みに浮世すゝがばや

若是扶桑に伯夷あらば、必ず口を嗽がん。もし許由に告げば、耳を洗はん。
山を登り、坂を下るに、秋の日既に斜になれば、名ある所々見残して、先づ後醍醐帝の
御廟を拜む。

御廟年を経て忍ぶは何をしのぶ草

大和より山城を経て、近江路に入つて美濃に至る。今須山中を過ぎて、いにしへ常磐の
塚あり。伊勢の守武がいひける、義朝殿に似たる秋の風とは、何れの處か似たりけん。
我もまた、

義朝のこよろに似たり秋の風

不破、

秋風や藪もはたけも不破の關
 大垣に泊りける夜は、木因が家があるじとす。武藏野を出づる時、野ざらしを心に思ひて旅立ちければ、

死にもせぬ旅寐の果よ秋のくれ

桑名本當寺にて、

冬牡丹千鳥よ雪のほととぎす

草の枕に寐あきて、まだほのぐらき中に、濱のかたに出でて、

あけほのや白うを白き事一寸

熱田に詣づ。社頭大いに破れ、築地は倒れて草村に隠る。かしこに繩をはりて、小社の跡をしるし、爰に石をすゑて、其神と名のる。蓬しのぶ心のまよに生ひたるぞ、なかなかに目出度よりも、心とまりける。

しのぶさへ枯れて餅かふやどり哉

名護屋に入る。道の程諷吟す。

狂句 風の身は竹藪に似たる哉

一寸抄に「按ずるに杜子美白小詩に天然一寸魚、されば一寸は冬なるべし」なかに「に云々」華美を極めしより、寧ろこの荒漠の景に心とまれり
 竹藪一至於貧しく狂歌を樂しむたる醫師といふ狂句は字餘りに依ればこれにて一句

草まくら犬もしぐるよか夜の聲
 雪見にありきて、

市人よ此笠うらう雪の傘

旅人を見て、

馬をさへながむる雪のあした哉

海邊に日を暮して、

海くれて鴨の聲ほのかに白し

爰にわらぢを解き、かしこに杖を捨て、旅寐ながらに年の暮ければ、

としくれぬ笠著て草鞋はきながら

といひくも、山家にとしを越して、

誰が聲ぞ齒朶に餅おふうしの年

奈良に出づる道のほど、

春なれや名もなき山のうすがすみ

二月堂に籠りて、

市人よ云々一笠はかぶり蓋、傘はさしがさ、一笈日記に抱月亭と前書ありて、市人にて是うらん笠の雪翁、酒の戸たたく鞭のかれ梅抱月、と脇あり」と抄に見ゆ

うしの年一真享
 二丑年
 二月堂一四絹索院と號し、本尊は觀音にて若狹の井あり、若狹の國造敷明神に奉る水を汲む、一年早して水なく、荒僧井のは

とりにて若狭に
向ひ祈りしに水
出てし故事によ
り、毎年二月十
二日の夜水取の
式ありといふ
氷の僧一本
「こもりの僧」
鶴をぬすまれし
一林和靖の梅妻
鶴子の故事によ
る

水取や氷の僧のくつのおと
京に登りて、三井秋風が鳴瀧の山家をとふ。

梅林

梅白しきのふや鶴をぬすまれし
檜の木の花にかまはぬすがた哉
伏見西岸寺任口上人に逢ひて、

我衣にふしみの桃のしづくせよ

大津に至る道山路を越えて、

山路来て何やらゆかしすみれ草

湖水眺望

辛崎の松は花よりおほろにて

晝の休らひとて、旅店に腰をかけて、

躑躅生ひてその陰に干鱈さく女

吟行

菜島に花見顔なる雀かな
水口にて、二十年を経て故人にあふ。

命ふたつ中に生たるさくらかな

伊豆の國蛭ヶ小島の桑門、是も去年の秋より行脚しけるに、我名を聞きて草の枕の道連

にもと、尾張の國より跡をしたひ來りければ、

いざともに穂麥くらはん草枕

此僧われに告げて曰く、圓覺寺の大願和尚、ことし睦月のはじめ、遷化したまふよし、

まことや夢のことちせらるゝに、先づ道より其角がもとへ申しつかはしける。

梅戀ひて卵の花拜む涙かな

杜國におくる

白芥子にはねもぐ蝶の形見哉

二たび桐葉子がもとに在て、今やあづまに下らんとするに、

牡丹薬深く分け出る蜂の名残哉

甲斐の山中に立よりて、

圓覺寺一鎌倉、
大願和尚は俳名
を幻呼といひ、
其角が師とする
所といふ
梅戀ひて云々
大願師の遷化は
一月にて芭蕉が
之を聞き得たる
は四月なれば此
句あり

ゆく駒の麥になぐさむやどり哉
卯月の末庵にかへり、旅のつかれをはらすほどに
夏衣いまだ虱をとりつくさず

野ざらし紀行終

おくの細道

松尾芭蕉

月日は云々李
白、春夜宴桃李
園序、夫天地者
萬物之逆旅、光
陰者百代之過
客
江上の破屋、江
戸の芭蕉庵
道祖神、みちを
守る神
三里、驛の側な
る灸穴の稱
面八句、連歌百
韻の懷紙の第一
面の八句の稱
彌生も末の七日

月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人なり。船の上に生涯をうかべ、馬の口とらへて老をむかふるものは、日々旅にして旅をすみかとする。古人も多く旅に死せるあり予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず、海濱にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巢をはらひて、やと年も暮れ、春立てる霞の空に白川の關こえんと、そごろ神のものにつきて心をくるはせ、道祖神のまねきにあひて、取る物手につかず、股引の破をつどり、笠の緒付けかへて、三里に灸すゆるより、松島の月先心にかかりて、住める方は人に譲り、杉風が別墅にうつるに、

草の戸も住み替はる代ぞ雛の家

面八句を庵の柱に懸置き、彌生も末の七日、明ほの空朧々として、月は有明にて光を

おくの細道

三月二十七日
いつかはいつ
かは再び眺むべ
き

さまれるものから、不二の峯かすかに見えて、上野谷中の花の梢。又いつかはと心細し。
むつまじきかぎりは宵よりつどひて、船に乗りて送る。千住と云ふ所にて船をあがれば、
前途三千里の思ひ胸にふさがりて、幻のちまたに離別の泪をそよぐ。

行春や鳥啼き魚の目は泪

是を矢立の初として、行く道なほすよまず。人々は途中に立ちならびて、後かけの見の
る迄はと見送るなるべし。今年元祿二とせにや、奥羽長途の行脚、只かりそめに思ひ立
ちて、吳天に白髪のうちらみを重ねといへども、耳にふれていまだ目に見ぬさかひ、若し
生きて歸らばと、定めなき頼みの末をかけ、其日漸く早加といふ宿にたどり著きにけり。
瘦骨の肩にかよれる物先くるしむ。只身すがらにと出立ち侍るを、紙子一衣は夜の防ぎ、
浴かた雨具墨筆のたぐひ、あるはさがりたきはなむけなどしたるは、さすがに打捨てが
たくて、路次の煩となれるこそわりなけれ。

室の八島に詣つ。同行會良が曰く、此神は木の花さくや姫の神と申して、富士一體なり。
無戸室に入りて焼給ふ誓のみに、火々出見尊生れ給ひしより、室の八島と申す。又煙
を詠習し侍るもこの謂なり。はたこのしるといふ魚を禁す。縁起の旨世に傳ふ事も侍る

なり。

三十日、日光山の麓に泊る。あるじの云ひけるやう、我名を佛五左衛門と云ふ、萬正直を
旨とする故に人かくは申し侍るまよ、一夜の草の枕も打解けて休み給へと云ふ。いかな
る佛の濁世塵土に示現して、かよる桑門の乞食順禮ごときの人をたすけ給ふにやと、ある
じのなすことに心をとどめて見るに、唯無智無分別にして正直偏固の者也。剛毅木訥仁
に近きたぐひ、氣稟の清質尤も尊ぶべし。

卯月朔日、御山に詣拜す。往昔此御山を二荒山と書きしを、空海大師開基のとき、日光と
改め給ふ。千歳未來をさとり給ふにや、今此御光一天にかどやきて、恩澤八荒にあふれ、
四民安堵のすみか穩かなり。猶憚多くて筆を擱きぬ。

あらたふと青葉若葉の日の光

黒髪山は霞かよりて、雪いまだ白し。

剃り捨てよ黒髪山に衣がへ

會良

會良は河合氏にして總五郎と云へり。芭蕉の下葉の軒をならべて、予が薪水の勞をたす
く。このたび松しま象潟の眺共にせんことを悦び、且は羈旅の難をいたはらんと、旅立

家は出入口なき
詠習し室の八
島のけぶりと歌
に詠み習はし

柔門一沙門、僧

剛毅云々論語
「剛毅木訥近仁」

此御光一徳川家
康公の盛光
八荒一八方荒遠
の地

髪を剃て云々
芭蕉の僧體なり
し事は、前の野
ざらし紀行に見
えたり、當時俳
人の姿態也

夏一結夏の略、
結制又は安居と
をいひ、舊四月
十五日より九十
日間僧の籠り居
て修行すること

いかゞすべきや
語物か、以下返
し玉へまで野夫
の語
うね、しき
道のうね、と
曲りたること、
那須野の道多き
は古來有名也、
一本、うひ、
しきとあり下

に續けてなれぬ
旅人の意に解す
獨一人
玉藻の前、和漢
三才圖會に詳也

修驗一山伏

足駄を拜む一行
者堂は役小角を
祀る所、小角の
像は必ず木履を
著けたる形に作
る也
佛頂和尚もと
東郡深川長慶寺
に住し、後此雲
山寺に隠棲せる
禪僧
あくある一奥深
き

つ噴髪を剃て黒染にさまをかへ、惣五を改めて宗悟とす。仍て黒髮山の句有り。衣更
の二字力ありて聞ゆ。

二十餘丁山を登りて瀧有り、岩洞の頂より飛流して、百尺千岩の碧潭に落ちたり。岩窟
に身をひそめ入りて瀧の裏よりみれば、うらみの瀧と申し傳へ侍るなり。

暫時は瀧にこもるや夏のはじめ

那須の黒羽と云ふ所に知る人あれば、是より野越にかよりて、直道をゆかんとす。遙に
一村を見かけて行くに、雨降り日暮る。農夫の家に一夜をかりて、明くれば又野中を行
く。そこに野飼の馬あり。草刈るをのこに歎きよれば、野夫といへどもさすがに情し
ぬには非ず、いかゞすべきや、されども此野は縦横にわかれてうねくしき、旅人の道
ふみたがへんあやしう侍れば、此馬のとどまるところにて馬を返し給へと、かし侍りぬ。
ちひさきものふたり馬の跡したひて走る。獨は小姫にて、名をかさねと云ふ。聞きなれ
ぬ名のあやしかりければ、

かさねとは八重撫子の名なるべし

頼て人里に至れば、あたひを鞍壺に結付けて馬をかへしぬ。黒羽の館代淨坊寺何がしの

方に音信る。思ひかけぬあるじの悦び、日夜語りつゞけて、其弟桃翠などいふが、朝夕勤
めとぶらひ、自の家にも伴ひて、親屬のかたにもまねかれ、日をふるまよに、一日郊外
に逍遙して、犬追物の跡を一見し、那須の篠原をわけて、玉藻の前の古墳をとふ。夫より
八幡宮に詣で、與市が扇の的を射し時、別しては我國氏神正八幡とちかひしも、此神社
にて侍ると聞けば、感應殊にしきりに覺えらる。暮るれば桃翠宅に歸る。

修驗光明寺と云ふ有り、そこにまねかれて行者堂を拜す。

夏山に足駄を拜む首途かな

當國雲岸寺のおくに 佛頂和尚の山居の跡あり。

堅横の五尺にたらぬ草の庵

むすぶもくやし雨なかりせば

と、松の炭して岩に書き付け侍りといつぞや聞え給ふ。其跡見んと、雲岸寺に杖を曳けば、
人々すよんで共にいざなひ、若き人多く道のほど打さわぎて、おほえす彼籠に至る。山は
奥あるけしきにて、谷道遙かに、松杉黒く、苦したよりて、卯月の天今なほ寒し。十景盡る
所、橋をわたりて山門に入る。さてかの跡はいづくの程にやと、後の山によちのほれば、

妙禪師云々一菅
孤抄に「妙禪
は中華宋朝の僧
にて、高峯と云
ふ山に處り、生
涯戸を閉じて出
ず、法雲は法
運の誤なるべ
し、石室に籠り、
馬糞を焚き、芋
を煮て食ひし僧
云々」

殺生石一玉藻前
となりし狐義明
に射殺され、後
百年餘にして其
靈化してなりた
りといふ石、其
石に觸れば生物
皆死す、蓋し砒
石の類なるべし
といふ
清水ながるゝの
柳一西行「道の
邊に清水流るゝ
柳かげ暫しとて
こそ立ちとま
つれ」
いかで都へと
指道集「便あり

石上の小庵、岩窟にむすびかけたり。妙禪師の死關、法雲法師の石室をみるがごとし。

木啄も庵はやぶらず夏木立

と、とりあへぬ一句を柱に残し侍りし。是より殺生石に行く。館代より馬にておくらる。此口付のをとこ、短冊を得させよと乞ふ。やさしき事を望みはんべるものかなと、

野を横に馬ひきむけよ郭公

殺生石は温泉のいづる山かけにあり、石の毒氣いまだほろびず、蜂蝶のたぐひ、眞砂の色の見えぬほどかさなり死す。又清水ながるゝの柳は、蘆野の里にありて、田の畔に残る。此所の郡守戸部某の、此柳見せばやなど折々にのたまひ聞え給ふを、いづくの程にやと思ひしを、今日此柳のかけにこそ立ちより侍れ。

田一枚植ゑて立去る柳かな

心許なき日かず重なるまよに、白川の關にかよりて、旅心定りぬ。いかで都へと、便求めしもことわりなり。中にも此關は三關の一にして、風騒の人心をとどむ。秋風を耳に残し、紅葉を佛にして、青葉の梢なほあはれ也。卯の花の白妙に、茨の花の咲きそひて、雪にもこのゆる心地とする。古人冠を正し、衣装を改めし事など、清輔の筆にもと

どめおかれしとぞ。

卯の花をかざしに關の晴者かな

とかくして越行くまよに、阿武隈川を渡る。左に會津根高く、右に岩城相馬三春の庄、常陸下野の地をさかひて、山つらなる。かけ沼と云ふ所を行くに、今日は空曇りて物影うつらず。須賀川の驛に等窮といふものを尋ねて、四五日とどめらる。先白川の關いかにこえつるやと問ふ。長途のくるしみ身心つかれ、且は風景に魂うばはれ、懷舊に腸を断ちて、はかしくしう思ひめぐらさず。

風流のはじめやおくの田植うた

無下にこえんもさすがにと語れば、脇第三とつゞけて一卷となしぬ。此宿の傍に大きな栗の木蔭をたのみて、世をいとふ僧有り、椽拾ふ深山もかくやと間に覚えられて、もの書き付け侍る。其詞、
栗といふ文字は、西の木と書いて、西方淨土に便ありと、行基菩薩の一生杖にも柱にも此木を用ひ給ふとかや。

世の人の見付けぬ花や軒の栗

はのかで都へ告
げやらん今日白
川の關はこゆる
と
秋風一能因「都
をば霞と共に出
てしかど秋風ぞ
吹く白川の關」
青葉の梢一頼政
「都にはまだ青
葉にて見しかど
も紅葉散りしく
白川の關」
古人云々一清輔
の袋舄子にある
竹田太夫國行の
話
會津根一會津の
山
かげ沼一後世鏡
沼といふ所にし
て、笠石と須賀
川の間なる新田
也、近年又鏡田
ともいふ
椽拾ふ一山家集
「山深み岩にせ
かるゝ水ためん
かつ、落つる
とも拾ふほど」

檜皮―日和田
かつみ―舊説眞
蕪の事といへど
も、花かつみと
て花を稱する點
より見れば、或
は花苜蓿の類か
ともいへり
黒塚の岩屋―安
達原にある有名
なる所
しのぶ文字摺―
「みちのくのし
のぶ文字摺り誰
ゆゑに」の歌を
始め、古來最も
有名也、此石の
圖本文庫「東遊
記」に載せたり
大手―追手 城
の正面
二人の嫁―佐藤
次信忠信二人の
妻、兄弟戦死の
後甲冑を著して
遺れる老母を慰
めしが、その姿
の木堂を安置し
甲冑堂といふ
此石の石碑―啓

等窮が宅を出でて五里ばかり、檜皮の宿を離れて、あさか山有り、路より近し。此あたり沼多し。かつみ刈る頃もやと近うなれば、いづれの草を花かつみとは云ふぞと、人々に尋ね侍れども、更に知る人なし。沼を尋ね、人にとひ、かつみくと尋ねありきて、日は山の端にかよりぬ。二本松より右にきれて、黒塚の岩屋一見し、福島に宿る。あくればしのぶ文字摺の石を尋ねて、忍ぶの里に行く。遙山陰の小里に、石なかば土に埋れてあり。里の童の來りて教へける。昔は此山の上に侍しを、往來の人の麥草をあらして、此石をこよろみ侍るをにくみて、此谷へつき落せば、石の面下さまにふしたりと云ふ。さもあるべき事にや。

早苗とる手もとや昔しのぶ摺

月の輪のわたしを越えて、瀬の上と云ふ宿に出づ。佐藤の庄司が舊跡は、左の山際一里半ばかりに有り。飯塚の里鯖野と聞きて、尋ねく行くに、丸山といふに尋ねあたる。是庄司が舊館也。麓に大手の跡など、人の教ふるにまかせて泪を落し、又かたはらの古寺に一家の石碑を残す。中にも二人の嫁がしるし先哀なり。女なれどもかひなくしき名の世に聞えつる物かなと、袂をぬらしぬ。鹽涙の石碑も遠きにあらず。寺に入りて茶を

乞へば、爰に義經の太刀、辨慶が笈をとどめて什物とす。

笈も太刀も五月にかざれ紙幟

の羊祐の徳を慕
ひて死後百姓相
圖りて其平生遊
憩の處に建てし
碑、之を望む者
皆涙を流したる
よりいふ
消入るばかり―
苦痛の甚しきを
いふ
道祖神の社―八
雲御抄に「或説
に云ふ、實方笠
島の道祖神の前
を下馬なくして
通り給へりけれ
ば、神前にて馬
たふれて、實方
卒すと云ふ、今
に實方の廟其社
の傍にありとい
へり」
形見のすき―
西行「朽ちもせ
ぬ其名ばかりを
止め置きて枯野
の薄かたみとぞ
見る」

五月朔日のことなり。其衣飯塚にやどる。温泉あれば、湯に入りて宿をかるに、土座に筵を敷きて、あやしき貧家なり。灯もなければ、るろりの火かけに寢所をまうけて臥す。夜に入りて雷鳴り雨しきりに降りて、臥せる上よりも、蚤蚊にさよれて眠らず。持病さへおこりて、消入るばかりになん。短夜の空もやうく明くれば、又旅立ちぬ。猶夜の餘波心すよまず、馬かりて桑折の驛に出づる。遙なる行末をかよへて、斯る病覺束なしといへども、羈旅邊土の行脚、捨身無常の觀念、道路に死なん是天の命なりと、氣力聊とり直し、路縦横に踏みて、伊達の大木戸をこす。笠摺白石の城を過ぎ、笠島の郡に入れば、藤中將實方の塚はいづくのほどならんと、人にとへば、是より遙右に見ゆる山際の里を、みのわ笠島と云ふ、道祖神の社、かたみの薄今にありと教ふ。此頃の五月雨に、道いとあしく、身つかれ侍れば、よそながら眺めやりて過ぐるに、笠輪笠島も五月雨の折にふれたりと、

笠島はいづこ五月のぬかり道

岩沼に宿る。

武隈の松にこそ目覺むる心地はすれ。根は土際より二木にわかれて、昔の姿うしなはずと知らる。先能因法師思ひ出づ。往古むつの守にて下りし人、此木を伐て名取川の橋杭にせられたる事などあればにや、松は此たび跡もなしとは詠まれたり。代々あるは伐り、あるは植繼ぎなどせしと聞くに、今將に千歳のかたちとよのほひて、めでたき松のけしきになん侍りし。

武隈の松見せ申せ遅ざくら

舉白

と云ふものの錢別したりければ、

櫻より松は二木を三月越

名取川を渡りて仙臺に入る。あやめ葺く日也。旅宿をもとめて四五日逗留す。爰に畫工加右衛門と云ふものあり。聊心ある者と聞きて、知る人になる。この者年頃さだかならぬ名どころを考へ置き侍ればとて、一日案内す。宮城野の萩茂りあひて、秋の氣色思ひやらるよ。玉田よこ野つよじが岡はあふひ咲くころ也。日影ももらぬ松の林に入りて、爰を木の下と云ふとぞ。昔もかく露ふかければこそ、みさぶらひみかさとはよみたれ。藥

下りし人、和漢三才圖會「孝義任國時、剪之用焉名取川橋」

松は此たび後拾遺能因「武隈の松はこのた

び跡もなし千年を経てや我は來つらん」

あやめ葺く日一五月五日

さだかならぬ名どころ、其位置の明瞭に世に知られざる名所

今大歌所、御歌みさぶらひみかさ

かきと申せ宮城野の木の下露は雨にまされり」

十編菅菰一方角抄「みちのくの十ふの菅菰しふには君をしなして三ふに我ねん」

壺碑一本、下に「市川村多賀城にあり」の句あり
數里十里數の誤
か
嶺一惠美の朝臣名は朝獨（アサカリ）

師堂天神の御社など拜みて、其日はくれぬ。猶松島鹽釜の所々畫に書きて送る。且紺の染緒つけたる草鞋二足 錢す。さればこそ風流のしれもの、爰に至りて其實を顯す。

あやめ草足にむすばん草鞋の緒

かの畫圖にまかせてたどり行けば、おくの細道の山際に十編の菅あり。今も年々十編菅菰を調じて國守に獻すと云へり。

壺碑

つほの石ぶみは高さ六尺餘、横三尺計歟。苔を穿ちて文字幽也。

四維國界之數里をしるす。「此城神龜元年按察使鎮守府將軍大野朝臣東人之所置也。天平寶字六年參議東海東山節度使同將軍惠美朝臣獨修造也十二月朔日」と有り、聖武天皇の御時に當れり。むかしよりよみ置ける歌枕多く語り傳ふといへども、山崩れ川落ちて道あらたまり、石は埋れて土にかくれ、木は老て若木にかはれば、時移り代變じて、其跡たしかならぬ事のみを、爰に至つて疑なき千歳の記念、今眼前に古人の心を閱す。行脚の一徳存命の悦び、羈旅の勞をわすれて、泪落つるばかりなり。

それより野田の玉川、沖の石を尋ぬ。末の松山は寺を造りて、末松山といふ。松のあひあ

はねをかはし云一長恨歌在天願作比翼鳥在地願爲連理枝つなでかなしも一實朝一世の中は常にもがもななきさごくあまの小舟の綱手悲しも

九初一初は八尺、甚だ高き形容、あたらあたら和泉三郎一名は忠衡、秀衡の三男にて、よく父の遺命を守り、義経に従ひて高館に戦死す誠云々六韜名亦從之、操名亦從之、ことふりにたれど、事新しくいふ迄もなき事なれど、扶桑一日本

ひ皆墓ばらにて、はねをかはし枝をつらぬる契の末も、終はかくの如きと悲しさも増りて、鹽がまの浦に入相のかねを聞く。五月雨の空、聊はれて、夕月夜幽に、籬が島もほど近し。螢の小舟こぎつれて、肴わかつ聲々に、つなでかなしもとよみけん心も知られて、いと哀なり。其夜目盲法師の琵琶をならして、奥淨瑠璃と云ふものをかたる。平家にもあらず、舞にもあらず、ひなびたる調子うち上げて、枕ちかうかしましけれど、さすがに邊土の遺風忘れざるものから、殊勝に覺えらる。早朝鹽釜の明神に詣つ。國守再興せられて、宮柱ふとしく、彩椽きらびやかに、石の階九初に重り、朝日あけの玉がきをかどやかす。かよる道の果、塵土の境まで、神靈あらたにましますこそ我國の風俗なれと、いと貴けれ。神前に古き寶燈有り、かねの戸びらの面に、文治三年和泉三郎寄進と有り。五百年來の佛、今日の前にうかびて、そごろに珍らし。渠は勇義忠孝の士也、佳命今に至りてしたはずといふ事なし。誠に人能く道を勤め義を守るべし、名もまた是にしたがふと云へり。日既に午にちかし、船をかりて松島にわたる。其間二里餘、雄島の磯につく。抑、ことふりにたれど、松島は扶桑一の好風にして、凡洞庭西湖に恥ぢず、東南より海

浙江一安那錢塘に在り、水勢曲折して湖頭に激起するを以て此名ありといふ、こくは比喩として用ひたる事元より也、蒼然一深遠なる鏡、美人の形容大山ずみ一正しくは大山つみ、大山祇神とて山を掌る神の名

江上一江のほとり

を入れて、江の中三里浙江の潮をたよふ。島々の數をつくして、敬つものは天を指し、ふすものは波に匍匐ふ。あるは二重にかさなり、三重にたよみて、左にわかれ、右につらなる。負へるあり抱けるあり、兒孫を愛するがごとし。松の緑こまやかに、枝葉汐風に吹きたわめて、屈曲おのづから矯たるがごとし。其氣色窅然として美人の顔を粧ふ。ちはやぶる神のむかし、大山すみのなせるわざにや。造化の天工、いづれの人か筆をふるひ詞を盡さん。雄島が磯は地つゞきて、海に出づる島なり。雲居禪師の別室の跡、坐禪石など有り。將松の木蔭に世をいとふ人も稀に見え侍りて、落穂松笠など打ちけぶりたる草の庵、閑に住みなし、いかなる人とは知られずながら、まづなつかしく、立寄るほどに、月海にうつりて、晝のながめ又あらたむ。江上に歸りて宿を求めば、窓をひらき二階を作りて、風雲の中に旅寐するこそ、あやしきまで妙なる心地はせらるれ。松島や鶴に身をかれほとよぎす。予は口をちて眠らんとしていねられず。舊庵をわかるよ時、素堂松島の詩あり。原安適松がうらしまの和歌を贈らる。袋を解いてこよひの友とす。且杉風濁子が發句あり。

會 良

見佛聖一、元享釋書一見佛居、奥州松島一、中巻、精勤苦練一十二年、其間誦法華、薦六萬部、其後不計其數、摩顯靈應一云々、雉兔薊蕘一獵人、や草刈り木こり、孟子文王之困方七十里、芻蕘者往焉、雉兔者往焉、こがね花咲く一萬葉集、大伴家持一、すめらぎの御代榮えんとおづまなるみちのく山にこがね花咲く一、まどしき一貧しき

十一日、瑞岩寺に詣つ。當寺三十二世の昔、眞壁の平四郎出家して入唐、歸朝の後開山す。其後雲居禪師の徳化に依て、七堂葺改りて金壁莊嚴光を輝し、佛土成就の大伽藍となれりける。彼見佛聖の寺はいづくにやとしたはる。十二日、平和泉を心ざし、あねはの松、緒だえの橋など聞傳へて、人跡稀に、雉兔薊蕘の往きかふ道、そこともわかず、終に道ふみたがへて石の巻といふ湊に出づ。こがね花咲くとよみて奉りたる金花山、海上に見わたし、數百の廻船入江につどひ、人家地をあらそひて、竈の煙立ちつどけたり。思ひかけず斯る所にも來れるかなと、宿からんとすれど、更に宿かす人なし。漸うまどしき小家に一夜をあかして、明くれば又しらぬ道まどひ行く。袖のわたり、尾ぶちの牧、まよの萱原などよそめに見て、遙なる堤を行く。心細き長沼にそうて、戸伊摩といふところに一宿して、平泉に至る。其間廿餘里程とおほゆ。三代の榮耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなたに有り。秀衡が跡は田野に成りて、金鶴山のみ形を残す。先高館にのほれば、北上川南部より流るゝ大河也。衣川は和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落入る。康衡が舊跡は衣ヶ關を隔て、南部口をさし堅め、夷をふせぐと見えたり。儲も義臣すくつて此城にこもり、功名一時の叢となる。

衛、康衡、忠衡のよく父の遺命を奉じ難に殉じたるをいふ

國破れて山河あり、城春にして草青みたりと、笠打敷きて時の遷るまで泪を落し侍りぬ。夏草やつはものどもが夢の跡

國破れて一杜甫春望詩一國破山河在、城春草木深一

兼ねて耳驚かしたる二堂開帳す。經堂は三將の像を残し、光堂は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七寶散りうせて珠の屏風にやぶれ、金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廢空虛の叢と成るべきを、四面新に圍んで、薨を覆うて風雨を凌ぐ。暫時千歳の記念とはなれり。

兼房一増尾十郎といふ、義經記に「十郎權頭兼房白き直垂に袴の袴著て白髪まじりのもとより引き亂し」云々

五月雨のふり残してや光堂

封人一境を守る役人よしなき一つまらぬ

あるじの云ふ、是より出羽の國の大山を隔てて、道さだかならざれば、道しるべの人を頼みて越ゆべきよしを申す。さらばと云ひて、人を頼み侍れば、究竟の若者、反脇指を

南都道遙にみやりて、岩手の里に泊る。小黑崎みつの小島を過ぎて、なるこの湯より尿前の關にかよりて、出羽の國に越えんとす。此道旅人稀なる所なれば、關守にあやしめられて、漸うとして關をこす。大山に登つて日既に暮れければ、封人の家を見かけて舍をもとむ。三日風雨あれて、よしなき山中に逗留す。

蚤虱馬の尿するまくらもと

あるじの云ふ、是より出羽の國の大山を隔てて、道さだかならざれば、道しるべの人を頼みて越ゆべきよしを申す。さらばと云ひて、人を頼み侍れば、究竟の若者、反脇指を

あるじの云ふ、是より出羽の國の大山を隔てて、道さだかならざれば、道しるべの人を頼みて越ゆべきよしを申す。さらばと云ひて、人を頼み侍れば、究竟の若者、反脇指を

あるじの云ふ、是より出羽の國の大山を隔てて、道さだかならざれば、道しるべの人を頼みて越ゆべきよしを申す。さらばと云ひて、人を頼み侍れば、究竟の若者、反脇指を

あるじの云ふ、是より出羽の國の大山を隔てて、道さだかならざれば、道しるべの人を頼みて越ゆべきよしを申す。さらばと云ひて、人を頼み侍れば、究竟の若者、反脇指を

あるじの云ふ、是より出羽の國の大山を隔てて、道さだかならざれば、道しるべの人を頼みて越ゆべきよしを申す。さらばと云ひて、人を頼み侍れば、究竟の若者、反脇指を

あるじの云ふ、是より出羽の國の大山を隔てて、道さだかならざれば、道しるべの人を頼みて越ゆべきよしを申す。さらばと云ひて、人を頼み侍れば、究竟の若者、反脇指を

あるじの云ふ、是より出羽の國の大山を隔てて、道さだかならざれば、道しるべの人を頼みて越ゆべきよしを申す。さらばと云ひて、人を頼み侍れば、究竟の若者、反脇指を

あるじの云ふ、是より出羽の國の大山を隔てて、道さだかならざれば、道しるべの人を頼みて越ゆべきよしを申す。さらばと云ひて、人を頼み侍れば、究竟の若者、反脇指を

あるじの云ふ、是より出羽の國の大山を隔てて、道さだかならざれば、道しるべの人を頼みて越ゆべきよしを申す。さらばと云ひて、人を頼み侍れば、究竟の若者、反脇指を

あるじの云ふ、是より出羽の國の大山を隔てて、道さだかならざれば、道しるべの人を頼みて越ゆべきよしを申す。さらばと云ひて、人を頼み侍れば、究竟の若者、反脇指を

あるじの云ふ、是より出羽の國の大山を隔てて、道さだかならざれば、道しるべの人を頼みて越ゆべきよしを申す。さらばと云ひて、人を頼み侍れば、究竟の若者、反脇指を

あるじの云ふ、是より出羽の國の大山を隔てて、道さだかならざれば、道しるべの人を頼みて越ゆべきよしを申す。さらばと云ひて、人を頼み侍れば、究竟の若者、反脇指を

あるじの云ふ、是より出羽の國の大山を隔てて、道さだかならざれば、道しるべの人を頼みて越ゆべきよしを申す。さらばと云ひて、人を頼み侍れば、究竟の若者、反脇指を

あるじの云ふ、是より出羽の國の大山を隔てて、道さだかならざれば、道しるべの人を頼みて越ゆべきよしを申す。さらばと云ひて、人を頼み侍れば、究竟の若者、反脇指を

あるじの云ふ、是より出羽の國の大山を隔てて、道さだかならざれば、道しるべの人を頼みて越ゆべきよしを申す。さらばと云ひて、人を頼み侍れば、究竟の若者、反脇指を

あるじの云ふ、是より出羽の國の大山を隔てて、道さだかならざれば、道しるべの人を頼みて越ゆべきよしを申す。さらばと云ひて、人を頼み侍れば、究竟の若者、反脇指を

あるじの云ふ、是より出羽の國の大山を隔てて、道さだかならざれば、道しるべの人を頼みて越ゆべきよしを申す。さらばと云ひて、人を頼み侍れば、究竟の若者、反脇指を

あるじの云ふ、是より出羽の國の大山を隔てて、道さだかならざれば、道しるべの人を頼みて越ゆべきよしを申す。さらばと云ひて、人を頼み侍れば、究竟の若者、反脇指を

あるじの云ふ、是より出羽の國の大山を隔てて、道さだかならざれば、道しるべの人を頼みて越ゆべきよしを申す。さらばと云ひて、人を頼み侍れば、究竟の若者、反脇指を

あるじの云ふ、是より出羽の國の大山を隔てて、道さだかならざれば、道しるべの人を頼みて越ゆべきよしを申す。さらばと云ひて、人を頼み侍れば、究竟の若者、反脇指を

あるじの云ふ、是より出羽の國の大山を隔てて、道さだかならざれば、道しるべの人を頼みて越ゆべきよしを申す。さらばと云ひて、人を頼み侍れば、究竟の若者、反脇指を

雲端につちふる
一鳥聲きかず、木の下闇茂りあひて、夜行くがごとし。雲端につちふる心地して、篠の中踏分けく、水をわたり、岩に蹶いて、肌につめたき汗を流して、最上の庄に出づ。かの案内せしをのこの云ふやう、此道必ず不用の事有り、恙なうおくりまらせて仕合したりとよろこびてわかれぬ。跡に聞きてさへ、胸とどろくのみなり。

尾花澤にて清風と云ふ者を尋ぬ。かれは富める者なれども、志いやしからず、都にも折々かよひて、流石に旅の情をも知りたれば、日比とどめて、長途のいたはり、さまざままにもてなし侍る。

涼しさを我宿にしてねまるなり
這出でよかひやが下の蟾の聲
まゆはきを俤にして紅粉の花
蠶飼する人は古代のすがたかな
山形領に立石寺と云ふ山寺あり、慈覺大師の開基にて、殊に清閑の地也、一見すべきと

會良

し、人々のすゝむるによりて、尾花澤よりとつてかへし、其間七里ばかり也。日いまだ暮れず、籠の坊に宿かり置きて、山上の堂にのほる。岩に巖を重ねて山とし、松柏年舊り土石老いて、苔滑に、岩上の院々扉を閉ぢて、物音きこえず、岸をめぐり、君を這うて、佛閣を拜し、佳景寂莫として、心すみ行くのみおほゆ。

閑さや岩にしみ入る蟬の聲

最上川をのらんと、大石田と云ふ所に日和を待つ。爰は古き俳諧の種こほれて、忘れぬ花の昔をしたひ、蘆角一聲の心を和け、此道にさぐり足して、新古ふた道にふみ迷ふと雖も、道しるべする人しなればと、わりなき一卷残しぬ。このたびの風流爰に至れり。

最上川はみちのくより出でて、山形を水上とす。ごてん、はやぶさなど云ふおそろしき難所あり、板敷山の北を流れて、果は酒田の海に入る。左右山覆ひ、茂みの中に船を下す。是に稻つみたるをや、いな船とはいふならし。白糸の瀧は青葉の隙々に落ちて、仙人掌岸に臨みて立、水みなぎりて舟あやふし。

五月雨をあつめて早し最上川

六月三日、羽黒山に登る。圖司左吉と云ふ者を尋ねて、別當代會覺阿闍利に調す。南谷の

おくの細道

のらんと一舟に
蘆角一聲古風の俳諧をたとふ
いな船古今集「最上川のほれば下るいな船のいなにはあらず此月ばかり」

あるじ一響應

別院に舎して、憐愍の情こまやかにあるじせらる。
四日、本坊におひて俳諧興行。

有りがたや雪をかをらす南谷

月山、湯殿一月山は頂上にて、西の中腹庄内の方なるをば羽黒山、東の中腹最上の方なるを湯殿山といふ

五日、権現に詣づ。當山開闢能除大師はいづれの代の人と云ふ事をしらす。延喜式に羽州里山の神社と有り。書寫黒の字を里山になせるにや。羽州里山を中略して羽黒山と云ふにや。出羽といへるは、鳥の毛羽を此國の貢に獻ると風土記に侍るとやらん。月山、湯殿を合せて三山とす。當寺武江東叡に屬して、天台止觀の月明らかに、圓頓融通の法の燈かよけそひて、僧坊棟をならべ修驗行法を勵し、靈山靈地の驗効人貴び且恐る。繁榮長にして、めでたき御山と謂ひつべし。

木綿じめ一紙縹にて作りたる修驗袈裟

八日、月山にのほる。木綿じめ身に引かけ、寶冠に頭を包み 強力と云ふ者に導かれて、雲霧山氣の中に氷雪を踏んでのほる事八里、更に日行道の雲關に入るかとあやしまれ、息たえ身ごどえて、頂上に臻れば、日没ちて月顯る。笹を鋪き篠を枕として、臥して明くるを待つ。日出でて雲消ゆれば、湯殿山に下る。谷の傍に鍛冶小屋と云ふ有り。此國の鍛冶、靈水を選んで爰に潔齋して劍を打つ。終に月山と銘を切て世に賞せらる。彼龍泉に刃

龍泉に云々一史記註の晉大康地理記に汝南西平縣有龍淵水可用洗刀劍

干將莫耶一古への二名劍

歌の哀一金葉集「行尊大峯にて思ひかけず櫻の咲きたりけるを見てよめる、もろ共に哀と思へ山櫻花より外に知る人もなし」

錢ふむ一管菰抄「此山中の法にて地へ落ちたるものを取る事能はず、故に道者の投擲せし金銀は小石の如く錢は土砂にひとし、人其上を往來す」

を淬すとかや、干將莫耶のむかしをしたふ、道に堪能の執あさからぬ事しられたり。岩に腰をかけて、しばしやすらふほどに、三尺ばかりなる櫻のつほみ半ばひらけるあり。ふり積む雪の下に埋れて、春を忘れぬ遅さくらの花の心わりなし。炎天の梅花爰にかをるがごとし。行尊僧正の歌の哀も、爰に思ひ出で、まさりて覺ゆ。惣て此山中の微細、行者の法式として他言する事を禁ず。仍て筆をとどめて記さず。坊に歸れば、阿闍利の需に依て、三山順禮の句々短冊に書く。

涼しさやほの三日月の羽黒山
雲の峯いくつ崩れて月の山
語られぬ湯殿にぬらす袂かな
湯殿山錢ふむ道のなみだかな

會 良

羽黒山を立て、鶴ヶ岡の城下長山氏重行と云ふものよふの家にむかへられて、俳諧一卷有り。左吉も共に送りぬ。川舟に乗つて酒田の湊に下る。淵庵不玉と云ふ醫師の許に宿とす。

あつみ山や吹浦かけて夕すどみ

方寸を責め一管
孤抄に方寸は土
地などはかる
語、責むは争ふ
意にて、はるば
るの旅路もはや
行先象潟ばかり
に成りたりとの
意と解せり
闇中に真作一暮
索の誤か、くら
かりにてさぐり
知る意
雨も又奇云々
東坡西湖の詩
「水光瀲灩晴偏
好、山色空濛雨
又奇」の句
花の上こぐー西
行「ささかたの
櫻は波にうづも
れて花の上こぐ
あまのつり船」

西施一交那の古
美人、東坡西湖
の詩下の二句に
「西施一交那、
美人一交那」

西施、淡粧濃抹
兩相宜
はぎぬれて一照
濡れてなるべし

一ぶりー一振、
兩越の境、越後
に屬し高田侯の
封

六日云々七月
七日七夕の前夜
の感じ

寐たるにの下一
一本一問を隔
てて表の方に若
き女」とあり

暑き日を海にいたり最上川

江山水陸の風光數をつくして、今象潟に方寸を責め、酒田の湊より東北の方、山を越え磯を傳ひ、いさごをふみて、其際十里、日影やかたぶく比、汐風眞砂を吹上げ、雨朦朧として鳥海の山かくる。闇中に莫作して雨も又奇なりとせば、雨後の晴色又頼もしと、蟹の苦屋に膝をいれて、雨晴るよを待つ。其朝天能く霽れて、朝日花やかにさし出づる程に、象潟に舟をうかぶ。先づ能因島に舟を寄せて三年幽居の跡をとぶらひ、むかふの岸に舟をあがれば、花の上こぐとよまれし櫻の老木、西行法師の記念をのこす。江上に御陵あり、神功皇后の御墓といふ。寺を干満珠寺と云ふ。此處に行幸ありし事いまだ聞ず。いかなる事にや。此寺の方丈に座して簾を捲けば、風景一眼の中に盡きて、南に鳥海天をさよへ、其陰うつりて江にあり。西はむやくの關路をかぎり、東に堤を築いて、秋田に通ふ道、遙に海北にかまへて、浪打入る所を汐こしと云ふ。江の縦横一里ばかり、倭松島にかよひて又異なり。松島は笑ふがごとく、象潟はうらむがごとし。寂しさに悲しみをくはへて、地勢魂をなやますに似たり。象潟や雨に西施がねぶの花

汐越や鶴はぎぬれて海涼し

祭 禮

象潟や料理何くふ神まつり

蟹の家や戸板を敷きて夕涼

岩上に鵬鳩の巢を見る

波こそぬ契ありてやみさごの巢

酒田の餘波日を重ねて、北陸道の雲に望み、遙々のおもひ胸をいたしまして、加賀の府

まで百卅里と聞く。鼠の關をこゆれば、越後の地に歩行を改めて、越中の國一ぶりの關に

到る。此間九日、暑濕の勞に神をなやまし、病おこりて事をしるさず。

文月や六日も常の夜には似ず

荒海や佐渡によこたふ天の川

今日は親しらず子しらず、犬もとり、駒返など云ふ北國一の難所を越えて、つかれ侍れ

ば、枕引きよせて寐たるに、西の方に若き女の聲二人ばかりときこゆ、年老たるをの

この聲も交り物語するをきけば、越後國新潟と云ふ所の遊女なりし。伊勢參宮すると

美濃の國の商人

會 良
低 耳

會 良

白波の云々古
今「白なみのよ
する汀に世をす
ぐすあまの子あ
れば宿も定め
ず」あまの子は
遊女の稱、子よ
り此と接して世
あさましうと
續けたる也
衣の上の云々
芭蕉等が僧形な
るを見て依頼せ
る也

くろべ一黒部
川、越中三日市
と魚津との間を
流る
擔籠の藤浪一擔
籠は多古、多胡
也、拾遺集、名所
多胡のうらちの
底さし向ふ藤波
をかざして行か
ぬ見だ人のた

て、此關迄をのこの送りて、あすは古郷へかへす文したよめて、はかなき言傳などしや
る也。白波のよする汀に身をはふらかし、あまのこの世をあさましう下りて、定なき契
日々の業因いかにつたなしと、物いふをきくまゝ寐入りて、あした旅立つに、我々にむ
かひて、行衛しらぬ旅路のうさ、あまり覺束なう悲しく侍れば、見えがくれにも御跡を
したひ侍らん、衣の上の御情に、大慈のめぐみをたれて、結縁せさせ給へと、泪を落す。
不便の事には侍れども、我々は所々にてとどまる方おほし、只人の行くにまかせて行く
べし、神明の加護かならず恙なかるべしと云捨てて出でつゝ、哀さしばらくやまざりけ
らし。

一家に遊女もねたり萩と月

會良にかたれば、書きとどめ侍る。くろべ、四十八ヶ瀬とかや、數しらぬ川をわたりて、
那古と云ふ浦に出づ。擔籠の藤浪は春ならずとも、初秋の哀とふべきものをと、人に
尋ねれば、是より五里、磯傳ひしてむかふの山陰にいり、蟹の苦ぶき幽なれば、蘆の一
夜の宿かすものあるまじと、いひおどされてかの國に入る。

すける名一風流
人といふ名

實盛一又眞盛と
も書く、篠原の
合戦に討死した
る齋藤別當

卯の花山、くりからが谷をこえて、金澤は七月中の五日也。爰に大阪よりかよふ商人何
某といふ者あり、それが旅宿を共にす。一笑と云ふものは、此道にすける名のほのく
聞えて、世に知る人侍りしに、去年の冬早世したりとて、其兄追善を催すに。

塚も動け我泣く聲は秋の風

ある草庵にいざなはれて

秋涼し手毎にむけや瓜茄子

途中吟

あかくと月は難面もあきの風

小松と云ふ所にて

しほらしき名や小松ふく萩すよき

此所の太田神社に詣づ。實盛が甲錦の切あり。往昔源氏に屬せし時、義朝朝臣より賜
はらせ給ふとかや。けにも平士のものにあらず、目庇より吹返しまで、菊から草のほり
もの金をちりばめ、龍頭に蹴形打たり。實盛討死の後、木會義仲願狀にそへて此社にこ
められ侍るよし。樋口の次郎が使せし事ども、まのあたり縁起にみえたり。

むざんやな一詠
曲「あなむざん
やな齋藤別當に
て候ひけるぞ
や」の句に取る
大慈大悲一觀世
音菩薩

むざんやな甲の下のきりくす

山中の温泉に行くほど、白根が嶽跡に見なしてあゆむ。左の山際に觀音堂あり、花山の法皇三十三所の順禮とけさせ給ひて後、大慈大悲の像を安置し給ひて、那谷と名付け給ふとや。那智谷組の二字をわかち侍りしとぞ。奇石さまざまに、古松植ゑならべて、萱ふきの小堂岩の上に造りかけて、殊勝の土地なり。

石山の石より白し秋の風

温泉に浴す。其功有馬につぐと云ふ。

山中や菊はたをらぬ湯の匂ひ

あるじとするものは衆之助とていまだ小童也。かれが父俳諧を好み、浴の貞室若輩のむかし、爰に來りし比、風雅に辱しめられて、浴に歸りて貞徳の門人となつて世に知らる。功名の後、此一村判詞の料を請すと云ふ。今更むかし語りとはなりぬ。

會良は腹を病みて、伊勢の國長島と云ふ所にゆかりあれば、先立て行くに、

ゆきくゝてたふれ伏すとも萩の原

會良

と書置きたり。行くものの悲しみ、残るもののうらみ、雙鳧のわかれて雲にまよふが如

し。予も又、

今日よりや書付消さん笠の露

大聖寺の城外全昌寺といふ寺にとまる。猶加賀の地なり。會良も前の夜此寺にとまりて、

終宵秋風聞くやうらの山

と残す。一夜の隔千里に同じ。吾も秋風を聞きて衆寮に臥せば、明ほの空近う讀經の聲すむまよに、鐘板鳴つて食堂に入る。けふは越前の國へと、心早卒にして堂下に下るを、若き僧ども紙硯をかよへ、階のもとまで追來る。折ふし庭中の柳ちれば、

庭掃いて出でばや寺に散る柳

とりあへぬさまして、草鞋ながら書捨てつ。

越前の境吉崎の入江を舟に棹さして、汐越の松を尋ぬ。

終夜嵐に波をはこばせて月をたれたる汐越の松 西行

此一首にて數景盡きたり、もし一辯を加ふるものは、無用の指を立つるが如し。

丸岡天龍寺の長老、ふるき因あれば尋ぬ。又金澤の北枝と云ふもの、かりそめに見送りて、此所までしたひ來る。所々の風景過さず思ひつゞけて、折節あはれなる作意など聞

雙鳧云々一前漢書蘇武別李陵詩「雙鳧俱北飛」一鳥獨南翔、子當留此鎮我當歸故鄉也

書付一笠に同行二人など書くをいふなるべし
鐘板一又雲板ともいふ、金銅に作り形屯雲の如く、禪家にて食時のしらせにうつもの
終夜一此歌蓮如上人の歌なるべき由菅菰抄にいへり
無用の指一莊子所謂枝於手者樹無用之指也

ゆ。今既に別に望みて、

物書いて扇引きさく餘波かな

五十丁山に入りて、永平寺を禮す。道元禪師の御寺也。邦機千里を避けて、かゝる山陰に跡をのこし給ふも、貴きゆゑある事とかや

五十丁寺領の入口より山中の寺迄の行程 邦機千里一機は畿の誤、京都の地をいふ、經詩「邦機千里維民所止」

そこ一住所をいふ也

福井は三里ばかりなれば、夕飯したよめて出づるに、たそがれの路たどくし。爰に等裁といふ古き隠士有り、いづれの年にか江戸に來りて予を尋ぬ。遙十年餘り也。いかに老いさらほひて有るにや、將死にけるにやと、人に尋ね侍れば、いまに存命して、そこそこ教ふ。市中ひそかに引入りて、あやしの小家に夕顔へちまのはひかよりて、雞頭幣木に戸ほそをかくす。さては此うちにごそと、門を叩けば、佗し氣なる女の出でて、いづくよりわたり給ふ、道心の御坊にや、あるじは此あたり何がしと云ふものの方に行きぬ、もし用あらば尋ね給へと云ふ。かれが妻なるべしと知る。むかし物がたりにこそかゝる風情は侍れと、頓て尋逢ひて、その家に二夜とまりて、名月はつるがのみなにとたとび立つ、等裁も共におくらんと、裾をかしようかよけて、路の枝折とうかれ立つ。漸白根々藪かくれて、比那ヶ島あらはる。あさむつ橋をわたりて、玉江の遊は感に出

名月は云々八月十五日の夜は敦賀濱にて賞せんとして旅立つあさむつ一淺生津又淺水とも書いへり今麻生津といへり

歸山一本名瑠瑤山なるを海路と誤り、遂に轉じて歸山と稱すとぞ 明夜の陰晴、一孫明復八月十四日夜詩「銀漢無聲露暗垂、玉蟾初上欲圖時、清輝素瑟宜先賞、明夜陰清未可知」

ますほの小貝一ますほの貝にて赤き貝の汎稱、西行「汐をむるますほの小貝拾ふとて色の濱とはいふにや有るらん」色の濱は即ち種の濱也

でにけり。鶯の關を越えて、湯尾峠を越ゆれば、燧が城、歸山に初雁を聞いて、十四日夕ぐれつるがの津に宿をもとび。その夜月殊に晴れたり。あすの夜もかくあるべきにやといへば、越路のならひ、猶明夜の陰晴はかりがたしと、あるじに酒すよめられて、氣比の明神に夜參す。仲哀天皇の御廟なり。社頭神さびて、松の木の間にもり入りたる、おまへの白砂霜を敷けるがごとし。往昔遊行二世の上人、大願發起の事ありて、みづから草を刈り、土石を荷ひ、泥濘をかわかせて、參詣往來の煩なし。古例今にたえず、神前に眞砂を荷ひ給ふ。これを遊行の砂持と申侍ると、亭主かたりける。

月清し遊行のもてる砂の上

十五日、亭主の詞にたがはず雨降る。

名月や北國日和定めなき

十六日、空霽れたれば、ますほの小貝ひろはんと、種の濱に舟を走す。海上七里あり。天屋何某と云ふもの、破籠小竹筒など、こまやかにしたよめさせ、僕あまた舟にとりのせて、追風時のまに吹著きぬ。濱はわづかなる海士の小家にて、佗しき法華寺あり、爰に茶を飲み酒をあたよめて、夕ぐれのさびしき感に堪へたり。

寂しさや一語曲
「そもく」此す
まの浦と申すは
寂しき故に其名
を得る」といふ
に趣を取れり
路通一美濃の人
一旦乞食の境界
に落ちしを、芭
蕉取立てて僧と
し、門人となし
たり
越人、如行、前
川、荆口、何れ
も門人の名
伊勢の遷宮一
十一年目の九月
晦日の夜に行は
る

寂しさや須磨にかちたる濱の秋
浪の間や小貝にまじる萩の聲

其日のあらまし、等裁に筆とらせて寺に残す。路通も此みなど迄出むかひて、美濃の國へと伴ふ。駒にたすけられて大垣の庄に入れば、會良も伊勢より來り合せ、越人も馬をとばせて如行が家に入り集る。前川子、荆口父子、其外したしき人々日夜とぶらひて、蘇生のものにあふが如し。且悦び且いたはる。旅のものうさも未だやまざるに、長月六日になれば、伊勢の遷宮をがまんと、又舟にのりて、
蛤のふたみにわかれ行く秋ぞ

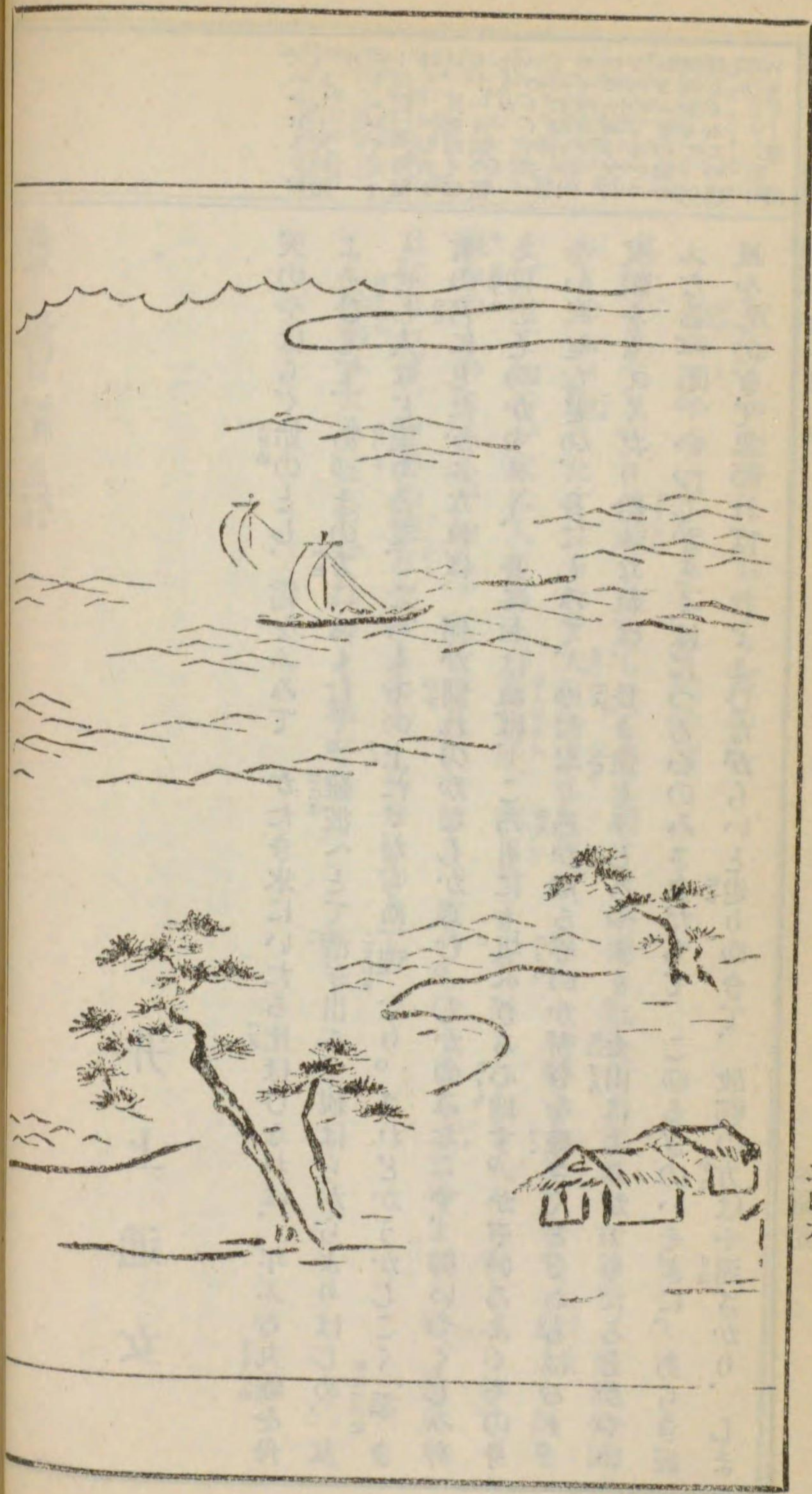
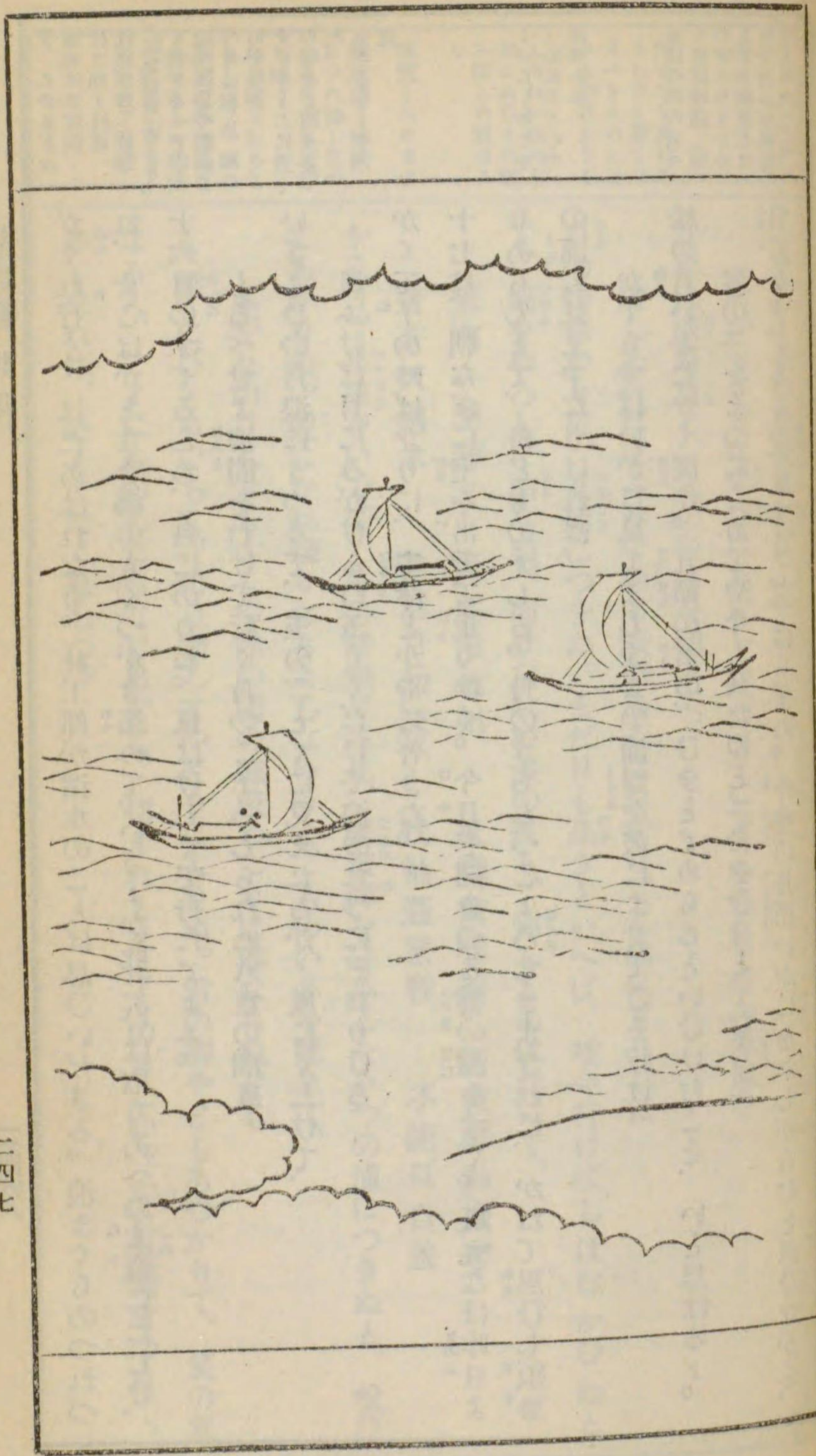
おくの細道終

東海紀行

井上通女

天のやはらぐ始のとし、霜をふみて
年 霜をふみて云々
一詩經「履霜堅
冰至」の句によ
る、舊曆霜月即
ち十一月頃の謂
ならん
ころもての云々
一袖に涙のかく
るも理なり
かぞいろ一父母
などの一などの
たまふ言の葉の
父親をもて一父
親をもての誤
寫か
いそぎ一磯、急

天のやはらぐ始のとし、霜をふみて かたき氷にいたる比ほひなれば、年ふる丸龜を舟よそひして、あづまの方におもむく。難波へとて漕ぎ出る。親はらからよりはじめ、友とせし人など集りて、ころもでの上たどならぬ理なり。されどかうかしこく忝き君の召にしたがふなれば、何か別れのかなしからむ。しかのみならず、御いつくしみ有る仰ごとのかずく、身におはねば、ころもにも堪へざる心地す。かぞいろよくその身をいたせなどの、身にしみて、つたなく愚かなる心のかぎりを盡さんとぞおもはるよ。父親をもてくだり給ふなれば、長き途もうしろやすく、太山によりかよりたるとかやいふなるべし。いつしかとくはだつる心のみさきだちて、こゆるぎのいそぎに、あらしき波風をしのぎて出づれば、たどよひながらいと走りゆきて、故郷の方はや遠ざかり、しま



ぎ 色ゆるぎは
磯に係る序詞
杜工部一杜甫
此たびは一菅家
「此たびはぬさ
も取りあへず手
向山紅葉の錦神
のまにく」の
句を用ふ
すぐる一上に畫
の字など脱せる
いざよひ一十六
夜

いづこくろなき
一心配にて心の
落着かぬ

五節の君の云々
一源氏物語「琴
の音にひきとめ
らるる細手なほ
たゆたふ心君知
らぬや」

牽絃一和名抄に
「音支訓豆奈天
挽船繩也」

かけても思はざ
りしに一兼ては
見べきものと思
ひも掛けざりし
に
しはむかひぬ一
潮に向ひて舟進
み難しの意なら
ん
蓬窓一舟のまど
灘波津一大阪
みつの浦一見つ
の意に古名三津
を掛く
かれ残りたるよ
し一津の國の
難波の春は夢な
れやあしの枯葉
に風渡るなり
新古今、西行

がくれ行く、はたあはれなり。杜工部が渭水のことば思ひいださる。浪まくらのつれづれ、そこはかとなき海のもくづかき集めて、いさよか此たびは取りあへぬ太麻にたむけ、十六日のすぐるころ、舟にのりぬ。風はけしくて舟たどよふ。

しるべせよ浪間をわけて行く舟のこころしられぬ八重の潮風
いざよひの月浪にうつりて、玉のごとくに見えたるが、風にうたがいて、

風ふけば月にみかける白玉もくだけて浪のたつにぞ有りける
かくて子の時ばかりに、室津とかやに著きぬ。

十七日、朝なぎに室を出でて走りゆく。今日ぞ聞きつる響の灘をすぐ。風もなほ昨日よりあらしとて、舟どものよする。舟のうちしづこころなきまぎれに、かねて思ひし須磨の浦も見えずなりければ、

かよらずばいかに見てましますまの浦恨を波によせてこそ行け
松の音いとたかく聞ゆ。五節の君の、ひきとどめらるといひけむこそ、いと思はるよ。

琴の音をまつにこめてや今も又たゆとふ舟をひきとどむらん
明石をすぐるころ、風すこしやはらぎぬ。今宵の月影いかにをかしからむと思ひながら、

こぎ行く舟の牽絃なれば、

所がらさぞな今宵はあかしがた月にぞをしむ舟の牽絃を
かれは淡路島と、人のいふを聞きて、

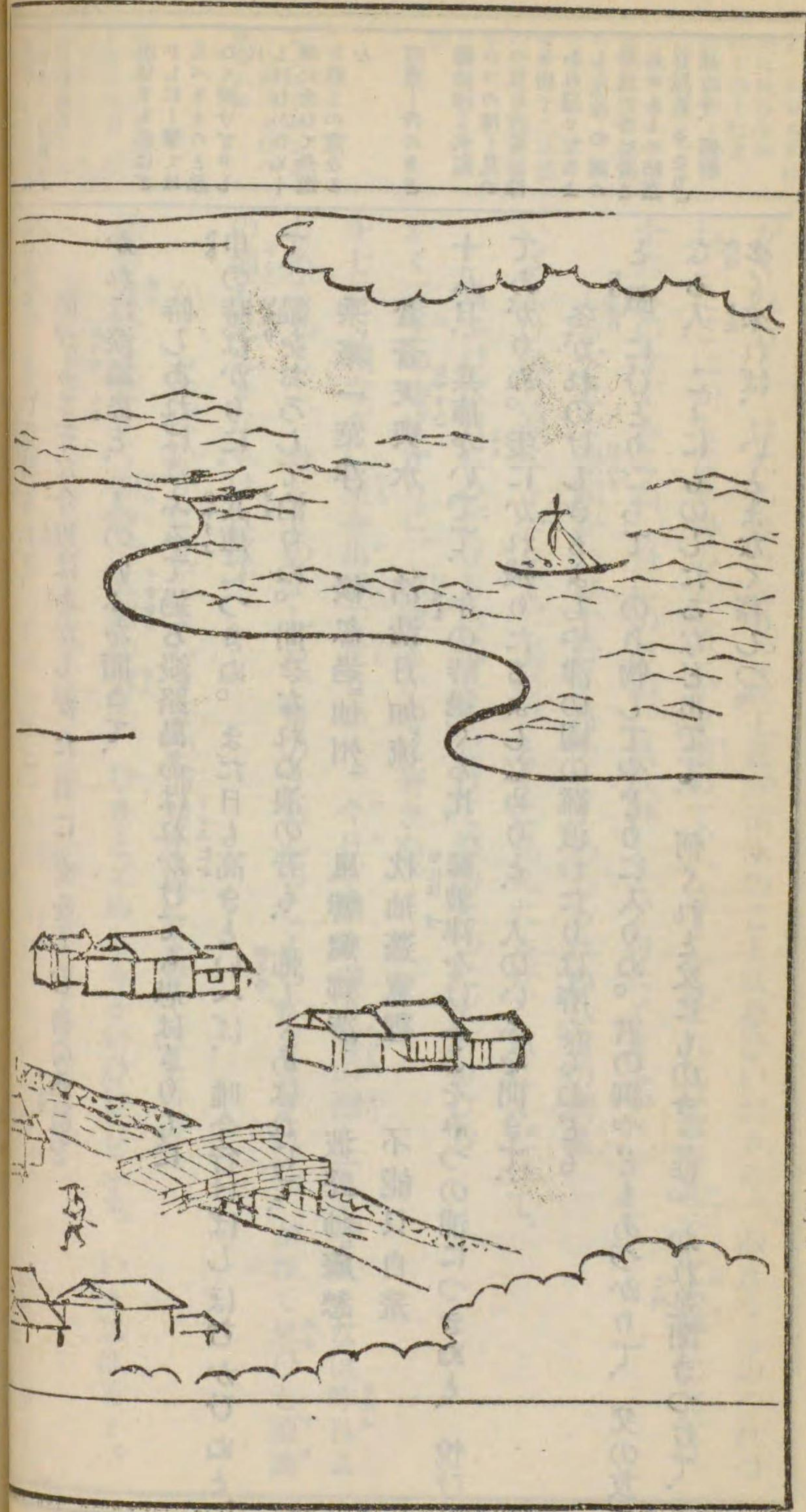
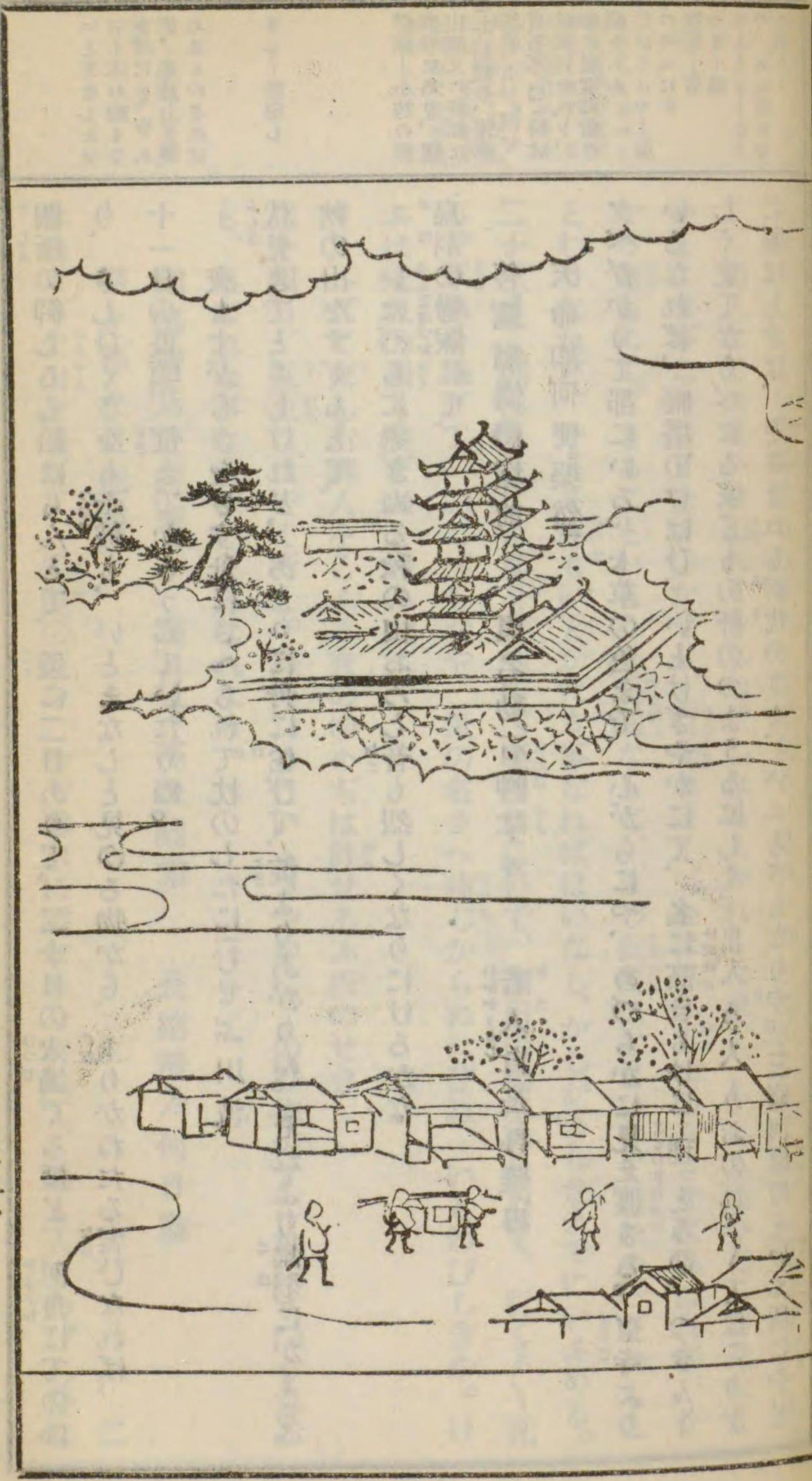
時しあればけふみて過る淡路島あはれかけても思はざりしに
申の時ばかりに、兵庫につきぬ。まだ日も高きといへば、唯今行けばしほむかひぬと
て、錨をおろして泊りぬ。聞きなれぬ浪の音も、怖しくあはれにて、

乘寒一葉浮 倏忽過他州 風響驚郷夢 波聲動旅愁
蒼蒼天與水 浩浩月如流 枕袖蓬窓裡 不能只自羞

十八日、兵庫をいでて、午の時過ぐる比、難波津をけふこそみつの浦につきぬと、悦びてあがりぬ。爰にかれ残りたるよしなめりと、人のいふを聞きて、

冬がれのけしきもよしや津の國の難波わたりは春ならねども
と戯にひとりごちて、のり物してやどりに入りぬ。君の御やどもあづかりて、父の友なる人、こよにもものしたるなど出でて、何くれと父にもものきこゆ。かれ是聞きつけて、

多く來れば、いとまなく暮しつ。



いとまなしと云
云一休む暇もな
き様に見ゆれ
ど、兎角上り兼
ぬるものなれば

さし指定し

戀塚一小枝の淨
禪寺にあり、羅
山撰文の碑銘に
「肝節婦兮、惟孝
惟義、石可泯兮、
貞名不巳」詩は
此文によれり、
俗に袈裟御前の
墓をいふ
心がらにや一氣
のせいにか
雁塔一塔
つま一端
いふもさらなり
や一いふ迄もな
き事なり

關所の御しるし給はらんとて、爰に二日ありて、二十日の未過ぐるほど、河舟にてのほり、さしひくさをも牽絞も、いとまなしと見ゆる物から、上りかねたる習ひなれば、二十一日の晝頃、淀までからうじていたりぬ。
夜もすがらさをさす舟にさへられて枕のしたに二むせぶ川波
伏見までとさしけれど、あまりに舟に倦びて、淀よりあがりぬ。それより鳥羽にかよる。秋の山をすぐるとて、

いたづらに過ぎぬる秋の山おろし音も烈しくなりにけるかな
鳥羽の戀塚にて、

停駕猶憐戀塚前

貞名勒石艸芊々

若人自是再難得

天命如何使渠然

夕べがかりて都にいる。本草の色まで、心がらにや、めづらかに見え渡さる。東寺よりいるなれば、雁塔のけはひ、いとけざやかにて、名に高きもけに理とみゆ、つきづくしく立てならべたる家どもの軒のつまうるはしく、出入る人もおのれく、とほこりかに賑はしきは、をさまれる御代のさま、いふもさらなりや。三條河原町といふ所にやど

さること云々
物見なども氣が
落著くまじ、ま
づ此度は見合せ
ん
ほいなしつま
らぬ、下になど
と補ひて見るべ
きか

役一集韻に「同
役」

りぬ。こゝにも又御家のあづかり出でてきて、何やかやとねぎらふ。彼方へのものことづて、馬人などの事いひ紛れくらしつ。しれる人かれこれ来て、かよるついでに物見などいとよき事なりなどそよのかせど、行先おほく、心は思ふ方にのみさきだちぬれば、かかる旅ぢにて、さることいと心も長閑ならじ、まづ此度はなどいひて赴かず。それもことわりなれど、かよる序もいとかたき事なればほいなし、かしがましきまでにいふめる。二十三日、朝ほらけに京都を立ちて、粟田口にいで、瀬田の橋をわたりて、行くく見る。草津を過ぎて、いしべとかや、里の名さへ睦じからぬたびね、いとわびしきや。けふは逢坂の關もすぎぬといふ。
へだて來し古郷人をこふる夜のゆめぢは許せあふ坂のせき
二十四日、五更に出でて行く。残りたる月いとさやかに、のり物のすだれにうつりたるも、めなれぬ事なればいとあはれなり。

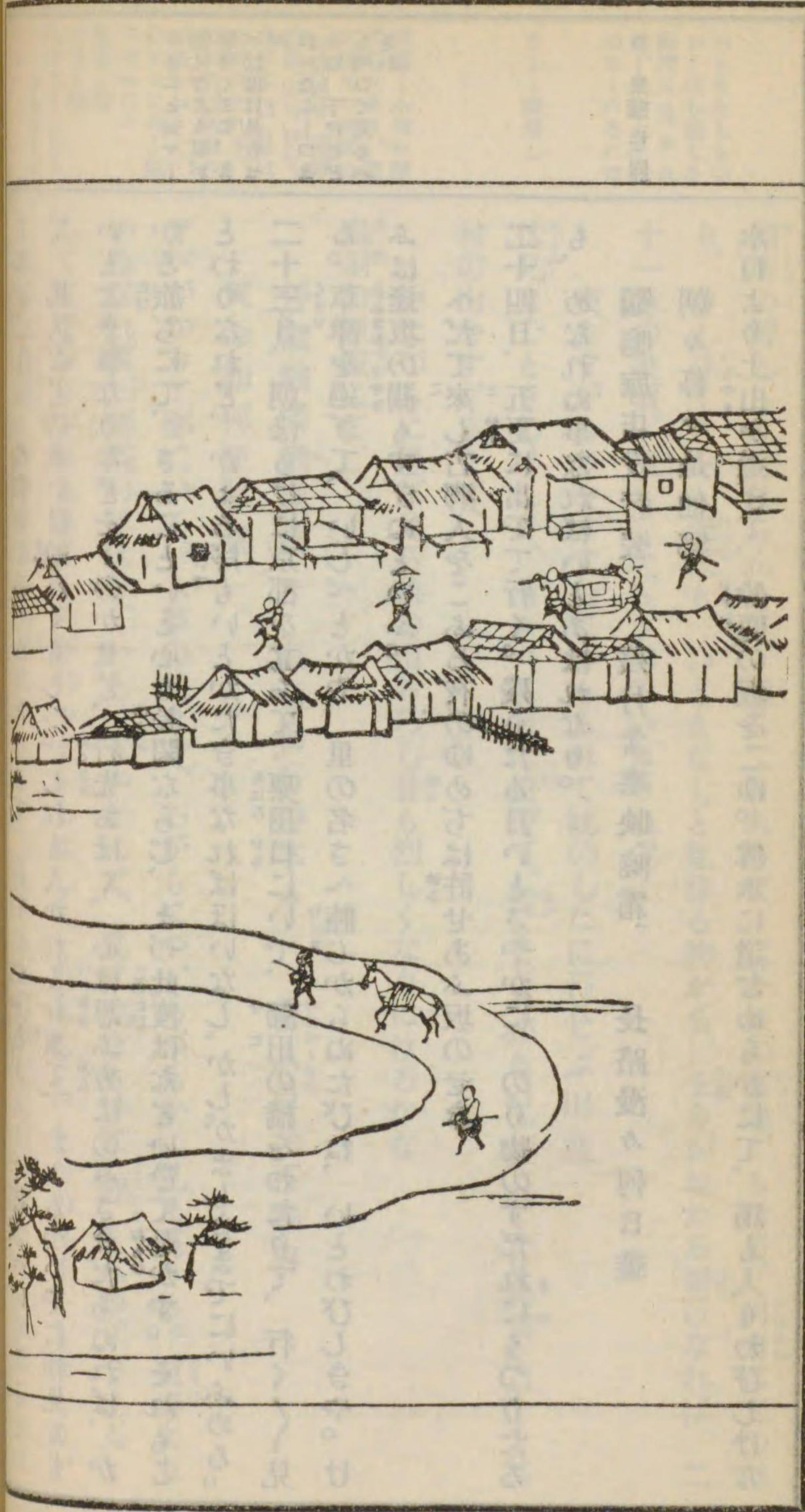
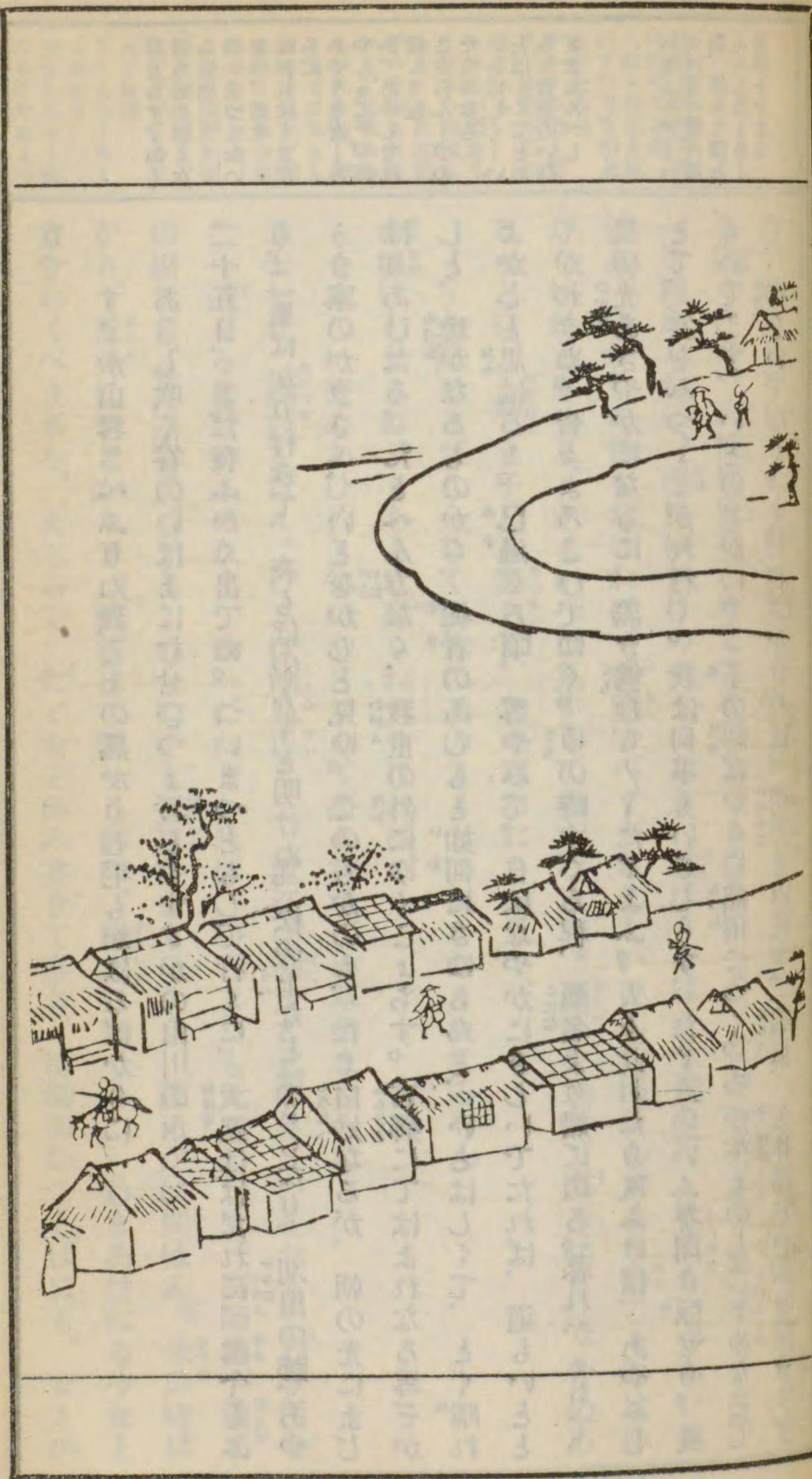
鷄鳴旅店役行装

残月含寒映曉霜

長路漫々何日盡

朝々暮々是他郷

水口より土山を過ぎて、鈴鹿の坂をこゆ。雪水に道なめらかにて、馬も人もわびしけな



おともすどか
音も鈴の如くな
る鈴鹿
ついまつたい
まつ、炬火
はだれに—まだ
らに
あやうき家—あ
やしき家の誤
か、あやしきは
賤しき意
さゆらん—つめ
たき事ならん
いとほしく—い
とほしくてとあ
る方普通のいひ
さまなるべし

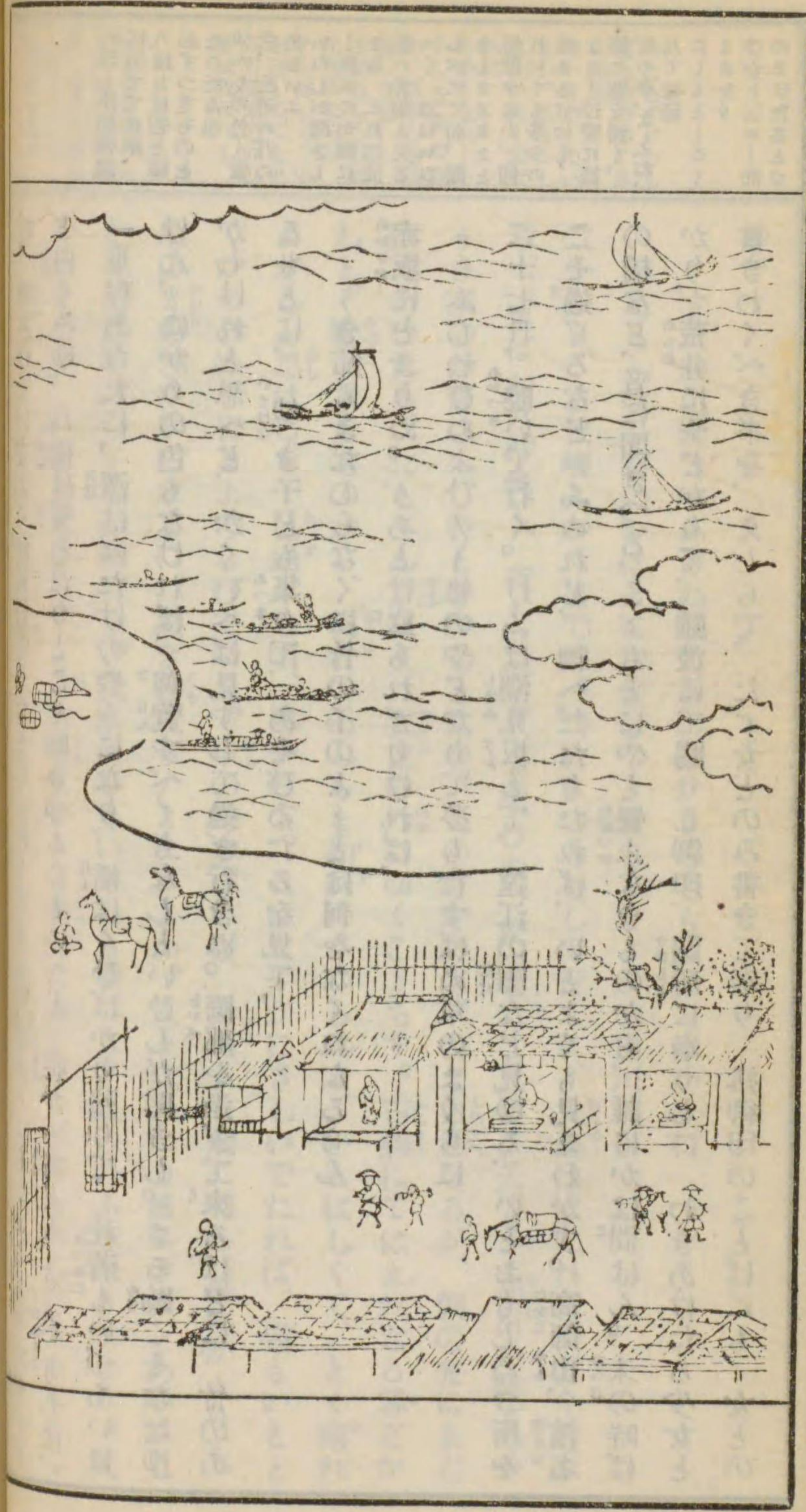
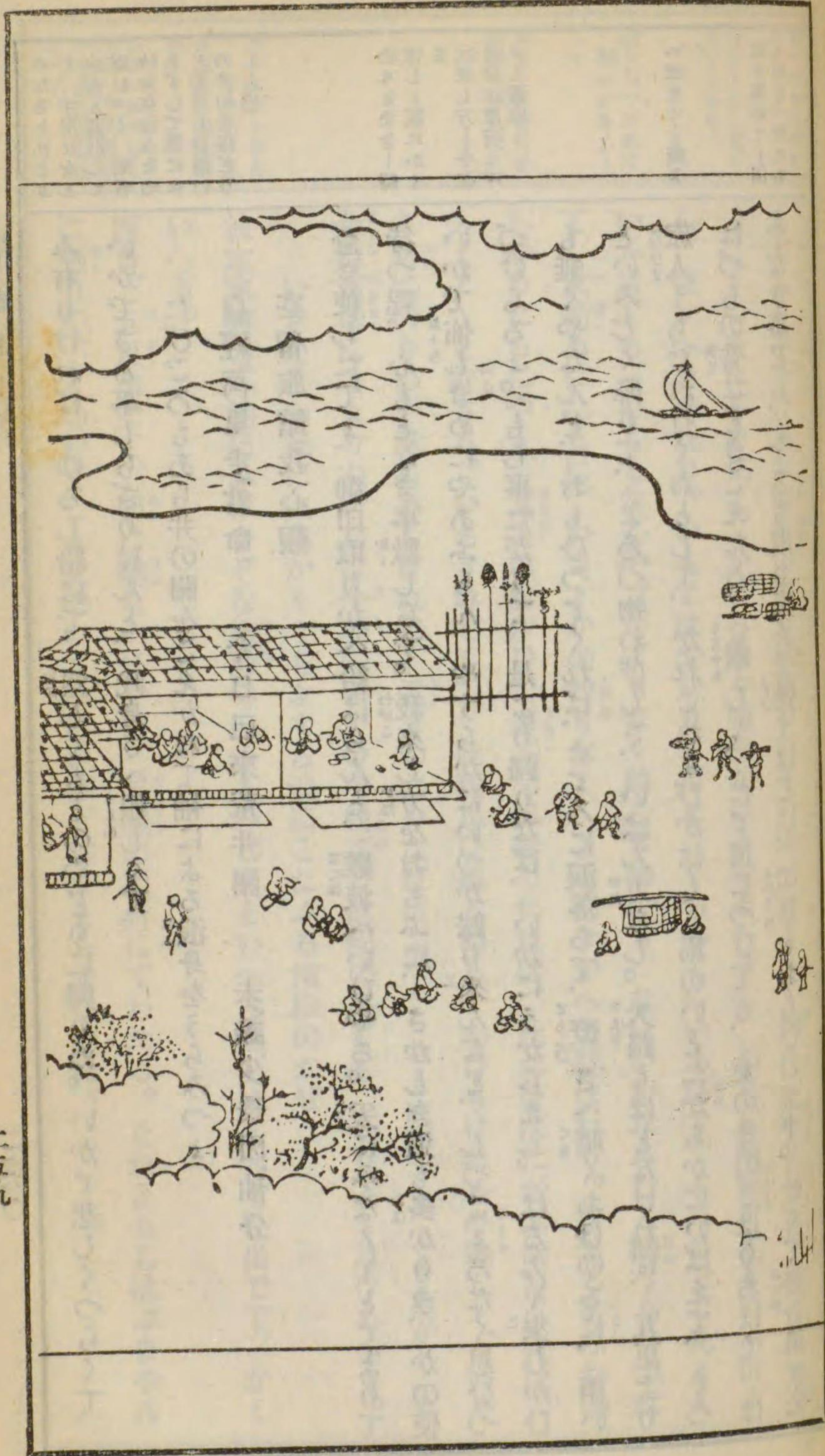
いさしらず—い
さは否の意の副
詞、清みて讀む
ものしたるめ—
食事をすまし

杜若—伊勢物語
に出でて以來、
八橋と杜若とは
必ずつきものと
なりたる也
ゆかりの色—紫
色、杜若の花の
色をいふ
いひしが聞きし
—原本の句讀に
よる、これ迄從
者の言葉と見る
べく、或はいひ
しがにて句、開
きしるあつと
接續するか、何
れにても多少の
誤あるが如し
よ—泣聲に節
節の意を掛く、
竹の子、よ、ね、
凡て縁語
こゝもと—こゝ
ちあたり
少女と云々—袖
のあけたるとつ

り。

すどか山雪さへふりぬ我こまの黒かりし毛もかはるばかりに
あらし吹く谷のいはまにむせびつよおともすどかの山川の水
二十五日、まだ夜ふかく出でぬ。ついまつともして行くに、大路ははだれに、雪今もふ
り、一里ばかり行きて、夜もほのぐと明けぬ。松の上などはさらなり、刈田の跡、あや
うき家のかきさへ、いとをかしと見ゆ。このもかのも、たゞ白妙なるが、朝の光にまじ
はりあひたる、たとへん方なく、我世の外にゆくこちす。古郷にてはまれなる雪ぞか
しと、珍かなるものから、従者のあしもと如何にさゆらんと、いとほしくて、とく晴れ
よかしと思はるよ。已過ぐる頃、雪やみて、日はなやかにさしいでたれば、道もいとと
くかわきぬ。皆々よろこびてゆく。申の時すぐる程、桑名より船にのる。暮れかよりて、
星の光あざやかになるに、黒き雲むらくたゞよふ。人々此わたり風ふけば、あやふし
とて、空をみつよこがれ行く。我は何事もいさしらず、たゞ人のいふを聞き臥せり。風
もいでこず、いとどのどかにて、子の時ばかりに熱田につく。やがてものしたよめなどし
て、宿をいでゆく。まだ夜ふかければ、何方もみえず。鳴海、矢作などいふを聞きすぞ

ぬ。夜あけていとよく晴れわたりたるに、昨日の雪にやあらん、むかふなる山の峯々い
と白くみゆ。八橋は爰わたりとこそ聞きつるにといへど、従が者ども、さ承りしは、
一里程あなたに、澤ははたけのやうになり、橋はくひばかり残りて、杜若もいづちいに
けん、ゆかりの色もなければ、御覽すべくもなしといひしが聞きし。さる跡こそなほゆ
かしけれと思へど、かくいへば見ずして過ぎ行きぬ。岡部を過ぎて来るほどに、竹のあ
るもとに、幼き子ども集りて、あそびるたるを見て、
うき節もまだしらくに竹の子のよとは何をなくねなるらん
赤坂にとまりぬ。うちとけ寐られざりければ、
ふしわびぬよひく、毎のやどかりて夢もむすばぬ草のまくらに
二十七日、曉いで行く。けふは潮見坂とて、遠江の灘など見ゆる、いとおもしろき所を
こそ過ぐるなどいふめれど、物へだたりたれば、いとよくも見えわかず。高師山、濱名
の橋など、音に聞きつる、こゝもとにやと覺束なきものから、誰にかは問はん。未の時ば
かり、荒井にやどかりて、難波にて賜りし御印、關所に奉りしに、わきあけたる少女と
書きわくべき事を、えしらで、たゞ女とのみ書き奉り、扱御印のことばにも、女との



めたるにとりより
て、手形に女と
少女と區別して
認むべく、筆者
は少女なるを知
らずして軍に女
と書きし故通行
の許句を得ざり
しと也

心もとなき一符
遠しく氣にかゝ
る
我來し方一今迄
自分が旅行し來
りし道程

いばえて一嘶き
て

取り集めて一何
もかも一所にも

りて心をなやま
して
心ならぬ一意の
まくならぬ

胸うちつぶれて
一胸がどきどき
して

奉り一其書付を
關所の役人に

袖にふけ一新古
今下の句一思
ふ方より通ふ浦
風
しはぶきやみ
暖嗽、せき、風邪
か喘息なりしな
るべし

み有りければ、ゆるし給はで、空しくもとのやどりに歸りぬ。いかど悲しくつらくて、
いかでさる事しらざりけん、我身さへ恨しくて、

たびごろもあら井の關をこえかねて袖による浪身をうらみつよ

自經萬里走君命 今日已來荒井關 未識少長因袖分

空留旅館我心艱

急ぎ使したてよ、御印取りかへ給はらんと、難波へいひやる。爰にみなくともまりて
待つ程、心もとなき事數しらず。我來し方をおもふに、さかしき道も多かりき、かの使
いかで怖しきめにやあふらん、やすらかにいつか歸り來など、しづこよろなく思ひつ
づけらるよ。もし事たがうて、是より歸りなば、いかにうからまし、はるく來しかひ
も無くやなんど、おもひつゞくれば、そとに涙落ちて、燈さへ暗くおほゆるに、雨い
といみじく降りて、よろづ物わびしさ、いはん方なし。大路もほどなければ、五更より
旅人うちむれ行くおとして、かれこれよびかはし、馬のいとたからかにいばえて、くつ
はづらの音などきこえたる、羨しく、たゞ何につけても、女の身のさはりおほくは
かなき事ども、今さら取り集めて過すほどに、明暮もおもひわかず。かくて幾日過ぎぬ

るもしらず、けふは師走の三日に成りぬといふ。いとよく晴れて鮮かなる日のかけ、障
子にうつりたるを見て、かよるをり道ゆかばよかるべきに、心ならぬ宿かなといふ折ふ
し、使かへり來れり。いとどはやりしなど、くちぐにいふ聲す。とく出でて見よと
いふほど、心もとなしや。かぎりなく嬉しき物から、なほいかならむと胸うちつぶれ
て、文箱あけたるに、いさよかの咎もなく、よく書きかへて賜はれり。かよる苦みおほ
しやりたるにやと、其方にむかひて喜ぶ。扱奉りたれば、此たびはたがふ所なければ、
とくくと許さる。いとうれしくて、此程思ひ暮しぬる、心ひらけたる心地して、いそ
ぎ舟にのりぬ。風もあらけれど、近きわたりなれば、何ともおもはず。舟よりあがりて、
今宵濱松にとまりぬ。なほ今朝の事いひて悦ぶ。此程の事ども、とりぐ言ひあへり。
いさめしを袖にはふかくうちよする浪にこたふる濱松のかぜ
彼定家卿の、「袖にふけさぞな旅寐のゆめもみじ」といへるを、ふとおもひ出でて、かく
いへり。
四日、五更出でて、明け離るよほどに、天龍の川舟にてわたる。それよりしはぶきやみ
に懸りて、ものかくこと父のいさめければ、筆もとらずなりぬ。

享保二年丁酉八月

京書林衣棚二條下町

山形屋善兵衛

江戸日本橋南一丁目

小川彦九郎

東海紀行終

歸家日記上

井上通女

武藏鏡一古へ武藏より産したる名物、かけはなるといふに掛けたる文飾
おほしわきて一思ひ分け給ひて
思し至らぬくまなく御考の届かぬ限もなくになう二つな
く此上なく年なみの云々一月日の経過したるも
別れ奉り元禄二年二月三日、使者養性院の逝

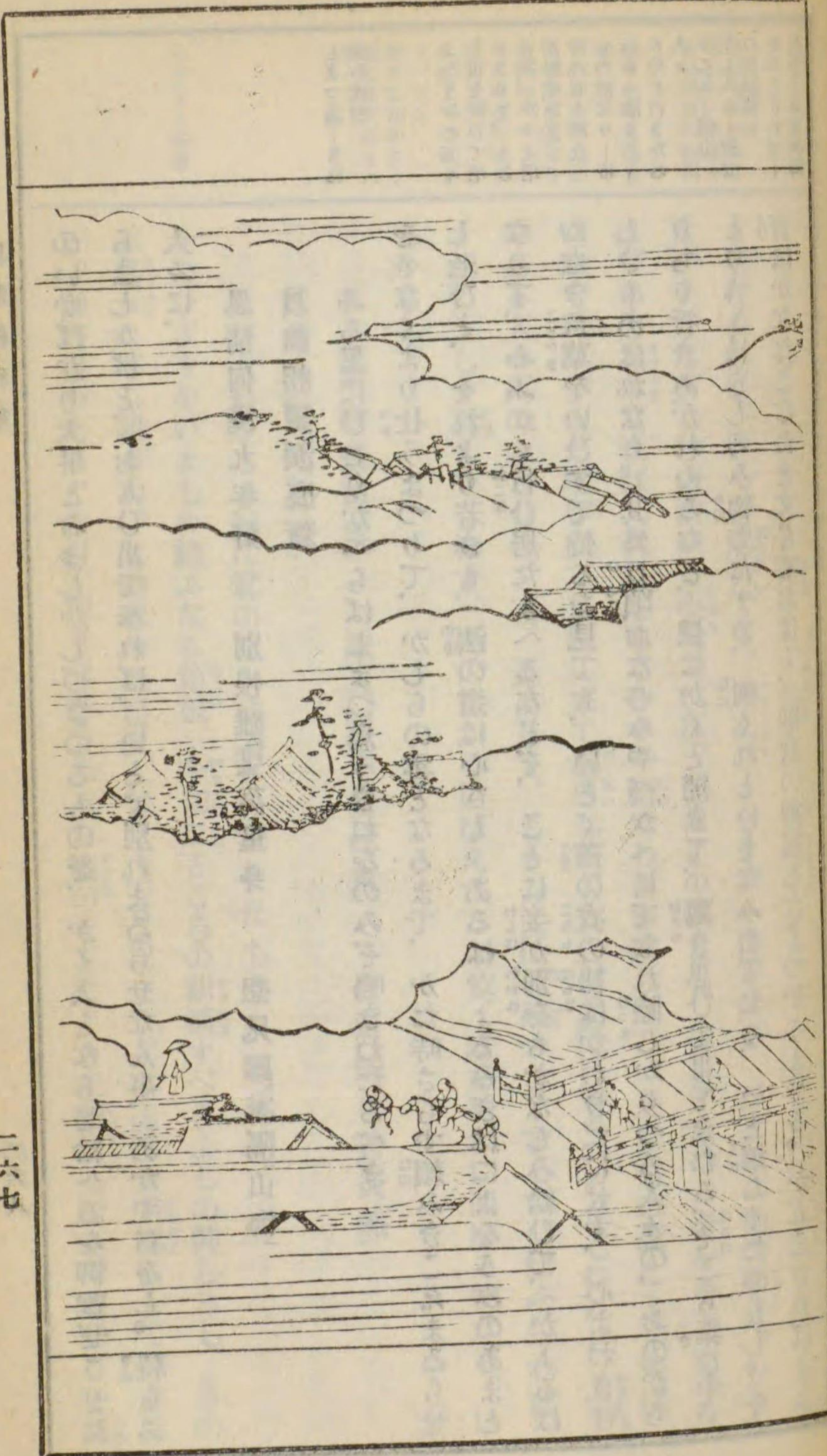
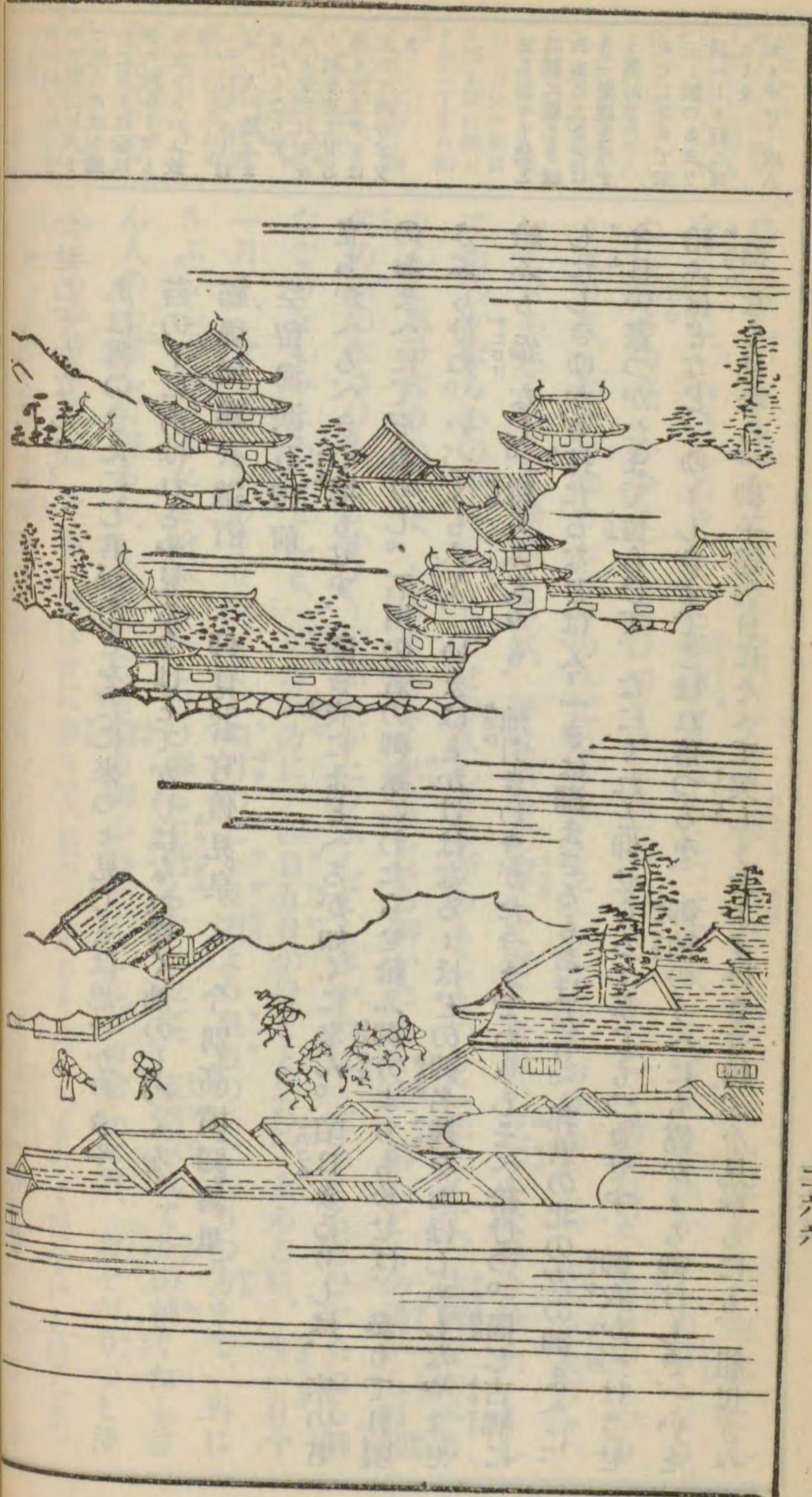
年經てすみし武藏鏡、さすがにかけはなる東路のなごりをしく、かなしさをかきあつめて見むもよしなしや。一とせ故君の仰を承り、御言の葉のふかきめぐみによりて、身の拙きをも思ひわかで、はるけき海山のさかしきをしのぎてまるれる心ざしを、浅からずおほしわきて、御側にのみ朝夕ならさせ給ひて、よろづに御心をくはへて、思し至らぬくまなくいたはり仰せらるゝをば、いかでかはいとどおろかにも思ひ奉らむ。いとなう頼みきこえ奉りて、十とせにちかき年なみの立ち重なるも、たゞ昨日今日の心地とする。飽く世なうれつかうまつりし御かけに、かくく俄なるやうにて別れたてまつりしかば、夢うつよの境も思ひわかたれず、いとどき身を用なきものに思ひすて侍るを、とどまらせ給へる御子達、御はらからを始めまるらせて、有りし御心に叶ひてお

去をいふ
 要うつもの云々
 一夢やら現やら
 その區別もつか
 有りし云々亡
 き方の御氣に入
 りたりし者ぞと
 て、特に懇にい
 る仰あり
 おもだたしき云
 云一自分の面目
 を施す様に御と
 りなしたさる御
 恵
 かきくらし一涙
 にくれて
 せちに一切に
 久しきながめも
 一久しき間なが
 め暮したるも、
 ながめは「我身
 世にふるながめ
 せしまに」など
 の例と等しく
 物思に沈むをい
 ふ
 卯月の云々一四
 月の二十日頃上
 り五月の晦頃迄
 れい待たせ給ふ

ほしめしつるものをとて、かたじけなく懇に仰せまつはして、何事をも、おもだたし
 きさまに、おほしおきてたる御惠を見奉るにつけても、なほ來し方のかへらぬ昔となり
 ぬる儂さのみ、かずくりに思ひつゞけられて、かきくらしつゝ過すほど、月日のうつり
 かはりて、わかれ奉りしをりのへだたり行くも、かなしくおほえらる。親の年老いて、
 いとせちにこひしと覺ゆめるは、けに周公の聖にてだに東山の三年をなけき給ふ、まし
 ておろかなる心のやみに、九とせの久しきながめもことわりに悲しくて、古郷をかへり
 みんと思ひなりぬるを、止めまほしく思ほしたる御かたぐの、御心どもの淺からぬ御
 言の葉のなさけも、かずくりに忘れがたきふしども多かれば、草まくら思ひたちぬる御
 なごりをしみるらせんと、彼方此方に、四日五日のほどと思ひてまるるに、今日今
 一日と、せちにとどめさせ給ひて、卯月の二十日頃より皐月のつごもりつ方まで、外に
 さぶらふ。れい待たせ給ふらんと思ひ奉る主君もなければ、家路忘れて斧の柄くたしけ
 ん人の心地して歸るを、こなたにも獨り御心ほそくてながめ給ふ女君、おそかりつと待
 ちうらみさせ給ふ。故君の御はかに参りて、是やかぎりとおいとま申す程のいと悲しさ、
 物にも似ず。この御國にだに侍らましかば、かくかひなき御跡にも、たえず詣でまる

一例の如く我を
 待ち給ふ
 斧の柄云々一管
 の王質山に入り
 て仙人の棋を圍
 むに見とれ遂に
 斧の柄をくささ
 せたりといふ故
 事
 一つ心云々一自
 分一人の思ふま
 まにもならず
 あとをだに云々
 一跡を來て見る
 事も出來ずとは
 思ひも掛けざり
 き
 同じ云々一我と
 同郷に親しき縁
 故ある人などは
 今一層涙を流す
 ち多かり
 ゆくしきまで云
 云一涙のあまり
 忌々しき程こぼ
 るを
 おもすげ一成人

りて、なほそのかみ御前に侍ひし心地のし侍るべきを、女にてさへあれば、一つ心にま
 かせぬぞかなしき。
 あは雪のきえにし君があとをだに來つゝ見じとは思ひかけきや
 苦の下にあはれとや見る今はとてかけはなれゆく袖のしづくを
 靈魂何處去遊衍 仰見蒼穹俯見泉 今別高墳歸舊里
 空留涕淚石碑前
 立ちかへるべき心地もせず、闇き夜にまどへるが如くになん。頃日まるりしは、宗の君
 のおまへにてぞありし。石川の君の御家にわたらせ給ふ御方よりもめせば、参りて日頃
 さぶらひぬ。いづくもく、いまはとかけはなるよほどの御名残をおほしめしなやませ
 給ふも忝なし。侍らふ人々も、袖引きわきがたきまでぬらしそへ給ひつ。同じ古郷に
 したしきゆかり持たるなどは、今一きは瀧まさるもおほかり。邦君の北の方の御まへに、
 今日晝つかたまで侍らひて、なにくれと仰せらるゝ事どもつきせず、御衣かづけさせ
 給ふほどなど、ゆゝしきまでこぼれ落つるを、御袖のうへにも露かよる御けしき、いと
 忝なく見奉る。御子達の日にそへて美しうおよすけさせ給ふを見奉るにも、祖母ぎみ



のいかばかり大事とおほしかしづきつるものを、かく人とならせ給へるを御覽ぜさせたらましかばと、おもひ出で奉れば、いとど別れまるらせなん事、あかず口をし。侍らふ人々に、

恩情何浅九年好

別恨難堪萬里身

想見歸家隔山海

月前相望淚痕新

しまつ鳥うらに掛る枕詞

ふる里にひとりかへらばしまつ鳥うきねをのみぞ鳴きわたるべき

よをうみの云々
一世を厭ひて尼
となりて、み
と海、海士と尼
と掛けたり
昔の衣―法衣
あのが云々―め
いめい散りく
に分れ行きたる
人々
そこら―澤山
うしろみ―旅立
の世話焼き
かしこければ―
畏多ければ其御

をさなくより仕うまつりて、かしらの雪となるまで、かた時さらず頼みきこえまるらせし老びと、それより若きも、法の道に心ざし、あるはかよるみぎはにをうみのあまとなりて、心ふかく行ひ居たまへるなどぞ、ことに妾が別をもかなしみ給ひて、かよるはかなき言草をいひすて侍るを見ても、いとど昔の衣の袂はかわきだにせず、心よわきけしきもあはれなり。其外日頃おなじみやづかへにてなれ睦じかりつる人々の、おのがちりぢり行きあがれぬるなど、俄にかくと聞きて、驚き思ひて出できたる、そこら集ひて、とりぐにうしろみ物したよめ、何くれといとなみ出でたる、いと嬉しくたのもし。今宵はかなたこなたと文どもおほく、御歌の御返しなどつかうまつる。かしこければこよ

歌はこゝに擧げ
さうぞきかへ―
著かへ―さうぞ
きは駿東の動詞
益本―井上市兵
衛の諱
いかでかは―如
何て斯る便宜を
得んや
馬のはなむけ―
餞別
すがくしく―
さつさと
聞ゆる物から―
聞えはするもの

ひざう―非常

にはもらしつ。夜ひとよ認め、曉がた、名残をしとて、一ところにより臥すほどもななく明けぬれば、いそぎ起出でて、旅衣さうぞきかへ侍るほど、かたみの袖の雫は、かきながすもたましひの消ゆる心地すれば、其ほどの事ども、皆とどめつ。妾をるてのほるは、弟の益本なれば、萬にうしろやすく頼もしき事限りなし。是も君の恵によらずば、いかでかは。まだ明けはてぬ程に來て案内して、とくたち給ひねといそがし侍れど、上下のある人々馬のはなむけとて、盃出して、とりぐに名残つきせすしたひ給ふめれば、すがくしく出もやられず、馬のたかくいばえたるなど、はなやかに聞ゆる物から、いとかなし。

昔是來時飛雨雪

旅人墮指望江東

今將歸日苦炎熱

匹馬回頭嘶暑風

たび衣わかると袖に雲のなみけぶりの浪をたちやかさねん

女のひざうをいましめ給ふなる箱根、今切二ところの關通すべきよし御しるし、きのふ益本に下し賜りぬ。元祿二年己巳夏、六月十一日出でたちて、とほき古郷にとて歸り侍る。御門出づるほどなど、物もおほえず、みな簾のもとによりて暇乞し給ふ。芝のさと品

打驚きて一ふと目覚めて

川とかいふ驛に出づ。しれる人々自ら送り給ふも有り、人おこせたるもあり、うちつれていづる。商人の家ども、町たてわたし、作りならべたるあたりを打過ぎゆけば、海の面はるく見やらるよ、いとめづらかなり。送の人々にも、是より歸り給ひねといふも、又逢見る事も有らまじくやと、いと名残をし。益本に物聞えかはして、是よりみな歸り給ひぬ。晝つ方、ゆくゆくうち眠られたるに、なほ有りし御かたぐの、御そばにさぶらふと覺えて打驚きて、「心ばかりや通ふらし」の御言の葉も、忘れがたく思ひやりまらせて、此方をおほしめしおこせるにやと、

したひくる君がこころか止め來しわがたましひか通ふまほろし

おまし一座敷
むかふさま一向
ふの方
末の松山一君
をわきてあだし
心を我が持たば
末の松山浪もこ
えなん

晝つかた立寄りたる宿いと涼しけなり。おくなるおましに居て、トのかたを見やれば、雲につらなりたる海原、むかふさまにたかく見えて、けに末の松山をもこえつべく、浪のたちかへるなど面白くて、爰に住む人さへぞ羨しき。それよりいで行けば、さつき頃早苗とりつらんと見ゆる田面に、緑の稲葉いとうるはしく、まだ穂に出でぬほどなり。草ぎる者の笠のみ見ゆ。田歌いとをかしく歌ふ。けになりはひのたやすからぬ營みも、見るごとには一しほに思ひ知られて、素餐のとがおそろし。又山際に畑うつ者の、身の色は

素餐一徒に祿を
食みて何の功も

なまこと
夏畦云々一孟子
「脊肩詔笑病三手
夏畦」

ぐし一連れ

よつの海一四
海、天下、四海波
静にして吹く風
枝を鳴らさず
白浪一盗賊、海
づらの縁にて特
に此語を用ふ

らまご地一砂地

殊絶一絶は纏の
俗字にて粗緒の
稱也、絶の誤な
らんか

墨の如くにて、汗おしのごひたる、暑さたへがたけなるは、夏畦よりもやめりと、苦しきたとへに曾子のたまひし、けにもと覺ゆ。今夜は戸塚といふ所に宿る。海づら近く、ならばぬ旅寐なり。まして女ぐしたれば、益本もいと心ことに、戒めありきて、戸ざしよく固めよなどいふ。されど今正しき道の末とほりて、武藏野の草ふす風枝をならさず、よつの海靜に治まれるをりなれば、白浪のたちよるべき恐もなし。

十二日、あけほのの程に、やどりを出づ。

露むすぶ草の枕のかりぶしにやがて明け行くしのよめの空

藤澤より相摸河渡りて、大磯こいそを過ぐ。浪の音松の風にひびき合ひて、いと高く聞ゆ。沖より汐風の吹上げたるといふ、こまかなるいさご地にて、いと歩みがたけなり。松の葉ごしに浪のよるなど、繪にかきたる様にてをかし。晝やどる所大磯なり。親の敵討ちて本意とけたる曾我十郎が、はやく隙をうかどふ便りとて、かよひなれけん女とらと聞えしも、此あたりに住みけるとか語りつたふ。

大磯歌舞地 昔日各爭妍 虎媛其殊絶 十郎亦偏憐
墮樓觀石氏 宴席殆和田 不是時宗至 使雛獨戴天

時宗一曾我五郎
かき乗物をか
つぎ
外郎一明の歸化
人員外郎

夜をこめて一ま
だ夜の明けぬ内
に

面かげ覺えて一
様子が思ひ出さ
れて
はこね山の歌！
はこふた、あけ
凡て縁語にて綾
なせり

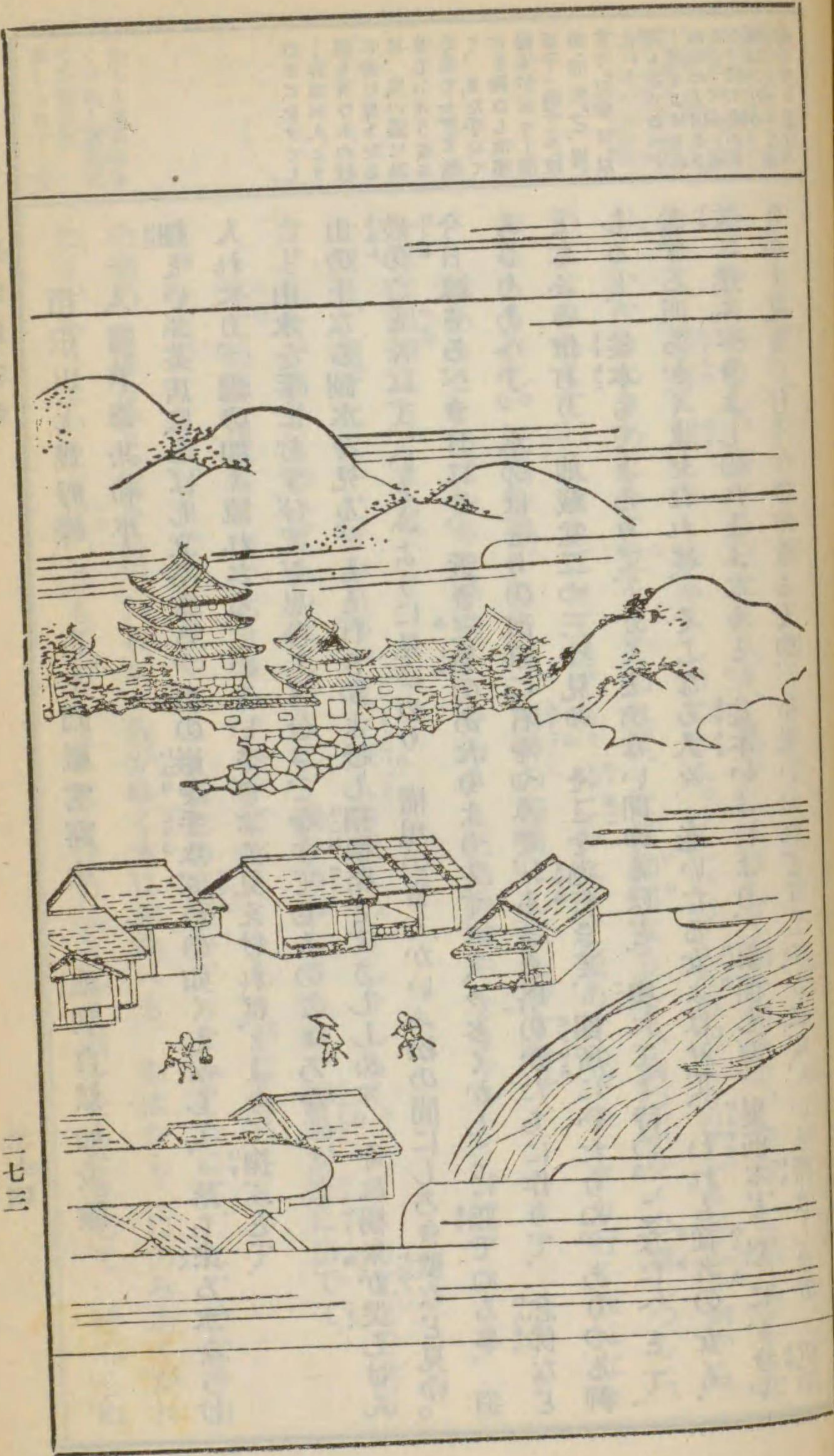
あふぎたふれ一
仰のきて倒れ、
道の險しきさま

かけゆく一可哀
さうに

夕かよりて酒匂河わたる。いかなるにか水まさりて、乗物も漂ひながら、人あまたかき渡して、事なく心ざす岸につきぬ。今夜は小田原に宿りぬ。此處に外郎がつたへし透頂香おほし。

十三日、今日は箱根山こゆべしとて、とく夜をこめておきつ。よこ雲たな引くほど、箱根山をこえかよる。左も右もかさなれる峯々そびえて、谷ふかく、落合ひたる水の岩間を行きなやみて、むせぶ音なども、恐ろしきまでに聞ゆ。松柏いと茂りたる麓の梢より、朝霧のたち渡りたるを見るに、そのかみ下りしをりの面かけ覺えて、

はこね山ふたよびこえて見つるかなふもとの霧のあけほのの空
登りもて行くほど、さがしく恐ろしき事がぎりなし。昔こえきたりし跡ともおほえず、なつかしからぬ邊なりや。年ふりにたる大きな巖ども、家のごとくにてさし出でたるも有り。のほる所はあふぎたふれぬべく、下る坂にはまるびや落ちぬべきと危く、心をくだく事たびくなり。常の言草にわらはべもいふなる、かしの木坂さるすべりとて、ことに險しきは、けに猿もあしを止めがたくやとぞ見ゆる。重き荷など負せたる馬ども、いとどあやふけにかはゆくみの。



箱根山上幾崢嶸 古木回巖雲霧生 地利自然如設險 人瞻君德共和平

畑といふ茶店にしばし立ち寄る。山の巖を手水ぶねの如くしなして、落ち来る水をうけ入れたり。瀧の如く流れたる、いとさぎよく見えければ、よりて掬ふとて、

山水を手にむすびてぞ思ひしるひさごをすてし人のこころを

ひさごをすてし
許由が人より
瓢を貰ひ木の枝
に掛け置きたる
に、風の爲に鳴
りしかばうるさ
くして之を捨て
て、また手にて
水を掬ひし故事
楊朱が云々一淮
南子「楊子見岐
路而哭之、爲
其可以南可以
北」
道もさりあへず
ぬ程の出入り
ありつる例
の、前に殿より
賜はりたる
むくつけいなる
女「うす氣味の

山の上なる湖水を見る。もと行きかよひし箱根路とてさししめす。今は楊朱が哭しけん岐のごとくにて、いとふように見ゆめり。権現の宮とかいふ松の間にしろき壁など見ゆ。今日はさるべき日にや、近き三島のあたりよりとて、入々多くかしこに詣でぬる事、道もさりあへず。水のほとりの河原に石をつみて、小さき塔のかたちを作りて、念佛などとなふる僧有り、地藏堂二つ三つ見ゆ。そこを過行きて、關所にいたりぬ。ありつる御しるし、益本もてまるりて、かくとあない聞ゆるほど、輿たてと待つ。こなたへとて、番する所ちかくよせれば、そこなる人々、老いたる女よばせて、われも從者の女も、彼に逢ふべきよしのたまふなりと、益本いふにより、對面しぬ。髮筋など懇にかきやりつと見る。むくつけいなる女の、年老いぬれどすこやかにて、いと荒ましきが 近や

思き女、女子が
男と偽りて關
を越ゆる事あり
しを改むるため
の老女なるべし
だみたる聲よ
こなまりたる聲
かくするのと
か、するのと字
脱

三島のー見て三島の

かしこにのみあ
くがれ富士に
のみ奪はれ
時しちぬー山

かにより来て、だみたる聲にて物うちいひ、かゝするも、こころづきなく、いかにする事にかと恐ろし。居ならびたる人々、老女にくはしく問ひ聞きて、御印にたがふことなしとて、益本に關とほしぬるよしのたまふ。けにいづくもあやまりなしとおもふ物から、かくいかめしきあたり立ち出でぬれば、なほ如何ならんと、胸つぶるよ心地しつるに、いとうれしくて、人々よばせて過ぎぬ。峠にいたりて髪あけぬ。やよ下り行く坂になりぬるもうれし。三島を過るとて、明神の御前にしばしやすむ。

誠あるこころばかりを手向くるをぬさと三島の神やうくらん
今宵は沼津にとどまる。

十四日、明がたにやどりを出づ。家々旅人の朝たつけしきしるく、女どもの立出で送るなど見ゆ。馬どものいばえわたしたるに、残りの夢もさめぬ。浮島が原に出でて、

不二のねは夏なき山か吹きおろす朝かぜ寒しうきしまがはら
江戸を出でてより、日ごとに見やらる富士の高根の、うすみどりにて、たぐひなき山の姿の、はるかに雲を出でたるが、我がゆく方に相向へる、心はかしこにのみあくがれつよ、今日はいと近づきもて行くまよに、はれなくしく目をそらになして、時しらぬ

は富士のねいつ
とてかかのこま
だらに雪の降る
らん」伊勢物語
みな月の一萬葉
「富士のねに降
り積む雪はみな
づきのもちに消
えては其夜降り
つゝ」

かげるふーかげ
る、雲にてかく
さへよーさへぎ
りかくせよ

と昔の人の詠めけん雪さへ今も見ゆれば、其世のふるごともしいとゆかし。

いづくよりふる白雪のつもりけん雲もおよばぬ富士の高根に

降りかふるほどや來ぬらんみな月のもちにも近きふじの白雪

仰見士峯高倚天 雲端玉立德容鮮 千秋雪色映東海

一抹烟光讓淺間 神秀豈爭他列嶽 仙蹤猶在我危巔

郷人若問途中事 好把此山比聖賢

高根よりこなたに横たはれるは、足高の山といふ。かく名高くはれぐしきあたりには、

いかではひよりけんとをかし。富士山神蹴くづし給ひたるとか、かたはになりては立て

るかひなくこそ。けふは日照りていと暑し。峯のごとくなる雲、とほく見ゆめれど、か

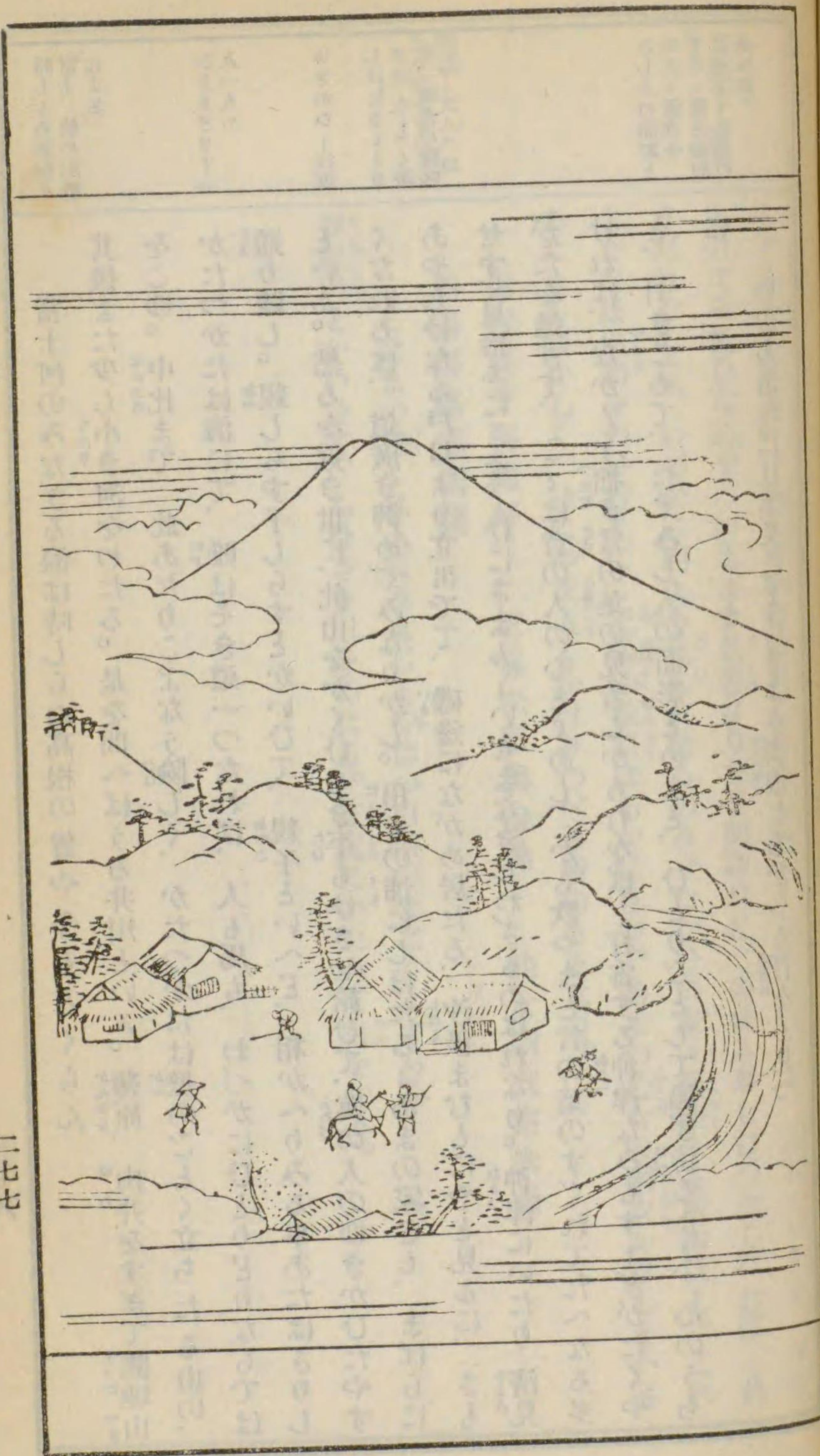
けらふべくもなし。

やくかごと苦しかりけりみな月のてる日をさへよ夕立のくも

足柄山に雲のかよれるも見ゆ。

よそにして過行くせきの跡なれや雲のみこゆるあしがらの山

富士河舟にて渡る。水いとほやくしてあやふけなり。



時しらぬ高根
富士、前の引歌
による

ひとりどりー
人一人か

ゆきかひー往返

しほたるー見
すほらしく暮
す、海士の縁語

みし人の面影と
めよー新古今
下に「清見瀧袖
にせきもる浪の
通ひ路」

富士河のみなぎる浪は時しらぬ高根の雪や今もとくらん
其後また少し小き河をわたる。是を問へばうる井川といふ。蒲原、由井をすぎて薩埵山
をこゆ。中比まで、此あたりこよなう険しく、かたつかたは壁のごとく立ちたる山の、
かたつかたは海にて、唯ほそき道一つなれば、人も馬も、わづかにひとりどりならでは
通り難し。親しらず子しらすとかいひて、親子といへど、相かへりみる事あたはざりし
といふ。然るを近き世に、此山をかくひらき平らけさせ給ひて、萬の人のゆきかひたやす
くなれるは、道廣き御めぐみなりかし。田子の浦にしほたるよあまの家ども、まばらに
あやしけなる戸口より立出でて、磯邊にながめ居たる、汐汲まむとにやと見るに、さも
せず、貝拾ふにこそ。けにさまぐいとまなきしわざもあはれなり。沖津にいたり、清見
がたを過ぎて、こよは昔の人の心とどめし、から歌やまと言の葉のすぐれてたへなる多
ければ、なかく、拙き言の葉の見苦しからむをば、打寄する沖津なみもすよぎがたくや
と、引きこめて、たどみし人の面影とめよと、ひとりごととして過ぎ侍るまよ、心のうち
に、
いのちあればけふ又こよにきよみ瀧浪たちかへる汀をも見つ

むづかしー面倒
臭し

翻蹠ー天人の舞
を形容せる也

とぞふと思はるよ。清見寺の門の前におろしたてよしばしいこふ。益本よりきて、寺に
入りてみ給ひなんや、いとよき景色なりなど聞ゆれど、のほる事もむづかしければ、此
すだれごしに、わづかに門より見入れ侍るのみ。むかひの家々膏藥うる所おほし。これ
よりなほ山路をわけ行くに、三保の松原はるかに見ゆ。あまつ乙女の羽衣かけしといふ
あたりもゆかしく、けにや天人もかけりつべき所のさまなり。
山行直下海邊好 三保松原與浪連 仙女羽衣空去後
斜陽掛處翻蹠
うどはまの疎くは人にみえじとやたつ白浪のまなくよすらん
伊原川とかいひて、ちひさき川をわたる。江尻にいたりて宿をかる。

歸家日記中

府中—今の静岡

おりはへて—織り延べて

待つらんさと—我を待つらん里、故郷

ナギやう者云々—伊勢物語に宇都の山にて修驗者に逢ひ都へ手紙を事づてし事見ゆしとぎ—米の粉にて作れる餅はやく—昔

十五日、江尻を出でて行き、狐崎を過ぎて、梶原がむかしをかなしむ。府中よりまりに行くとして、あべ川といふ川渡る。しづはた山を見て、

なつ衣たれきて見よとおりはへて賤はた山にかゝるしら雲

鞠子河の橋わたりて、宇都の山にのほるほど、待つらんさとを思ひやりて、

古郷のおやの夢にやかよふらん今日こえかゝるうつの山みち

すぎやう者にことづてけん、はるけき古のあとと思ふもなつかし。

つたかへでそれとはなしに夏草のこずゑもしけるうつの山越

坂くだるほどに、十圍子といふ物を家々の軒のつまにかけならべて賣るなり。しとぎの

ちひさき丸を、十づついとに貫ぬけるは、玉を綴りたらんやうなり。旅人買ひもていき

て、わらはべに取らすとぞ。はかなけなる物から、はやくよりする事にて、今にかは

らぬ様なるもあはれなり。晝たちよるやどは岡部なり。

うつの山ふもとに秋のちかければ露もをかべの里といふなり

せとの染飯とて従者ども取りもたり。藤枝ときけど、紫に匂ふ花もなし。嶋田を志して

行く。早苗のみどり色まして、見るまよに秀でゆくを、興かく者ども、おのがどちいふ

を聞けば、今年のなりはひこそいとよく侍れ、雨風の時に順へばなるべし、刈りをさめ

ん秋の稻穂もたのもし、かくゆたかなる年に逢ひ侍らんは、我等が幸なりなど、よろこ

びつゝ行くをきくも、いと嬉しくめでたし。聞きわたる大井川にもいたりぬ。頃日は水

あせ石出でて、河原のみおほく續きて、なほ廣く見ゆ。さいつ頃の長雨に、嶋田、金谷

まで、ひとつになりて、水のたよへたるなどかたるを聞く。さらん時のさま思ひやるも

いとおそろし。瀬ふたつ渡りて、むかふの岸に著きぬ。

東路のなごりはいと大井川このせや渡るかぎりなるらん

今宵は金谷にやどる。日は入りぬれど、なほ暑ければ、庭に水そよがせなどして、障子

あけて見出せば、月いとよく差入りて、たびの空にもおくれぬ影あはれなり。つき山の

かたこぐらくしけりたる、もりかねて人だのめなるにも、住み來じかたのみ面影にたつ

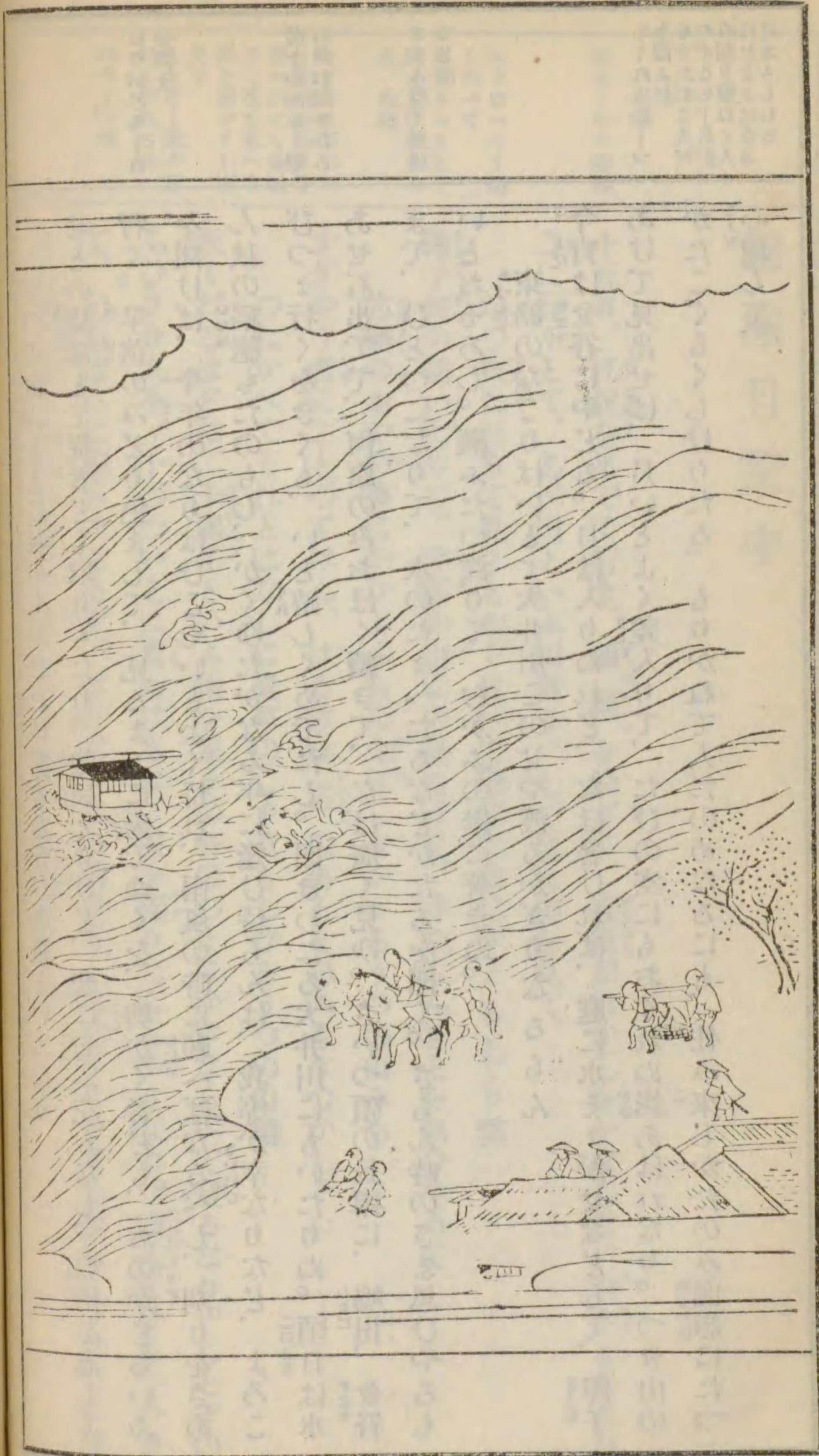
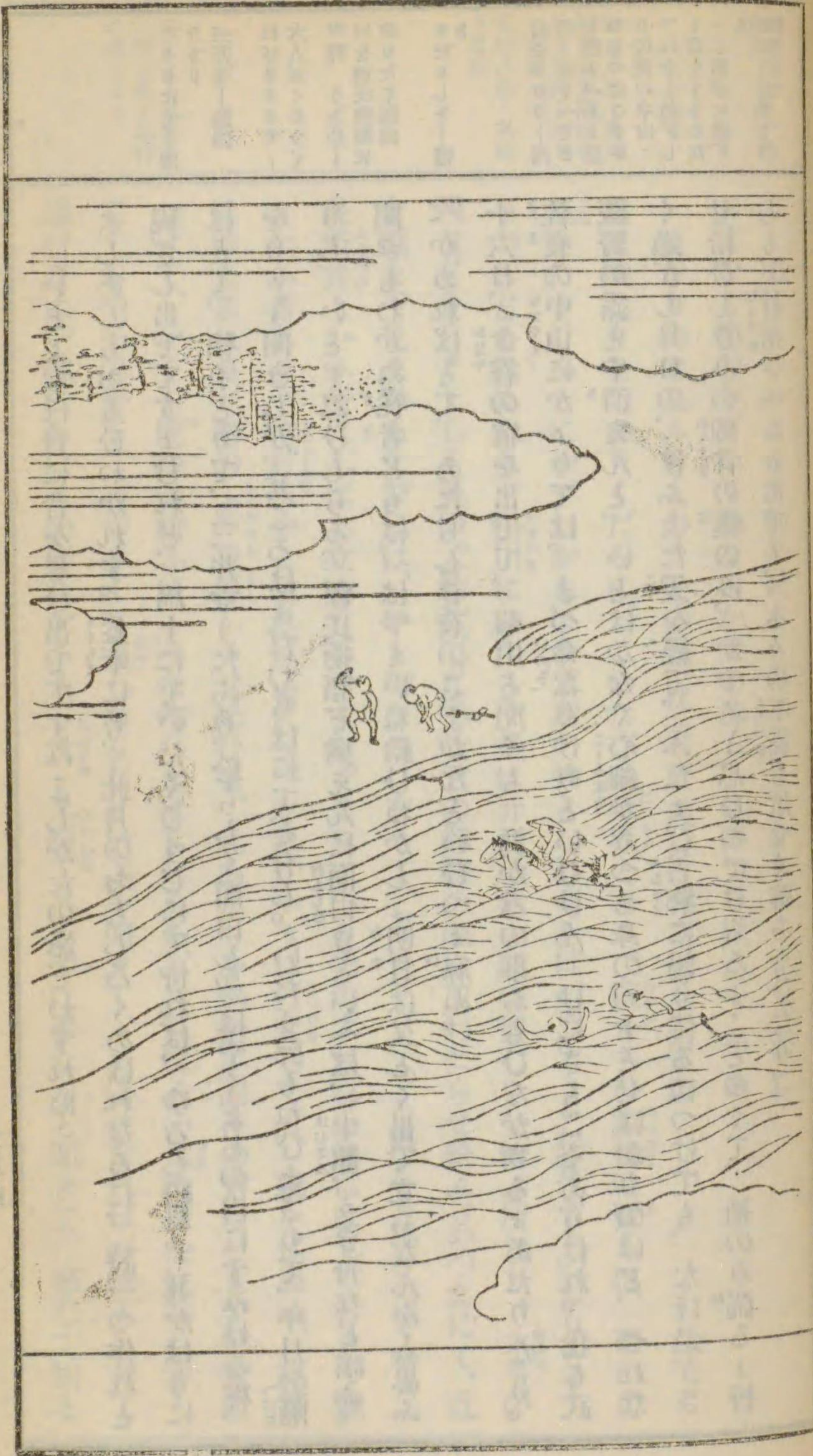
心地して、

おのがどち—自分同士

聞きわたる—衆ね兼ね聞きたる

さらん時—其様なる時

おくれぬ影—つきあふ影
もりかねて人だのめなる—月影の漏り兼ねて人だのめなる
にたよりなる—思あらしむる



いとどなほ月に昔を思ひ出でてすみこしかたの影ぞわすれぬ

ころじにて一困
三井寺一謡曲
ねびまさりて一
大人ぼくなりて
半部、うき舟一
材を源氏物語に
取りたる謡曲
あたらしき一惜

よしあしもおもひわかれず。益本にも、此月のおもしろくあはれなるに、詩一つ作れと
硯ざし出でてすゝむれど、馬上にていたくこうじにて侍れば、ゆるし給へ、其かはりに
はとて、拍子とりて、三井寺うたふも、珍らしく面白し。はやくまどの内にすみける程、
をりく聞きしが、其ころはまだわらはにてぞ有し。いたう聲もねびまさりて、年月の隔
りし、いとど思ひしらる。源氏物語ぞ猶えんに面白きといへば、半部、うき舟など謡ふ。
聞きもわかぬ従者どもは、はやくいね給ひねかし、明日は又とく出で立ちなんをと思ふ
べかめればとて、あたらしき夜のさまかなといひつゝ寐ぬ。

命なりけり一西
行「年をへてま
た越ゆべしと思
ひきや命なりけ
り佐夜の中山」
つれなく過ぎし
一命をもちこた
へて無事に過ぎ
し所せく一あたり
狭きまて

十六日、金谷の宿を出でて、菊川と聞くと、其かみの事おもひながさるゝあたりなり。
佐夜の中山にかよりては、まづ命なりけりといひけん、けにさもこそありけれ。我も武
藏野の露とや消えんと、いとほかなく心細かりつる身の、十とせばかりのほど、つれな
く過ぎし月日の、けふまた爰を経て、ふたとび古郷に歸り侍るにつけても、なほ過ぎさ
せ給ひしきみの御言の葉のみ、かすく思ひつゞけらるゝこと多くて、袖のみ濡るゝ折
しも、村雨さへふり出でて、木々の下露も所せく落ちそひたり。

ふり一古り、降

雨さへやかさねて袖を絞るらんふりにしかたをしたふ涙に
むら雨のすぎゆく跡を山かぜのはらへば落つる松の下つゆ
かりねせしふもとのさとの草枕夢ぞ残れるさよの中山

西山の飢一伯夷
叔齊が首陽山に
入りて厥を採り
し故事
其所の物一其地
の名物

なほ險しきをのほりくだるに、このたびは日坂といふ。蕨もちひ家毎に賣るは、西山の
飢をたすけんとなや。むかしより其所の物となれるをば、何にてまれ買ふものなりとて、
をのこども食ふめり。掛川にいたる。是は井伊伯耆守殿の領じさせ給ふ所なり。大手の
門などきらしく見ゆ。此北の方は、故君の御妹の姫にてわたらせ給ふ。あづまにて、近
き頃まで見え奉るたびには、いと御なさけ有りて、おほせられつる事ども思ひ出で奉る。
晝袋井といふ所にしばし立寄りてやすむ。さきにのり物のすだれの前にはしり行きて歌
うたふ者あり。物狂にやと見れば、皆いふ、かれがやうに乞食しても、親をば養ふ、我等
にはまされり、孝の志を感じさせ給ひて、此あたりを過給ふ國々の君などまで御覽じ
つけて、かくと聞かせ給ふは、みな物たまはらせらる。さればこの里の内をはなれずし
て、おや子のかて、心やすくて過しぬるなどいふを聞きて、あはれなれば、物とらせて
過行きぬ。誠におほくの行きかふ人、貴も賤も、おやに孝なると聞きて、感じて物と

かくと一乞食し
て親を養ふ孝行
の者なりと

民の云々詩經
大雅羔羊篇「民
之秉彝好是懿
德」

らせ侍るは、民のつねをとれる此懿徳をよみすとかや、いとたふとし。見附に往くほど、橋もおほく渡る。坂も又多し。

人しれぬかよひ路ならば東路のみつけの里の名をやいとはん

今宵は濱松にやどらむとて行く間に、天龍川ふたつ有りて、まづ舟にて渡る。水浅くて船行なやみければ、皆おりたちて、舟ばたをとらへておし出す。やをらふかき所に浮み出でて心よく渡りぬ。後の河は徒わたりなり。鳳凰臺に題せし詩を思ひ出でて、をこがましけれど、

天龍河上天龍去 龍去河留二水流 二水中分成大小

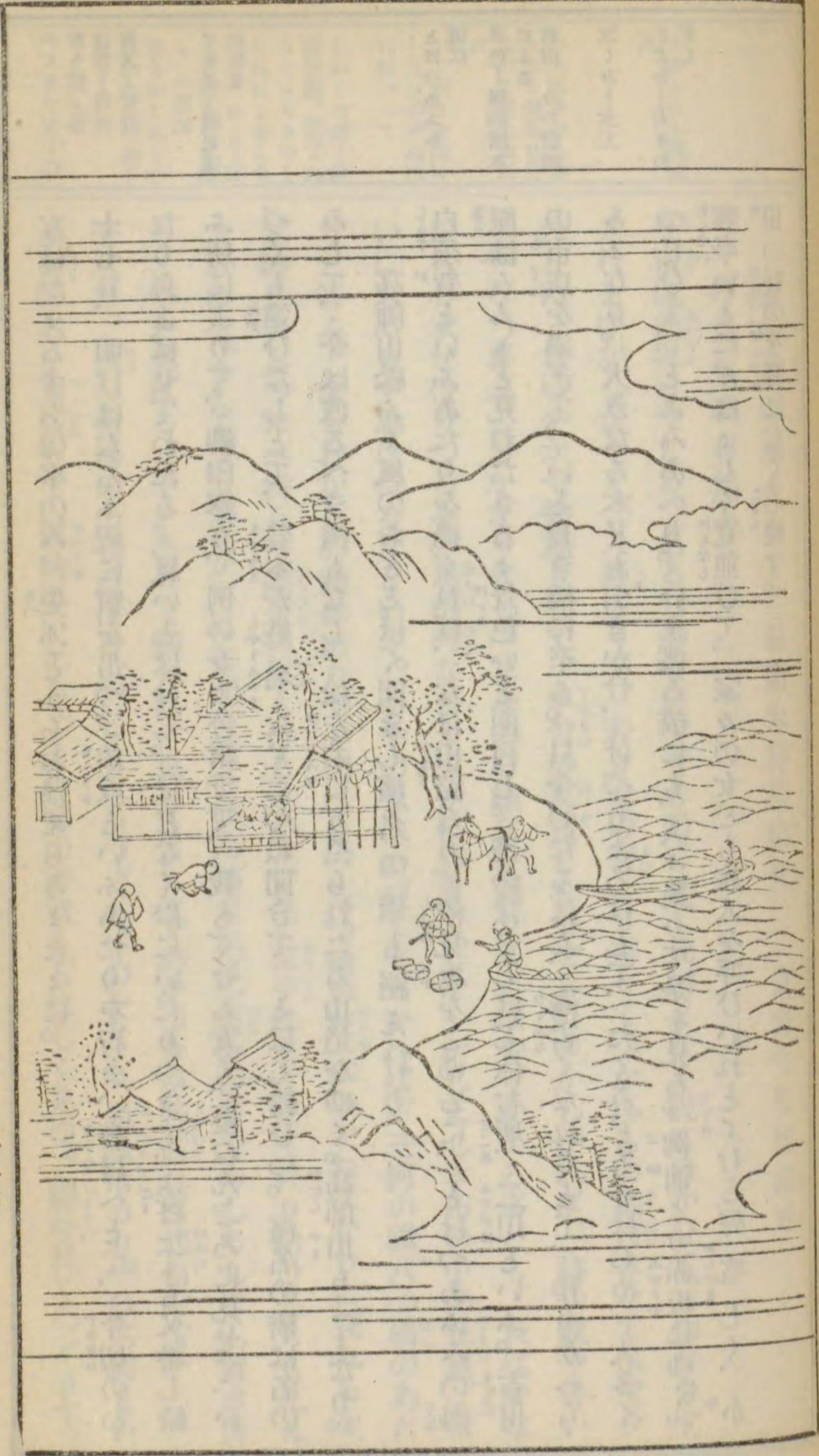
小斯厲揭大斯舟 詩苑有苦葉篇深則厲淺則揭

池田の宿とかや。長者のすみけんむかしの跡も、此ちかきあたりと聞けば、ゆやが言の葉おもひ出でて、

我も又なれしあづまのはなのはる春におくれて今かへるなり

橋ども有りてわたる。濱松にやどりぬ。はま松のかはらぬ色をみても猶かれにし君が蔭ぞかなしき

厲掲原文に註
せり出たる句に
ちて深き處を持
るをいひ掲は
裾をかきあげて
ゆやが言の葉
「如何にせん都
の春もしあづま
の花や散るら



かゝるすぢ一亡
君を偲ぶ事
前坂一辯坂
新居一荒井
ぐせる一供に連
れたる

とほつあふみ一
遠江
景色一傍訓原本
による
吉田一今の豊橋
たくみ一大工
とよみ一大きわ
ざし

なほかゝるすぢの事のみ、先ふとうちおほえらるゝまよに。
十七日、明けはなるよ程に宿を出づ。前坂といふあたりを歩き、新居へとて、今切のわたり舟よばせてわたる。風いとほし。ほどなく岸にいたりつきて、爰にても又番し給ふ所によりて、御印奉り、例の女よび出でて、我もぐせる女も、髪ねんごろに見せて、いづくも違ひなしとて、益本が姓名などたづね聞きて、とほし給ひつ。濱名の橋は名のみして、今は渡るべき橋もなし。松左右にうゑられたる山道をゆく。高師山もこよなり。

高師山松ふく風のおととほく聞きし濱名の橋も絶えけり
白須賀といふあたりを過ぐれば、なほ山路なり。汐見坂をこゆるに、とほつあふみの海原はるく見わたさるゝ景色いと面白し。晝のほどしばし休む所、二川といふ。吉田の市店を過ぎて、いと長き橋に至る。只今わたるはし、漸古くなれりとて、作りかへらるゝなり。大きな木ども引きかけ、けづりまろばして、たくみどもをはじめ、人多くつどひて、とよみあへり。いま渡る橋にも、人々集りて是を見る。御油より赤坂にゆく。客亭いとにぎはしく立並びて、家々の女ども旅人を呼びいれとどむる聲、喧しく、小田の蛙の夕暮になく心地す。

強呼旅客家々女

紛面朱唇巧納交

寓舎今宵何處好

共言有酒有嘉肴

今宵は赤坂にやどる。あるじの女房すきものにて、我何となく硯にむかひて、物かきすさむをゆかしがりて、人静まりて、若き女の宵より来りてつかふるに案内させて出できたりぬ。なにやかや物語りして、手習の反古どもをせちにゆかしがれば、詩や歌や書いてやる。喜ぶことかぎりなし。其身の有様など語りて、はやうかゝる事ども、及ばすながら心よせ侍りつるを、思の外なるよすがにつきて、かくかしましき市の中の住居、ほいにもあらず思ひ侍るなどいふ。おやの里はいづくぞといへば、三河の國八つ橋のあたりと答ふ。今もむかしの跡はありやと問へば、八つ橋の柱にやかたばかりに残れるを、其跡と申しつたへ侍る、業平の塚も侍るとかたる。業平はそこにて終り給ひしとも見えざるを、さる人の過ぎがてにながめ給ひけん跡なれば、後の世までのしるしにし置き侍るにやと思はる。やゝありて歸りぬ。鳥もほどなくあかつきを告渡れば起出でて。
十八日、例の明ほのころほひ、やどりを出づ。よべの女ども、名残惜めり。ひち河といふ里の名を聞渡りて、岡崎にいたる。この國の御城うるはしく見ゆ。驛亭長くつどきて、

すきもの一風流
人
せちにゆかしが
れば一無性に見
たがりほしがれ
ば
思の外なる云々
一思ひ掛けぬ所
に縁づいて
むかしの跡一伊
勢物語、業平、か
らこもきつゝ
なれにし妻しあ
ればはるゝ、来
ぬる旅をしぞ思
ふ一の舊跡
過ぎがてに心
ひかれて行過ぎ
難く

あき物一箇ひ物

みかは一見、三河

はま楸一海邊に生ずる一種の植物普通久ししの縁語にいへど、こゝは「しをれ」の縁とせり、原本「しほ」の假名を用ひ、汐にいひ掛けたる心なるべけれど、しをるの假名は「そ」也
音もたてつべし聲を立てておいあひ泣き出しさう也
逆旅一やどやわびて一閉口して

町たてわたしたる、あき物する家どもも、さま／＼行きかふ人の目とどむべき物どもかざり置きて、いみじう賑しきあたりなり。矢矧を過ぎて、よべ聞きし八つ橋もちかきほどと聞く。

いにしへの跡とみかはの八つ橋に其名ばかりを戀ひや渡らむ
池鯉鮒より鳴海にいたる。
はま楸しをれしたびの衣手にうたてなるみのうら風ぞ吹く

日頃むつまじかりつる女どちのあたりもなつかしく、はるかにもへだたりつるかな、又いつか逢見るべきなど思ひ出づるに、音もたてつべし。

別れこしほどもはるかになるみ瀧なきて千鳥の友したふなり
今宵はあつたの宮の逆旅にやどかる。小刀やうのものもてきて賣る者おほし。

十九日、しばし行きて舟にのりて、桑名に至るほど七里なりといふ。追風吹きてとくつきぬ。又かりそめの宿に立ちいる。家作いとおもしろし。水に臨みてたてたる所なれば、行きかふ舟を見おろして、すどしけなり。城もむかふさまにまぢかく見ゆ。されど海より吹來る風のなまぐさきにわびて、とく爰を出なんといふ。所の香はまぐりなど調じて

おももの一食膳
わたりの一あたり、邊
民の一市のの誤
か、毎日立ちな
がら四日市とは
これ如何にとの
洒落

つと一土産

名高き地藏一關
の地藏

いくそ一幾十
深山

おももの出す。やがてこよを出でゆけば、板橋土橋小川など多かるわたりなれど、此頃のてる日に水みなかわきたり。四日市といふ所にやどる。日毎にたつ民の、など四日とかざりてつけたるさとの名ぞ。

二十日、四日市を出づ。つゑつき村といふ坂をすぎて、石樂師にいたる。ぐしたる女などまうで侍るなり。それよりおりて庄野といふ。こよに小き俵ををかしげにむすびて、燒米すこしばかり入れて、童べのもてあそびに賣るを、そのかみ家に在りし時、あづまのつとに人の得させたる、今思ひ出づれど、今日はさる物もみえず。いとながき橋を渡る。

龜山を過ぎて、城いときよらに見ゆ。ゆき／＼て鈴鹿の關にいたりて、晝の程しばらくいこふ。今は關の戸さしもなくて行きかふめり。名高き地藏ありとて、人々詣でぬる、みづからは心もおもむかねば、物ごしにみやりて過ぎぬ。坂の下より、すどか山のけはしきを登る。河音さやかなるは、八十瀬の浪のこゆるにやとおもはる。田村堂のあたりといふ頃、おもき荷どもおほく擔ひもてくる人々に行逢ひたる、せばき道なればいとあやふし。

鈴鹿山こえていくそのとし月をふりにし道にまたかへるらむ

人生何事多艱險 千里往來山又河 九載遠親今漸近 再經鈴鹿思蹉跎

五月

まだあづまに侍りしさ月の中ごろ、佐渡守殿御國へ歸らせ給はんとて、對馬守殿の御前に御暇乞とて入らせ給ひしをりに、妾もかしこに侍ふときかせ給ひて、めし出でて、過ぎにし方のこと、歌の御物語など仰られたるついでに、古郷に歸り侍るときは、いつ頃とさだめぬるぞと問はせ給ひたるを、秋の頃にてや侍らんと申したりし、思ひの外にいそぎ立ちて、けふ其御國の近きあたりを過ぐれば、

なつ衣一たつの枕詞

なつ衣たつ日をはやくしらませば秋とは君に答へざらまし

かにか坂とかや、山の中をめぐり行きて、土山に至りて、今宵はこよに宿かる。二十一日、水口の市店に出づれば、商人の家々、いとうるはしき組葛籠の調度ども多く並べ置きたる、めもあやなり。小さくをかしきを少しかひ得て、みつゝ行く。石邊とかいか所に、晝のほど立ち寄る。此逆旅過ぎし卯月の頃、おほくやけ侍りといふ。けに皆かりそめに圍ひたる所のみ、長くつゞきて、あはれに見ゆ。よき家どもはみなやけぬ。小家がちなる所のみ残りて、僅に人とどめ、もの商ふなり。けに玉も石もともにやくる

めもあやなり美しくて目もちらつく程也

玉も石も云々書經胤經「火炎」

といへば、山ならねど此さとももえ出でて、かくあさましく、灰になしけるよ、恐ろしき物は火なりと思へば、水と風とも又おそろし、人をすくふものといへど、過ぐれば又人をそこなふめり。三上山のあたりをみやりつゝ、草津川を渡る。草津の驛にいたりて今宵はこよにかり枕の夢をむすぶ。

歸家日記下

廿二日、朝たちて、野路の篠原の名もなつかしく行過ぎぬ。

いとはやも露ぞこほるよ秋立つときのふか聞きし野路の篠原

勢田の長橋を渡るほど、左のかたなる石山を見やりて、ゆかまほしき心地す。紫式部の物語かき給ひけん、はるかなる昔なれど、おもひ見る程は、今其をりの目のまへに浮べるやうにおぼえて、

勢多橋上輿簾裏

遙見石山思古人

紫式部名高且遠

光源氏語麗還新

殘峯秋月浮華洛

巡麓江湖通大津

天色水容明若鏡

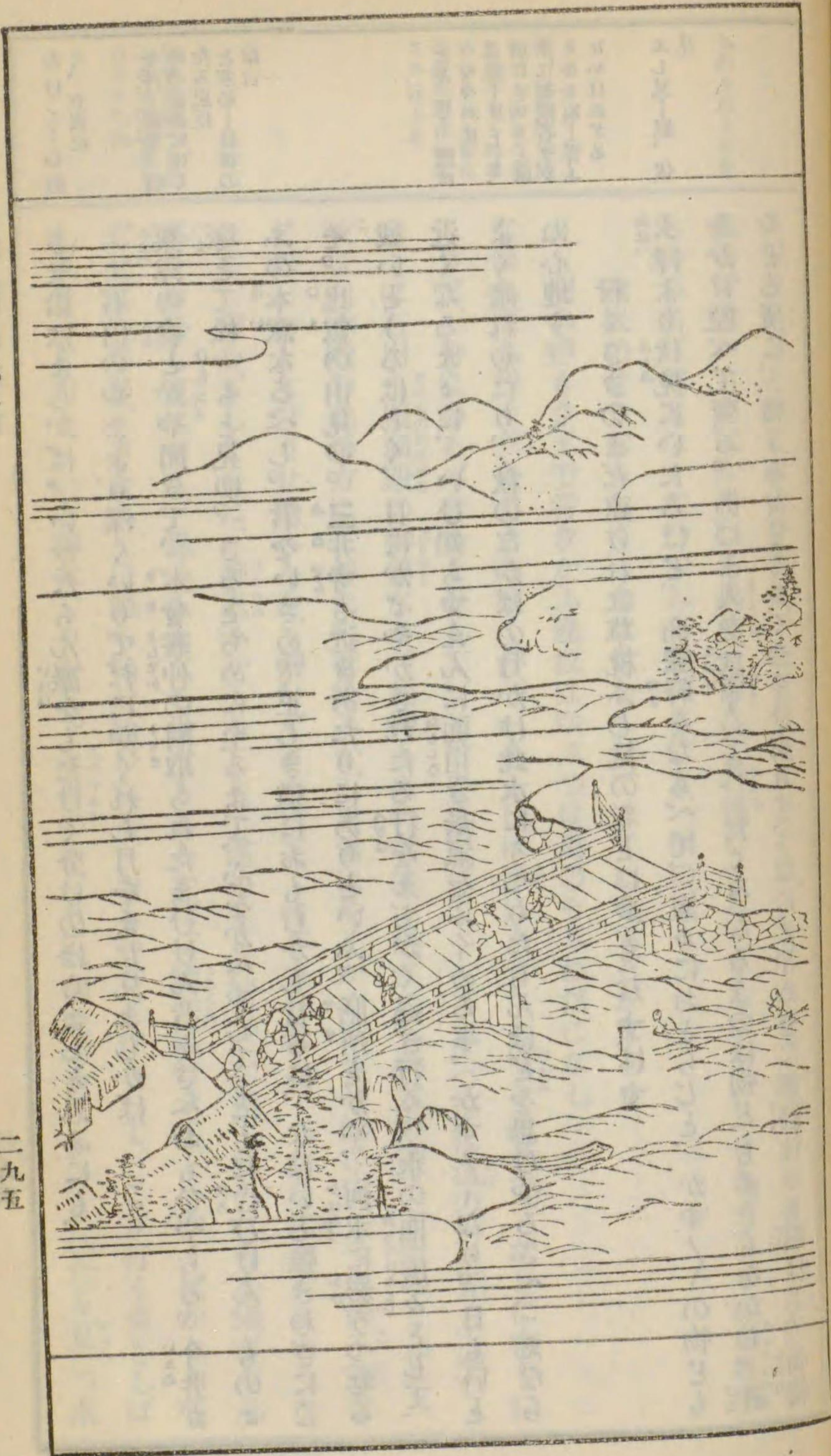
客心對此洗埃塵

世に残すことをしきけば石山のみねどこひしきいにしへの人

行成卿の女のおもひにて、かしこにこもり給ひし頃、「山よりふかく入りやしなまし」となけき給ひけん。われは我君の三日月とともにかくれさせ給ひし、見るだに二たび見え

紫式部の云々
式部石山寺に籠
り湖上の秋月を
見て源氏物語を
書けりとの傳説
に云ら

みねど一峯、見
ねど
おもひ一帳
山よりふかく云
云一續古今十六
一都にて待つべ
き人も思はへ
ず



たけく心健く、立派に
今井兼平、義仲の最後に殉じたる忠臣とちめ最後の場合

えんに艶に
つややかに
景氣けしき、別にけいきと原本に振假名せりえならぬ言ふれいはれざる
見ふし見臥、伏

させ給はましかば、いかならん巖をもたけく分けのほらましと思ふにも、

石山のやまより深くいりてだにかくれし月をまた見ましかば

粟津の森とかや聞きて、木曾義仲の討取られたまひけん昔をさへおもひやらる。今井が塚とて松一もと見ゆ。さるとちめに至るまで、心をかへずして、ともに亡びけん。ものふの本意なるべし。君をいさめて正しき道におもむかしむるは、なほいと難きわざにこそ。比叡の山見ゆ。三井寺も近きあたりにありといふ。膳所とかや、河水に影うつせる城いとうるはしく、日にかどやかされたる汀をまちかく過ぎ行く。水の面廣々として、

近くなるまよに、いひ知らずえんに面白き景氣をふくめる事、かずくなり。日もいとよく晴れわたり、秋のなかばの月かけ此水にうつりたらんほどを思ひやるさへ、えならぬ心地す。
行くさきのまだ遠ければ草枕ふし見のさとに夢もむすばず

大津より伏見にいたるほど、商家軒をならべて、家々におとらじと、かずくの物どもをかけ並べて賣る。あづま人を惑すべき、たくみなるうつは物ども多きもをかし。晝やどる所に、物うる女ども多くつどひ來りて、なにくめせなど勧むるも賑はし。物縫

ちから車一荷車

ゆふつけ鳥一
鶏、此歌清少納言の「夜をこめて鳥のそらねははかるとも世に逢坂の關はゆるさじ」に上る

心ゆく云々一思
ふ存分御馳走したきもの也

ふべき針など殊におほかるは、是ぞ女の目とどむべき所なる。繪をかく者どももあまた見ゆ。ちから車にかけた馬牛、隙なく行逢ひたる、うるさくいふせし。こよは逢坂山といふ名、何となくなつかしく覺ゆるにも、例の、

逢坂のせきならなくに今は世をへだてはてぬる君ぞかなしき
關の戸もさよで行きか逢坂はゆふつけ鳥のそらねだになし

なほしばし行く。舟もおほく浮べ、あるひは岸によせたる堤を過ぎて、かりに宿りに入りて、舟にのるべきよそひして、これより河舟にて下る。夕つかた淀のわたりを過ぐ。こよは石川主殿頭殿の御領なり。此御よめの君は、過ぎにし我君の御子と聞えさせて、故日向守殿の北の方にてわたらせ給ふが、男君はやくかくれさせ給ひて、今は御子達などの、おとなびさせ給へるを、御なぐさめに、すぐさせ給ふ。ちかき比までまるりなれて、御心ざしことに、御惠ふかよりしも、露わすられず。かねて此あたりを過ぎなん事をおほし宣はせて、思ふまよなる世ならましかば、諸共に行きて、心ゆくばかりあるじせばやなど、さまざまに語らはせ給ひたる、おもひつどけられて、こぎ行く舟もしばしよどみなむと、いと御なごりをし。水車のめぐりて、御城内へかけられたる筧に、水

われも浮世に—
金葉集、行燈早
き瀬にたえぬば
かりぞ水車われ
も浮世にめぐるとぞ知れ

しぞく—退く

むつかし—氣が
くさく—する

上き上—上げ
よ、避けよ

秋の水云々—朗
詠「秋水 瀬來船

をまき入るゝが巧みなるも、いみじう面白し。われも浮世にめぐるとぞいはまほしき。むげに近きほどを漕ぎゆけば、いとよく見ゆ。岸のうへに御家の士など番する所にや、りんどうの御紋の幕うちて、ならびるたるもあり。御城は河水に臨みて築かれたるそこなれば、浪のおし動すやうなるも、たぐひなく見所おほきあたりなり。浪にひかれて下り行くまよ、岸のうへなる家ども、あとの方にしぞく様なるもをかし。商人の家、民の家ども、町をたててはるかに續きたり。暮れ行くほどに、火の光星のごとくにて、松の間よりみえかくれす。かなたこなたと、里の名ども聞過ぎぬ。八幡山もまぢかく仰がれさせ給ふ。わが氏の御神と心に仰ぎ奉る。あつかりし名残むつかしければ、河水をくませてのむに、猶ぬるければ捨てつ。舟のそよよとなるを聞きて、戸を開きてみれば、蘆の茂りたるを分け行くなり。月はまだ出でざれど、星の光にていづくもよく見ゆ。帆かけたる舟ども、おほく引きのほすが、こなたざまにくるをば、よきよとにや、舟人のたがひに呼ばはりたるも、なに事をいふならんとおそろし。蚊のいとおほくて、扇をはなたず手馴しをれば、打ちまどろむべき暇もなし。益本は積みたる物どもの上にのほり居て、秋の水みなぎり落ちてと靜にうたふほど、山の端ならで出づる月影も澄みわたりて、

去速、夜雲收盡
月行遲

あるじ—饗應
えさらぬ—止む
を得ざる

あさて—明後日

目もおどろかる
—見てもびつくりする
こころ—澤山

सान—左様に

心ほそく哀れなり。かくてとらの時すぐるころ難波につきぬ。舟とめて、こゝに君の御家あづかりたる人のかたへ、かくと案内きこゆるに、きのふ今日かねて待ち居侍るとて、こなたへと有れば、いとうれしくて、乗物して、此人のかたに至りぬ。待ちとりて、夫婦もろ心にいたはり、あるじしていこはせらる。廿三日、けふはえさらぬ事あれば、あす舟にのるべしとて、今宵はこゝにやどる。益本は隣なる屋に、壁ひとつ隔てゝやどれり。あづまに遣すべき文ども書くと聞きて、われはも只一つ急ぎ書きてやる。此所までたひらかにまるり著きぬるよしを聞え奉るなり。あさてなん此近きあたりなる天満天神の祭なり、こよひより御試樂にわたるありといふ。夕かよりて、あるじの女房のさそはるゝにより、我もつねに仰ぎ奉る御神なれば、いとよき事なりとおもひて、ともに詣で侍る。さをさしのほるほど、面白きわたりにて、こころ慰むわざなり。目もおどろかるまでおほかる舟ども、かなたこなたの岸によせならべて繋ぎ置きたる、よきもあしきも、大きなるも小さきも、こゝらつどへる中をこぎとほる。こなたの舟は逍遙の爲に作れる、やかたなどちひさくをかしけなれば、かしこにもसान思ふらんかし。なには橋とかや、さまざまなる名の橋ども、かずく多かる

こちたきまで
仰山なほど

うらがはしく
亂雑にて

こたみーこの度

そこくーどこ
そこ、何々の殿
様

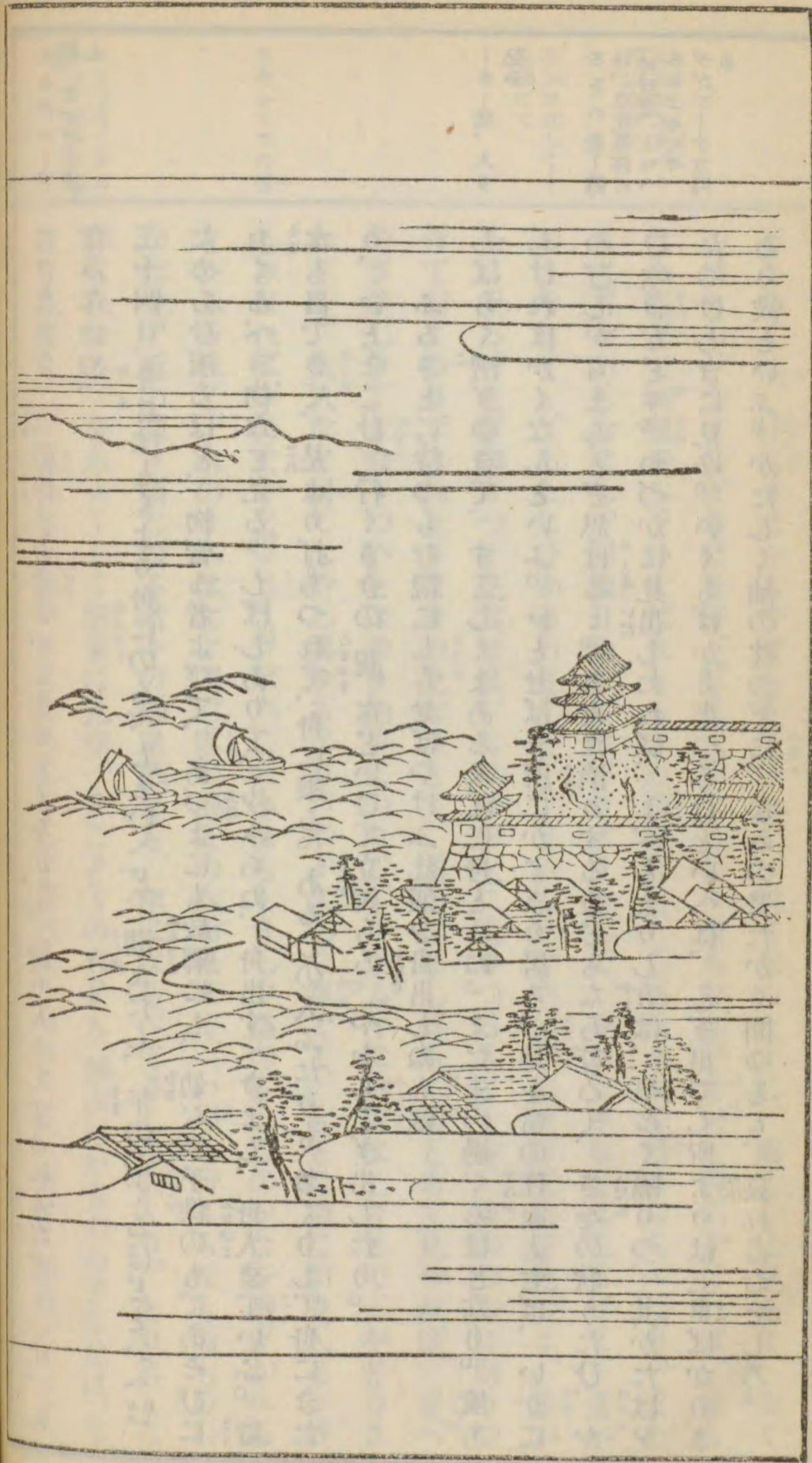
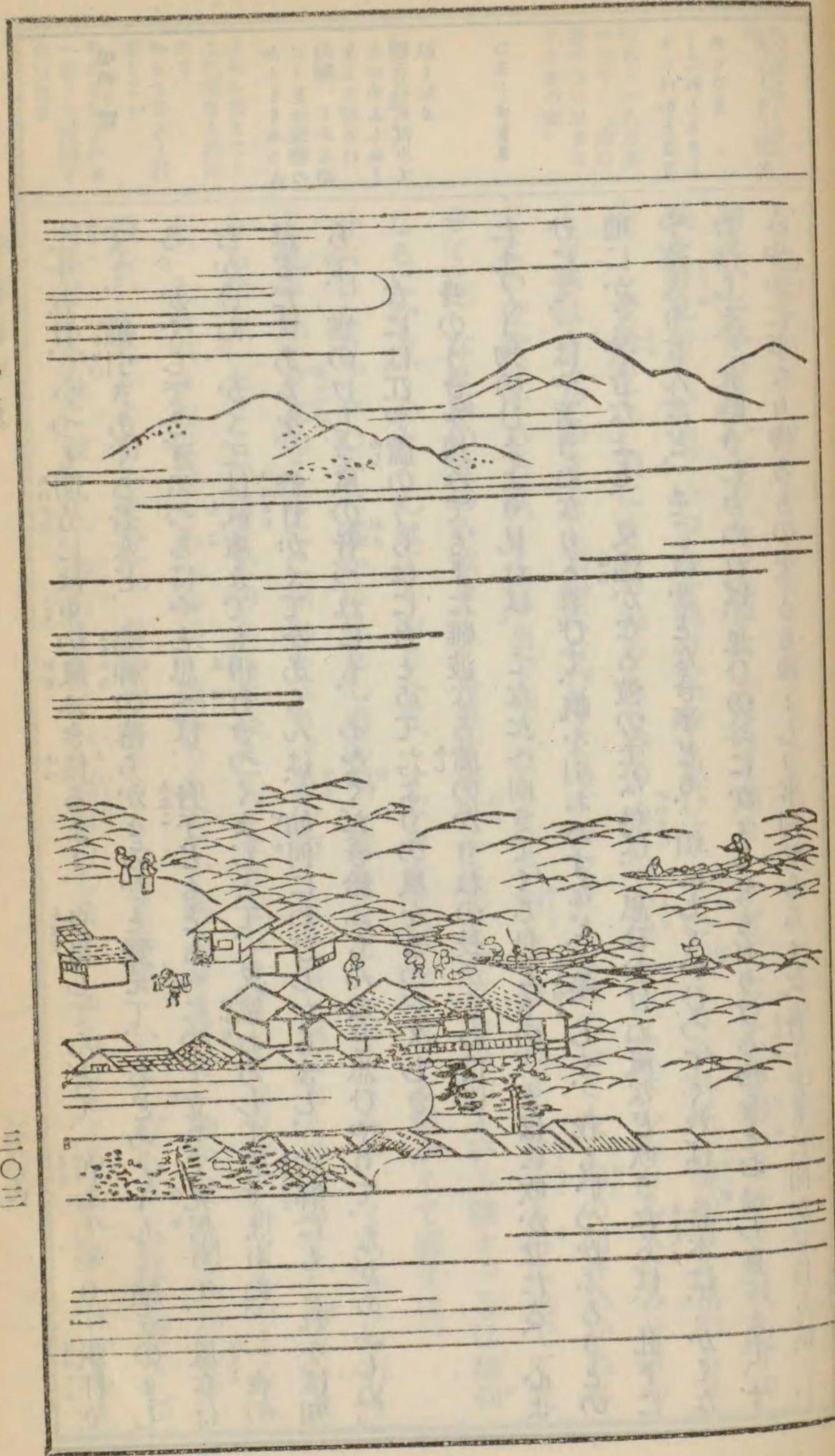
下をゆくは、柱にさはりもやせんと危けれど、近くなるまよに、廣らかに見えて、安くとほりぬ。やよこぎわたりて、心ざす岸につけて、皆おりぬ。宮居も程ちかければ、すなはち詣でて神樂奉る。いまだ火ともさぬ燈籠ども、こちたきまで懸けならべたり。まるる人男女いとおほし。明後日わたりぬべきよういして、やかた車などはしらせて、童べおとななども、あまたひきるありく、いとらうがはしく、傍にさけて是を見つよ、元の舟に乗る。こぎ歸りつよ見渡せば、なほ岸の上に在りつる人ども多く車のつなに取りつきて引くめり。これよりよき物見なりとて、其かたにしばらく舟とめて見やれば、童べのさかしき、太鼓うついとはやき拍子にのりて、さまざまに物狂はしきまで、をどりさわぐを、大人など居てはやし興するなり。やよ久しく奏でて、もとの道に引き入るよけしきなれば、こなたも舟こぎ出して、こたみはもとときし中島のうしろのかたを漕ぎかへるといふめれど、水のうへはたど同じ雲の浪とのみおほえて、いづち行くらんもおもひわかつた。西の國々領じ給ふ君々の御屋敷ども、岸にならべてさし出引入り、とりくくに作られたる、きらくしく嚴重に見ゆ。そこくの舟ども、御みづからのめすなどは、なほうるはしく、暮のもん鮮やかにいちじるし。暮れかよるまよに、おほくの舟どもに火

すみばんー水
飯、水づけのめ

くまー隈、入り
込み

さをの歌一歎
乃、卓氏藻林に
「樟肝聲」といへ
るによるにや
夕だつー夕立降
る

たきたるが、苦の際よりほのかに見ゆるもをかし。歸り入りてするばんなどくひて、みなみないぬ。
二十四日、今日はとくより舟にのるべしといへど、潮まだし、午の過ぐるほどといへば、ためらひ居るほど、物賣る者よびて、あづまにも故郷にも、幼なき子供のもてあそびにおくるべき物など見る。しばしありて、汐みちぬ、舟出すべきよし、舟人きていふ。益本も出でて、是より打ちつれて、舟に乗る。あるじの人ふたりも、おくりして舟にきたり、いとまこひ、行くさきの祝などいひて立歸らる。やをらこぎ出したたり。
ふるさとに待つらむ親にしらせばやけふ此浦を舟出しぬとは
しばらく漕ぎゆきて、すこしくまある入江に舟とめぬ。まだ未の過ぐるほどなり。風あしければかくなるといふ。いとせばき所にかどまり居る。是を常の住家とせば、いかにわびしからましとぞ思はると。あまた泊りする舟どもならびて、さをの歌うたひ、かひ吹きなどす。わづかに見出したれば、よべとまりし方は、早多く隔りつ、其かたは夕たつけしきに見ゆ。いくらばかり来つらむといへば、こぎ出でし所よりは三里ばかりまゐり候といふ。かたしく袖の枕の下に、なみの音たかく聞ゆるも、哀れにおそしる。



鳴神一雷

かくてをあらんは一を強勢の助辭、こんな事をして居るはながめふしぬ物思ひに沈みて臥したり

ひま一すきま

そこはかとなき一これととりとめもなきゆゑしき一思々しき

二十五日、いつも明方には東の風ふき侍るまよ、舟出してんとて、苦おしやり、帆柱立て、錨引きあぐる音など、鳴神の落ちかよるかと思えて、おどろくしく騒ぎのよし。かくしてこぎ出づるにやと思へば、舟子どもともへにやと立ちて見居りて、風なほむかひぬ、かくては武庫までも得行きつくまじとて、又錨おろしてとどまりぬ。一夜のほどだにあるを、終日かくてをあらんは、如何にわびしからまし、古郷にもこれをば知らで、雲のけしき風の音づれにも、心をくだき給ふらんなど思ひやりて、ながめふしぬ。なには江や蘆のうらはに舟とめてたよりの風をまつぞ久しき身のうきを恨みてもまた難波なる蘆のかりねの長からぬ世に

たましく物のひまより見れば、こなたへ向きてくる舟どもの、まほに吹かせたる、心よけにて、はや著きぬなりと喜びて、帆を引おろすなど、羨しく、我もいつかふるさとの地にかく著きなまし、又遙かなる波の上なれば、思ひかけぬ風など吹きたらば、此下にや落入りなんなど、そこはかとなき事ども、煩はしくいひつゞれば、益本は、かくなほしそ、其時きたりぬれば、思ひの外にかよるせも有りける物とおほし喜ぶまで、すみやかに事なり侍るものを、さるゆゑしき事仰せらるゝを、舟子どもに聞かせ侍らば、い

六十四卦一易の卦

心あらん人に見せばや一津の國のなにはあたりの春の曙

くし一屈し

上におぼえて一上に鳴ると思はれて
おとらじと一我劣らじと
そこらとよみあへる一大勢騒ぎ合ひたる

かに腹だちて、いみおそれ侍りなむとてわらふ。けに六十四卦の變通さまふなるも、時といふ事ひとつをなん、大事にし侍ると聞きしかば、などいひ慰む。かくて又あすの曉を待見むといふ。いつしか明けなんと思ひて、苦の隙よりみれば、曉かけて出づる月影、うず曇りて、浪にうつりぬるも、春の曙の心地して、なほ心あらん人にみせばやとぞ思はるゝ。やよよ雲のたなびくころ、かなたこなたの舟ども、例の聞きわかぬ事どもいひかはすめるは、すはや出でぬるならんと、頭もたけたれば、益本も外に出でて見きくに、なほ西の風のみ吹きて、舟出す事叶ふまじとぞ、おのゝいふ聲す。こは如何なるにかと、心もくしはてとおもへど、すべきかたなし、けふも猶かくて暮すは。

廿六日なり。夕つかた遙かに見えし山の端、雲おこりて、海のうへやよくらくなり行くと見るは、夕立のこなたに来れるなり。墨の如くなる雲、俄におそひ來りて、神なり光みちたる、たゞこの舟どもの上におほえて、すさまじきけしきなれば、舟どもおとらじと、とま引きおほひもあへぬに、雨降り出でて、風ふきまぜて、物の音も聞えわかず、浪もいとたく打ちそひて、舟の内にもりくるとまの雫、いとわびしさ、いはむ方なし。舟子ども小舟に乗りて、綱引きなほし、錨おろしそへ、そこらとよみあへる、はやちと

まどろみたる一
うとくと眠り
たる

いふ風ふき出でなんやと危あやふがりいふ。舟もかなたこなた漂たぐよひめぐりて、しづ心なし。戌いぬのすぐる頃、雨はれ風やみて、神かみもとほく去りぬ。いでやさまぐに世を渡るわざどもの、やすからぬ中にも、かた時がほどに心を摧くだき、身を危あやふくして、うきものは舟人ふねびとなりとぞおもひしらるよ。雲さり星見えて、更行かへりゆくまよになほよく晴れわたりぬ。すこしまどろみたるに、曉あかつきちかく月も出でぬ。

浪まくらあかつきちかき山の端はに心ほそくもいづる月かけ

なにはがた風待つふねのかち枕まくらいくよあし間に浮寐うきねしつらん

明け行くまよに、例れいの舟出ふねだしつべきよそひするを、又此度このたびもいかどなどおもふに、誠に

こぎ出しぬる、いとうれし。風も僅すこかに吹きて、おもふ様さまにはあらざめれど、あまり久し

きにわびて、先武庫まきくらまでとこよろざして出で行くなり。

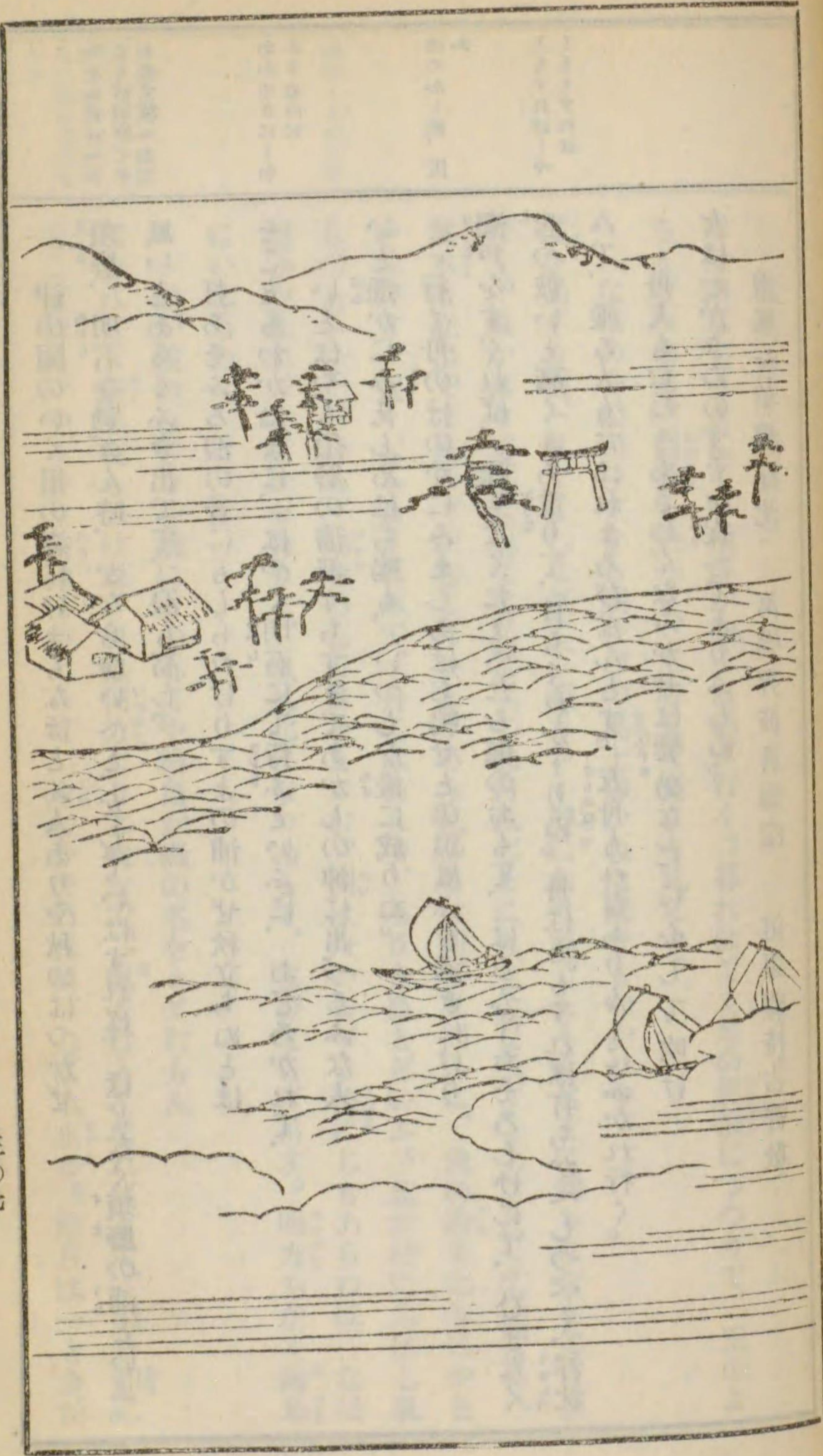
ふき送るなにはの浦のおひ風に月も出しほのあけがたの舟

ひる過ぐる頃、武庫むくらにつきぬ。風又かはれり、しばしこよろみむとて、舟とめて追風おひかぜまつ。

申まをの時ばかり風よくなりぬとて、又こぎ出でて行く。北の風つよく吹きて、帆ほは斜なまめになび

きて、船も傾かたむきながら、疾はやくはしり行く。生田いくたの森も此あたりにや、とはまほし。

月も出しほの一
月の出づる頃し
はの満ち来るを
いふ



かならずいへー
こもが須磨です
と必ず教へよ

わかぬまにーわ
からぬ内に

ほのかー帆、仄
か

ともすればーや
ともすれば

津の國のいく田の森にいまなほとふ人ありや秋のはつかせ
須磨、明石を過ぎん時、かならずいへと、女していはすれば、ほどなく須磨の浦といふ。
風いとあらくふき出でて、浪も高し。

打ちそふる浪の音にもしられけりすまの浦かぜ秋立ちぬとは
そこともわかぬまに、はやく明石にて侍ふといふに、おどろかれて、

いとはやも須磨の浦波うちすぎてあかしの沖に出づるふな人
いと遙かにみえしあはぢ嶋も、いつしか後に成りぬ。

行く舟のほのかにみえしあはぢ嶋せとの追風ふき過ぎにけり

瀬戸をすぐれば、際もなくたよへたる海のおもて、はるくおそろしけにて、ひまなく
起つ波いと高くうち重りて、日もくれかよりぬ。舟はともすれば打ちかへしつべく、浮沈
みて、乗る人もたふれまろびなんとす。友舟もみなちりぐにふかれ行く。

舟人もむねうちさわくなみかぜは響のなだに心して吹け
女はわがきぬのすそを捉へてよりふしぬ。

乗風一葉幾浮沈

萬疊奔波蒼海深

這裏雖持古賢敬

無人岸上説無心

なほおなじさまにて、飛ぶが如くに過ぎ行く。暮れはて星の影浪にうつりて、玉のよ
るとぞみゆる。高砂といへど、くらくて能くも見えず。

なみの音松のひびきも高さごの尾上のかねは聞きもわかれず

爰を過ぐる頃、風すこしなきて、浪もやと静になりぬ。とくゑじまに到りなむとてこぎ
行く。風かはりて、西の方より吹出で、此舟ゑじまにも、え行きつくまじといふを聞きて、
益本も立出でて見る。かしこにいとくろう見ゆるは何ぞと問ふに、舟の泊りたるにやと
いふ聲す。近くなるまゝにみて、舟にはあらず、小さき島とぞいふ。此かけにしばし風
しづめてといひて、錨おろして舟をとどむ。例は舟いるべき湊にしもあらねば、なほ
漂ひやまず。とばかり有りて、風又北になりぬとて、喜びてこぎ出す。明方ちかく繪島
にいたりぬ。

例はーふだんは

むとくー一向教
能なし
汐むかひー汐の
舟に向ひ来るを
いふ

松が枝のみどりを浪にうつしてや繪島が磯の名をとどむらん
二十八日、斯て夜も明けぬ。風は何方よりも吹かて、帆もむとくなればとて、引き卸し
てこぎ行く。やうやく室津にいたりて、汐むかひぬれば、しばし止る。昨日は一ときが

ありとある一ある限りの

しぞく一退く

ふよう一役に立たぬ

さきこえ給へ一其旨御聞かせ下さい

うし一憂し、牛

間にあまたの所を吹過ぎぬるを、けふは追風もなければ、一甲ばかり行くも、あるかぎり力を出して艫を押すなり。揖保の郡網干といふ所も、我國の君領じさせ給ふ地なり。その前なる海をもおし渡る。くれ行く程に、汐よくなりぬ、追風の吹きなば、唯一わたりのほどに、わが御國につきなん物をといへど、たゞ和ぎに和ぎてしづまれば、ありとあるをのこども、艫を取りて歌うたひつと、よもすがら漕ぎ行く。あかつき近くなるま、又引汐になりぬといふ。舟はこぐ方にはゆかで、流にひかれてしぞくやうなれば、力を盡してもふようなり、爰に船繋ぎてんといふ。大きな舟の、右のかたに漕ぎくるより、こなたの船にいふやう、船つなぎ給はど、我もこよにとまり侍りなん、あかつきに出で給ふをりは、さきこえ給へといふ。心得さふらふとて、かなたこなた錨おろす音してしづまりぬ。いづくの誰としらぬものの、たがひにかくいひあへるも、なさけ有りておほゆ。

二十九日、夜明けてみれば、牛窓なりといふ。

世を渡る身をうし窓の明けくれを漕行く舟のうへにてや見ん
今日はいとく讃岐につきなんといへど、なほ同じさまにて、風なかりしかば、棹もや

けざやか一けは發語、さやか、はつきり
そのほど一あの邊

心ときめきして一胸もどきうして

すめすこがれ行く。さこそいへ、近づきゆくまよ、もとみし方の山どもかすく見えて、いとうれし。備前の國にゆく舟路なりといふ方も見ゆ。沙彌島、鹽飽島など、そのかみ朝夕に聞きし所ども、いまぞ目にちかく左右に見る。君の御城、山の間よりはるかにさし出でたる、みどりの松、白き壁、けざやかにて、九年を隔てよ今またあふぎ見る、めづらしく、嬉しさとふべき物なし。そのほどぞ我親の住家ならむと、益本と共に見て歡ぶ。はや岸に著きなむとおもふに、又汐のみつるほどを待つとて、眞島の島のかげに舟とめて、ゆふべを待つほど、千歳をすぐすこちす。いつしか父母妹などに逢見んほど、いかならんと、心ときめきして、なにもく思ひわかれざるまよ、硯もとりやりて、はらから共にとくつきなん事をのみいふ。

井上氏 女通書

歸家日記終

井上氏名通、京極備中州刺史家臣儀左衛門之女、幼而慧敏、讀書賦詩、兼通和歌、夙以雅才聞焉。刺史母夫人召之武江、使侍左右、有年、英才名籍甚、一時喧傳。先妣素善倭歌、聞通之才、喜寄書唱酬往來、交情甚厚。母夫人下世之後、嫁三田茂左衛門、歸于讚州丸龜。此一冊其紀行之作也。女子之有才藻、而閨操貞正、若通者、近世所罕覩也。況先妣之遺愛莫過焉。故書之以傳之云。

元祿庚辰仲秋日

跡部良顯跋之

六角通御幸町西街

正德六年丙申正月穀旦

皇都書林

柳枝軒茨城信清

繡梓

庚子道の記序

水上みなかみすみてながると河も、おちゆくすととなりては、やうくあらぬ蘆芥ちりあけにけがれて、つひにもとの清きすがたをうしなふ事あり。詞の道もまたかくのごとし。上あがれる世のみやびかなりし手ぶりも、あまたの年なみをわたりては、いつしかとさとびたるならはしこそ多くはいで來にたれ。かれいにしへはみなもとなり、今はするなり。その源にありては、もとめずともおのづからに清すみゆくながれに従はむ事はやすかるべきを、後にありては、あくたをはらひて、ことさらに清すき瀬をたづぬるわざなれば、いとかたしともかたしや。わが友清水濱臣のぬしは、詞の學に廣く、文つくるみやびに心ふかき人なるが、この比くらたけ女が道の記を得て、おのれにかたらく、女房の日記といふもの、今の世にもやむごとなき殿のあたり、おくまりたる宮のうちなどよりもれつたへたるには、心にきかたに人のおもへるたぐひもこれかれあれど、よく見もてゆけば、これはしもと取り出でていふべきは猶少し、しかるを此道の記を見るに、いたくも書きけるかな、世のかいなでの類たぐひにはあ

らずといふを、かへさひよみてあぢはふれば、けにも詞の源をよく汲み知りて、清きみづぐきの跡をぞとどめたる。今このなすらひをいはむには、いにしへの女房のなかにこそもとむべけれ。さるは蜻蛉かひろふむらさき紫むらさきにほはしき筆すさみにもはぢず、また更科さらしな十六夜きよよひのあてなる口つきにもおとらぬは、いとこそめづらかなれ。そもくゝいかなりし人のむすめぞと問ふに、そはくはしくもしらねど、そのかみよるべなき露の世をかこちて、はかなきふせやの月にうたへるうかれめの流ながれなりきとなん聞きつるはといふ。さはいへ、むぐらにとぢられたらむあたりに、かくまでかぐはしき花はいかでおひいでけむ。もしはもとのねざし賤しからぬが、よにはふれたる、玉淵がむすめの類たぐひにはあらぬにや。

平 春 海

さよなみの屋のあるじ、ふみのうみにあさりして、よにめづらしき玉たまに貝かひに、かづきいづるわざにいそしかるが、このごろひとつの玉をなむえたりける。そのたまは、わたつみの神のいつけるとしもなく、あまのあかるたまのつくれるにもあらず、となかのいくりにまじりたりければ、なみくゝのあまならましかば、たゞに見過すべきを、しらなみのやへをりの上をかしこしともせず、やしほぢのしほのうづしほをわけ、千ひろのそこひをきはめてしも取り得たる眞玉になむ有りける。かくいそしきあまにしもあらざらましかば、もにうづもれて、知る人もあらじを、よにあらはれいでしは、この玉のさきはひといふべくなむ。にしごりのをぢのはしがきにつきぬれば、なにをかいはむ。たゞこととはぬま玉にかはりて、よろこばしさのひとことを、ことあけするのみ。

橘 千 蔭

（Faint bleed-through text from the reverse side of the page, mostly illegible due to fading and ghosting.)

庚子道の記

武 女

女は云々一禮禮
弓下「婦人不
越「疆而甲人
あまの子一朗詠
「白浪の上する
播に世をすぐす
あまの子なれば
宿もさだめず
さそふ水一古今
雑下、小町わび
ぬれば身をうき
草の根をたえて
誘ふ水あらばい
なんぞ思ふ
うちとけて一後
撰戀五、こひし
くばかげをだに
見て慰め上わが
うちとけて忍ぶ

女は疆をこえずとこそ、ふるき書にもいへ。されどそはうるはしき人の上なめり。あまの子のよるべなき身は、さそふ水にまかせて、西へ流れ、東へさすらひて、つひの終さだめかねぬぞ、あはれにあさましきわざなる。しかりとて如何はせむ。此春は故郷のあづまの花に催されぬ。七年あまりなれし人々のなごりも大かたならねど、なほおやおはさん方に心いそがるよを、かのうちとけて忍顔なる心になんあると、人の思ひくたさんも、さすがにやさしう、はたわづらはしきすぢなりけり。かくいふまでは、なほ尾張のくに名古屋なりき。二月二十日あまり七日のあかつき深く旅立ちしに、細うかすかなる月の、霞のそこに見えたる、れいよりもことにあはれなり。
あすもまた見つゝを行かん月ながら此あかつきは涙おちけり

がはなる」
 くたさんーけな
 さん
 やさしうー恥し
 く
 琵琶の音に云々
 一治承三年妙音
 院太政大臣師長
 公を尾張國井戸
 田へ流罪の事、
 又熱田明神公の
 琵琶の音に感じ
 たる事など感衰
 記、平家物語等
 に見ゆ
 古き道の記一増
 基法師の遠江の
 道の記、藤原孝
 標女の更科日記
 などに見えたる
 をいふ
 つくーことづ
 く、依頼す
 八橋一伊勢物語
 三河の國八橋と
 いふ所にいたり
 ぬ(中略)その澤

にかきつばたい
 とおもしらく咲
 きたり云々
 ひぢかき雨一俄
 か雨六帖「いも
 がかど行過ぎか
 ねつひぢかきの
 雨もふらなんあ
 まがくれせん」
 久方の雨といふ
 枕詞より轉訛せ
 るならん
 難波わたり一更
 科日記にも「難
 波わたりにくら
 ぶればなごめて
 たくうたひた
 り」と見ゆ、古語
 也
 だみたる一訛り
 たる
 ひたくけぬ一瀨
 みなくなりたる
 意
 しり給ふ一治め
 給ふ
 草のかきはも云
 云一治平の世に
 さる事あらんや

熱田の鳥居濱にいづるほど、夜あけにけり。井戸田といふ所は、いにしへやごとなき人
 の、しばし住み給ひしあとなり。琵琶の音に神のめでたまひけんなど、いとかしこし。
 鳴海をすぐとて、

うきにさへなれて鳴海のあまたよび浦の濱路を歩き通ひぬる
 といへど、今は浦づたふ道はおきて、上野の道のなほ上をぞゆきかふことになんなりぬ
 る。尾張と三河とのさかひ、志賀須香といふわたりせしよし、古き道の記どもに書け
 れど、今はさるわたりありとも見えず、境川とて細きながれのあるに、土橋ひとつかけ
 たり。これまでおくりにとて來し人のかへるに、尾張にその人のもとにとて、文かきて
 つく。

うかりしも今ぞ戀しきしかすがに住みこし里を出ぬと思へば
 としごろ尾張をすみうくのみ思ひしに、三河にかよる程は、さすがに名残も惜しかりけ
 り。ふみのことばにも、志す故郷にとくつきてなど書きしを、れいのわびしき心よと、
 あとにさへ言ふなるべし。八橋は中將のいこひ給ひし所なり、今もかきつばたの咲くに
 かあらん、道のついでならねば、よそになして過ぎゆくものから、

かきつばたへだつともあやし心にはかけつるものをぬまの八橋
 二むら山はあととなりけん、宮路山は此あたりなるべけれども、矢矧の里すぐるほどより、
 名さへなつかしからぬひぢかき雨とかふり出でて、蓑つけし馬いづらなど、従者ども立
 ち騒ぐほど、いぶせき籠のうちにありければ、ものも覺えず。藤川といふほどより、日
 もくれしなるべし。御油の宿に宵すがりて著きぬ。こよには女どものあまたありて、た
 はれ男の心とるけしきなり。難波わたりなどうたかにもあらで、たゞだみたる聲して、
 さかしらに口迅なるものいひ聞ゆ。

おのづからみもひたよけぬ旅やかた恥しと思ふ人しなれば
 あなかま、女のほこりかなるは、人のにくむにをといふ。二十八日つとめて御油をいづ。
 吉田といふ所の橋をわたれば、左にをかしき山の見ゆるを、人にとへば、石巻山とぞい
 ふ。このあたりしり給ふ君のうへに、もし不思議の事あらんとては、此山の鳴る事あり
 とぞ。草のかき葉も言やめし世に、ある事にかはとあらがうて過ぐる人もあり。高師山
 は文字にかきけるがいみじう目だたし、いづれの山に何をか教へて、さる名をばおひにけ
 ん。又みやこさへまだしと思ふに、山の櫻咲きたるもあやし。

と論じて通る人もありと也、祝詞の文句に取るたかし山一夫木爲家、たかし山ゆふこえはてくやすこへばふもとの濱にもしほやく見ゆ、
 白菅一枕冊子、
 「渡は白のわたリ」今の白須賀也
 荒江一今の荒井ちく一祿、褒美かづけさせ賜ひ

板田のはし一萬葉十一「をはりだの板田のはしのかげれなばけたよりゆかんなこひそわざも」

道いそぐをちかた人もとまりけりたかしの山の花のしたかけ
 潮見といへる坂の上よりは、遠江のうなばらはるく見わたさる。たかし山ふもとの濱とよめるは、此わたりなるべし。馬おふ男のかたりけるは、十年ばかり昔の事なりけり、難波よりあづまへかよふ舟の有りに、この白菅のみなとちかくにて、あらし風にあひ、舟は岩にあたりてくだけつるに、帆ばしら楫などの折れたるにとりつきて、十一人乗りのもの、一人もしづまでたごよへるが、日數十九日経しとぞ。二十日にあたるあした、荒江の沖にてつりするものどもの見つけて、あはれがりて、おのが舟にたすけ乗せ、關所にまゐりてかうくと申しつれば、よくもつかまつりぬとて、公まできこえ上げ、ろくなどかづけさせ給ひけり。さてかの舟人どもの中にも、老いたるが一人なくなりて、残はみな事なくながらへつよ、今なほ難波にかへり住みて、年毎にかの釣人のもとに消息し、むくいすとなん。けにかばかりの不思議の命もあるものにやあらん。濱名の橋は跡だにさだかならず、過來し里の名に橋本などいふ所のあるや、昔のなごりならむ。板田のはしならば、せめてけたよりも行かんを。
 名のみなほ聞きこそわたれ東路のはまなの橋は跡だにもなし

濱名川一夫木、浪、土御門院小宰相、第二句入沙さむきと有り

荒江一荒井

客舎云々一原句「客舎并州已十霜、歸心日夜憶咸陽、無端更渡桑乾水、却望并州」是故郷一をこなり一馬鹿らし
 舟こぞりて一同舟の人一同、伊勢物語の句にとる
 曳馬の宿一濱松ねのび一子日寮伸

小宰相の君の歌に、「濱名川入しほ遠き山おろしにたかしの沖もあれまさるなり」とよみ給へるも、此所なるべし。たかしの濱、高砂の沖などは、和泉にあるをぞ歌にはよめる。また濱名の橋は入江にかけられし橋なれば、濱名川とよみ給へるもいかにぞやなどいふ者のありし。さはれくだれる世の人のいかで古への事をばさだむべき。荒江ふねにてわたる。けふは風もなく、わづらはしからず。唐に賈島といへる人の、并州といふ國に久しう住みなれて後、都にかへりのほりける時、桑乾といふわたりすとて、思ひつどけたりしからうたの、今身のうへにあひたるをふと思ひいでて、いといたうあはれにて、いくたびか誦しけるに、文字五つ六つかへたれば、悪う聞ゆるも一つは興あり。
 客舎尾州已七霜 歸心日夜憶東陽 無端更渡新江水
 却望尾州是故郷
 かく誦するををこなりとて、舟舉りて笑ふ。なにかさのみはおとしめ給ふらん、才も不才もみな故郷ひとつはもたるをといふを、又笑ふもをかし。舞坂につきぬ。なほ行き行きて曳馬の宿にやどる。
 ひめ小松ひくまの野べのかり枕けにねのびする人ぞおほかる

あうよりて一奥の方へよりて

式一延喜式神名
花のたよりにつ
けて社頭に花
の咲き句へるに
つけて始めて神
社のあるに心づ
きしと也
柳さびとも眉
の名、柳佐比は
無位社人等の著
用、諸眉は攝家
等の公達着用
宇都の山越一伊
勢物語の越にト
る
精進物云々一枕
草紙「思はん子
を法師になした
らんこそはいと
心苦しけれ、さ
るはいと頼もし

はもらしつ。ふせ屋の板敷に尻かけて、しばしおくるよ人まつほど、
大井川みづおとたかきよひくは岸のとまやに夢もむすばじ
とおもひやらる。島田の入口ひだりのかたへ 並木の櫻うゑわたして あうよりて玉垣
しわたしたる社の見ゆるを、いかなる神にかおはすると問へば、大井の神とをしへぬ。
いづれの神をまつりけん、式などにのり給へるかしらす。幾度か廣前をすぎながら、花
のたよりにつけて、今日なん見いでたてまつりたる、

なほざりのぬさと見えす神垣にはるの手向し花のしらゆふ
瀬戸川をわたるに見ゆるを、烏帽子山とをしふ。柳さびなどのいやしきにはあらで、も
ろ眉のかすみにもりたるが、いとをかすと覺ゆ。宇都の山越に、修行者二人三人あひた
り。むかし物語のけしきにはあらで、馬に乗りて行くなりけり。法師などは、いつも徒
歩にてやつれたらむが様よくやさし。此行者どもは肥えあぶらづきて、常に精進物のあ
しきをくふとは見えざりけり。彼にそごるなる文などことづけたらば、物ゆかしがりて、
己まづ開きても見るらむとおもひやるも、罪ふかくや。山の岨に莖のさきたるを、
やよ莖こころにまかす旅ならばひとよはねなんうつの山べに

きわざを、唯木
の端などの様に
思ひたらんこ
そ、いとほしけ
れ。精進物のあ
しきを食ひ

た春の日に一
新古今春上、壬
生思見一やかず
とも草はもえな
んかすが野はた
だ春の日にまか
せたらなん
けそ一願證、
あらは

かんざしも云々
一禮内則に「女
子十年不出（中
略）十有五年而
笄二十而嫁」
面影に立つ一其
様子が目の前に
もちつく
家もひろく一
門も榮えはびこ
り

みやま木の中に櫻の咲きたるを見つけたるは、誠にしるべ得たる心地して、めづらしく
も哀にもぞ覺ゆる。散りて谷川にながるよ様、はためでたし。
雲と見え雪とちり行くはてはまた花のなみたつ宇都の山がは
丸子の宿のうしろの山に、火の高くもゆれば、うちおどろかれて、あれは如何にと問へ
ば、蕨のため焼くなりといらふ。たど春の日にと思はるよに、風さへ吹けば、いと心も
となし。

春の野に下もえいそぐ早蕨をさのみは人のやかずもあらなん
阿部川のほとりより暮れかよりて、賤機山もけそうには見えす。

鶯のこゑのあやめもわかぬまではやくれそむるしづはたの山
こよひのやどりは江尻といふ所なり。そのかみかんざしもせざりしほどにて、伯父なり
ける僧にぐして京へのほりし時、此宿に伯父の僧のしれる人あるが、三保の松原見せし
事ありき。家のうしろより舟さし出でて、富士は更なり、伊豆、駿河、海越に信濃の山
山さへ見えわたる景色、今も猶面影に立つ心地す。松原のうちには、三保の御神のみや
しろおはす。祝などの妻子具したるが、家もひろく、従者などの多くて住むなり。よそ

すゞなるめ云
 云一飛んだ思ひ
 をするめ目海
 布とを掛く
 世の中の云々
 白氏文集太行路
 「巫峽之水能覆
 舟若比人心是
 安流」の意にと
 神の御厨一祭祀
 の料とすべき神
 社所有の財産を
 いふ
 ふんやのすけ云
 云一圖書助相當
 正六位下
 もたる一持ちた
 る
 三保は姫神一或
 書に引ける駿河
 風土記に依るに
 祭神御穂津彦命
 御穂津媛命、御
 穂津彦は大己貴
 命、御穂津媛は
 其妃なりとい
 ふ、二神出雲國
 三穂ヶ崎よりこ
 こに遷座し給ふ
 故に三種の神と

より見し様は、海原の中にさよやかにさし出でたる所なれば、さこそ心ほそ、すゞろなるめのみ見るらんと思ふに、そこに到りて見れば、さもあらざりけり。波の音風の聲などこそ騒がしけれ、それも世の中のわたり苦しきにくらべては、いつもなきたる心地こそせめ。神の御厨の、昔より寄せられたるあれば、朝夕のけぶりたゆることなしとぞ。宮司は太田といへるが、ふんやのすけにて、六位のものなり。娘一人もたるを、いたうかしづける様なり。客人のある時は、必ず此娘に等すよめて、其夜もひきけり。呂律のしらべにこそあらね、筑紫等の賤しけなるも、鄙には有りがたう、珍らしう聞ゆ。三保は姫神におはすればこそあれ、彼屋のむねよりおよび給ひけん神などのあたりならば、親のいかに心もとながらんとをかし。娘は己に三つ四つもおよすけしやうに覺えたれば、姫にやなりにけん、いかに縁などさだまりて、子などもたるか、それと迭にもなど聞えしことはなかりしも、旅寐の物寂しきにつきて、かゝる人の上さへ思ひ出でられてこそなつかしかりしか。三月朔日、江尻をいでて、興津のあひだ、かの名だたる松原見えたり。

清見がた霞のまより見わたせば浪にたゆたふ三保の松ばら

名づくとも
 屋のわねより云
 云一「賀茂大神
 をさし奉るなる
 べし、そのよし
 山城風土記に委
 しく見ゆ」と原
 本の頭註にいへ
 り
 およすげし一年
 が上なりし
 残月云々一元政
 法師身延道記
 に、此詩七言古
 詩にて起句「殘
 月送春清見關、
 面頭猶見三穂
 邊」とあり
 こゝろぶと一心
 太、とこゝてん
 奥一奥州
 折一今の時候
 今めきたる一當
 世風の
 すがそ一上をほ
 かして下の濃き
 染め方
 鹽尻といふ名の
 云々一伊勢物語
 に富士を形容し
 て「なりはしほ

深草の上人の、母をぐし奉りて身延へまうで給ひしに、「残月我をおくる清見が關」とつぐられしは、からうたなれど、えんに聞きなされて、まづ思ひ出でらる。今は波のみ關もりて、むかしのあとはなけれど、猶心はとまるなり。蒲原へかゝる山道の左のかたに、岩もる雫のしたよるを、清けにものうけて、こゝろぶと賣る者あり。此水は九郎義經の硯の水といひつたへぬ。冠者にて奥へ下り給ひし時、此水のもとにて、都への文など書い給ひきと、まのあたり見しやうにいふを、皆人いみじがりて、折はまだ寒けれど、心わかう水のむもありけり。浮嶋が原より、富士の山ちかく見ゆ。いたどきには雲のたなびきて、肩のほとりより雪いと白うかより、裾はすべてみどりに見ゆめり。今めきたるすそごの几帳など立てたらん様の、筆にも言葉にもいひつくしがたきけしきなり。鹽尻といふ名の、あてにも聞えぬを、京極中納言のにくしと思ひ給ひけんも、理なりや。ちりつもる山てふ山をかさねてや名高きふじの峯となりけむかくて千本の松原を見やりつよ、沼津の宿に屋どる。二日は關をこゆとて、夜ぶかく宿をたちて、星の光やよしらむころ、伊豆の國府につく。三嶋の神の御社の前にしばしいこふほど、女はさはりがちにてえ詣でず、心ばかりのぬさ奉るついでに、

じりの様になむ
 有りける」とい
 ふを釋して、定
 家郷伊勢物語
 物に「事凡卑也
 不可用之」と
 いへるをいふ
 さはりがち一兎
 角さはり多く
 て、此時月經な
 りし也、和名抄
 に「水俗云左
 波利」
 波利一見、三
 島
 何某の僧正一金
 葉、權僧正永緣
 「きくたびにめ
 づらしければ時
 鳥いつもはつね
 のこくちこそす
 れ」この歌によ
 りて初音僧正と
 上ばれし事袋草
 子に見ゆ
 縁の林一賊を縁
 林といふ事後漢
 書光武紀に見
 ゆ、世に知らぬ
 ものは即ち賊に
 て、凡て文のあ

行き歸りみしまの神の宮よりもふりぬるものは我身なりけり
 はこね山に入るに、初音が原といふ所をすぐ。枯れたる杉のむらだてるうちに、鶯のひ
 などもの巢だちたるが、多くなくをきくに、春ははやおくれたれど、猶めづらしき心
 地す。何某の僧正にきかせ奉らましかば、郭公ならでも覺すらんよなどいひて、すける
 人々は歌よむもあるべし。みつやなどいふあたりは、緑の林しけりたる蔭をたのみて、
 世に知らぬ者の、旅行く人をわづらはせしこと、昔は有りしにこそ。今は里人の家居も
 あまたち續きて、道ひろき御代なれば、心ゆるして、馬の上、輿の内などにある限り
 は、ねぶりてさへも行くなり。山中といふ所に糸櫻の見ゆるを、
 玉くしけ箱根の山のいとざくらあけなばいかど夜のみぞ見む
 といへば、月の夜などはこの歌もあはれならんとて笑ふ。けに旅にていひ出づることは、
 常のに今ひときは劣りて我さへ覺ゆれど、後引きなほさんものうくて、さて置きしな
 り。午の時ばかり關にいたる。山のかひにはくぎぬきしわたし、關屋には弓やなぐひな
 どきらくしう置かせたれば、ことなき身にも胸つぶれ、手足さへぞふるふ。かしこ
 き影とたのみつる笠も扇もとられたれば、つくろはぬおもてに、ふくだみたる髪のこほ

や也
 くぎぬき一柵の
 類
 かしこき蔭一枕
 草子の文に取
 る、力と頼みた
 る意
 ふくだみたる一
 ぶくくになり
 たる
 あえてけり一び
 つしよりになり
 たり
 あそびくゞつ一
 遊女、傀儡師、本
 文の筆者武女は
 遊女の流也
 節はさつき一枕
 草子一せらは五
 月にしくはなし
 とある文による
 空さへ酔へる！
 菅家文章卷五、
 花時天似酔序
 に「春之暮月
 之三朝、天酔于
 花桃李盛也」
 巳の日のほらへ
 一上巳の節
 鹽木一鹽を焼く

れかよりて、いかに見ぐるしからむと、汗あえてけり。さはいへあそびくゞつの類は、
 人のほかなる定ありとて、いさよかのさはりもなく通し給ひつ。嬉しとやいはまし、悲
 とやいはまし。今日は坂あまたこゆるに、山駕籠も不要なりとて、歩み苦しき石の上を、
 徒歩にてたどりけるまよ、いといたう勞れ困じぬ。畑、湯本、風祭、小田原、節はさ
 つきとかや。されど彌生の三日こそ心もはなやぎて、桃のにはひに空さへ酔へるけしき
 は、あやめの長き根も、かけて及ぶまじうおほえたれ。早川の瀬わたるほど、巳の日の
 はらへおもひいでて、
 早川にくだす鹽木をあまの子の身のかたしろと人や見るらん
 川をわたれば、酒匂といへる里なり。こゆるぎの磯ちかき苦屋の内にも、ひよなあそび
 するをとめどもは、桃、山吹の花などこちたきまで瓶にさし、けふの日のくるまををしと
 思へる様なり。野に出でてはよこなどつむもあるは、今日のもちひの爲なるべし。七年
 のむかし此所を過ぎけるは、九月九日にて、別れ來し親はらからのことなど思ひ出でて、
 悲しかりしに、今日は一二日のうちに逢ひ見ん事をおもへば、うれしきあまり、心さへ
 ときめきして、それとなくうち笑みがちなるを、かたへなる人らは、ものぐるほしきに

料の新
かたしる形
代、身の形を作
り罪咎を被ひ負
ふせて流しやる
もの
はこ一ひきよ
れぎ
ときめきして一
どきくして
ものぐるほしき
一氣がふれたる

ねびまさりて一
立派に成人して
うちいでん云々
一言葉を掛けん
も恥しくてや

あさましきまで
一餘りなるまで
つら顔
はなせまりて一
悲しさのこみ上
げたるをいふ

やなども思ふらんよ。明日は府にまゐれば、公私の用意ありとて、男のかぎり、皆戸塚の宿にといそぐまゝに、一人のどかにも行きがたくて、同じ様にやどりにつきぬ。三日の夜より雨ふり出でて、つとめても猶やまず。金川、河崎、品川などいふ驛々もたゞ過ぎにすぎ来て、芝にまゐる。こゝより大路のさま、たかき賤しき袖をつらね、馬車たてぬきに行きかひ、はえくしく賑へるけしき、七年のねぶり一とときにさめし心地して、うれしさいはん方なし。その夜は御館にありて、三月五日といふに、ふるき家居にはかへりぬ。いふかひなけれど、親族のかぎり、近はをばいとこなど待ち集りて、とりどりに何事をいふもまづおほえず。幼き妹の一人ありしも、いつかねびまさりて、髪などあけたれば、我方には見わすれたるを、かれよりうちいでんもつとましくやありけん、をばの後にかくれて、なま恨しとおもへる氣色に見おこせたるまゝ、猶心得ずして、そこにもし給ふはいづれよりの客にかおはず、ゆとしけなることには侍れど、過行きはべりし母のおもかけに、あさましきまで似通ひ給ふめるはと問へば、かれはうつぶしになりて、つらもまたけず、をばもはなせまりてものいひやらす、皆はと笑ふにぞ、はじめて心づきぬ。かくて盃あぐるほど、老たる父のさゝ目にいます、やがてまゐ

り給へり、と妹のいふ。

庚子道の記 終

いでやむかしよりあそびくどつやうのもの、言の葉の道にその名きこえ傳れる、世々に
数少なからずなむありける。そがなかにも、おふけなく勅撰をけがせるたぐひをいはど、
古今の白女、後撰の檜垣、後拾遺に宮木、詞花に靡、續詞花に阿古麻呂、千載は戸々、新
古今は妙、玉葉は初若など、又さらぬ後の冊子どもにも、撰集抄に江口の尼がくちすさび
を載せしより、盛衰記の侍従、湯谷、平家物語の祇王、承久記の龜菊、曾我物語の虎がと
もがら、皆人にもしられ、時にもゆるされしなるべし。しかはあれど、たど一つ二つよみ
出でたるが、人の耳にとまり、鳥のあとに残りつたはれるのみにして、はかしくしくし
しおける物らも見きよおよばず。さるはおのづからみやびたる世のならばしにひかれて、
をりにふれしすさびわざなるべければこそあれ、たれかは歌の林を分け、詞の泉をぐみて、
深くしも心に思ひいれたるならむや。かの檜垣のおうながやうに、家集さへ今に残せるは、
まれらなる事になむ。こちよりて二三百年がほど、みやび事のやうく、おとろへ來にしよ
り、宮のうち、殿のおまへなどに、めしまつはせる女房だちすらも、物がたりぶみめける

ものつくりいでたるなむをさく聞えぬ。いとちかきころ、なにがしのおもとが松陰日記
とかいふなるふみかきつどれるを、今の世のめつらしき事には常々いふめれど、あまりく
だくだしきに過ぎて、ひとわたり見るだに目のいとまたへがたくおほゆるを、それはた此
頃の女房、たれひとりまねびも得つべきあらむ。こゝに此一卷かき日記せし武女といへる
は、享保のころほひ、いとさかえ花やぎたまへるその殿の、うつくしみ時めかさせたま
ひし白拍子にてありしとぞ。それがはじめをはりさだかにも聞きつたへねばしらす。今こ
の筆すさびを見るに、たゞに言葉うるはしく書きあやなせるのみにあらず、その心高くお
もひあがりて、されたる口つき、かの紫の物語、清原のさうしなどを、よく腹にあぢはへずし
て、いかでかはかくまでうまくしもいひおほすべきや。よりて思ふに、いにしへのあそび
くどつどもにもおとらじ、今の世のなま歌人たちにもまさるべくなんおもひめでられぬる。
かくあまりにをかしくもめづらしくもおほゆるからに、いとまのひまく、引歌や何やと、
赤き青き墨して、かたにかしらの筆そへおけるを、さらに清くかきあらためて、板にさへる

りてむと思ひなりしより、今年文化といふ年の四とせ、ながつきとをかまりみかの夜、清水の濱臣、しのばすの池のみぎはなる、さよなみの屋のおばしまにより居て、月影にたどたどしき筆をとりて、そのよしいさよか書きつくるになん有りける。

りてむと思ひなりしより、今年文化といふ年の四とせ、ながつきとをかまりみかの夜、清水の濱臣、しのばすの池のみぎはなる、さよなみの屋のおばしまにより居て、月影にたどたどしき筆をとりて、そのよしいさよか書きつくるになん有りける。

伊香保の道行きぶり

倭文子

けはひ一気色、
 様子
 霞むものから
 霞めどもなほ
 振りはへつゝ
 古今集「春日野
 の若菜摘みにや
 白妙の袖ふりは
 へて人のゆくら
 む」
 菅の根の長き
 の枕詞
 物おだしう心
 がおつとりとし
 て
 あやなのあや
 なきつまらぬ
 出湯一温泉

うらくと明る朝よりしもよ、物のけはひ改りて、大路も遙かに霞むものから、清う
 見渡さるよに、振りはへつゝ行き交ふめる袂どもの、とりくになまめかしう覺えて、
 先こそ野邊の遊はゆかしけれ。やうく咲くと見し間にうつろひもて行くを眺めつよ、
 散る花の心のいそぎを知るくも、菅の根の長き日影にならひて、物おだしう、萬の事
 も忘るゝ様にて、徒にのみ過いなんは、あやなの業なめりと思ひとれど、遠き野山を分
 けむことは、知らぬ霞の心もおほつかなくてあるに、猶思ひたつ事の侍るめるついでに、
 かみつけ野の伊香保なる出湯あみてんとて、母刀自のそよのかし伴ひ給ふれば、彌生の
 十日まり一日になん出で立つ。又親とか云ふべくおほゆるわたりより、送り聞えて、伊
 香保風引き給ふなよ、猶雪も消えぬあたりと云ふをなどありて、

伊香保の道行きぶり

母子の草—原野
に自生する草、
ひきよもぎとも
いひて三月三日
の餅の中に交へ
搗くもの—母と
子との旅寐に掛
けたる事いふま
でなし
みかのもちひ—
三月三日の草餅
立ちの急ぎに—
旅立ちの仕度に
取紛れて、むら
鳥のは立ちに掛
る枕詞
いと上る—古
今集—糸による
物ならなくに別
路の心細くもあ
るほゆるかな—
あそそけ—あそ
そか—粗末
一夜寐ぬべし—
萬葉—春の野に
董橋みよと來し
我ぞ野をなつか
しき—夜ねにけ
る—
公より云々—驛
鈴をいふ

野邊はまだ夜はの春風さむからし母子の草の枕からすな
と侍り。實にみかのもちひも時過ぎつれば、今は假寐の枕にやと思ふもをかし。人々心
ばへあるも多かりけれど、むら鳥の立ちの急ぎに、はかなき跡をも留めずなりぬるはわ
ろかりき。父のみのさりけなうもてなし給ふがさらなれば、いとよる物ならなくに、
そがひに心ひかれつよ、かへり見すれば、梢ほのかになりたるを、たゞことに、
父にわかれ母にしそへる心をばゆくとやいはん歸るとかせん
と云ふ程に、何時しかも田舎だつ家居の、おろそけなる竹垣もめづらしう、武藏野は董
の色濃きところなりけり。見はやしつよ行くに、おのがじし一夜寐ぬべしなどはいへど、
茲は過ぎて、大井てふ驛に宿りぬ。朝の駒の鈴の音して行くは、我も勇む心地せり。
昔公より賜ひたるをならしつらんがうつりて、さらぬ馬どもの頭に、小くてかくるに
やと、知らぬ事を云ひ定むるもをかし。空少し明りたるほど、春の野の朝露に、淺緑な
る梢どものほのくくと霞み渡れるは、たとふべきものなんなき。人めなけなる垣ほの櫻
の、わび顔にうつろふがをかしうて、守りるたるを、主と覺しくて、手なふれそといふ
べき氣色してあめるを、をこになりて、

をこになりて—
はか—しくな
りて
雲のまよひ—雲
の立つに途を迷
ひて、新古今—
聲は思ひぞあへ
ぬ郭公たそがれ
時の雲のまよひ
に—
むすび—柳の上
げ
遠近人—遠くの
人近くの人、誰
彼—
そこはかとなく
—どこといふ事
なく
人來—鶯の鳴き
聲、古今集—諸
歌—梅の花見に
こを來つれ鶯の
ひとく—
とひしも居る—
よしなしごとは
すれど—つまら
ぬ口はたぐけど
—
たづきも知らぬ
—をちこちの

惜むともたよん嵐は如何にせん散る花ごとに手をやさへまし
と覺ゆるも、何時の程にか路行き人の心にはなりにけん。入間の川を渡り行くに、山寺
の鐘の音聞えて、哀なる雲のまよひに、いかで遅れけん、ほのかに聞ゆる鴈がねを、人
人あはれがる。
わかれには田のもの鴈もわびぬめり心よりにし三吉野のさと
となん云ひて、さかもとてふ所の山の尾上に、山吹のいみじう咲渡りて、岩間行く水の
音なひも、こよなう心行くけしきしたれば、人々よりてむすびなです。猶かくてやはと
て行くに、元より道知れる人しもなくて惑ひたりけり。遠近人の行交もあらず、山人の
つま木のみこと彼處にこりすてたるが、すどろに覺束なく心細し。たゞ鶯のそこはかと
なく木の深き方に鳴くを、かよるをりは呼子鳥こそたより有る心地せめと人の云ふに、
實に人來と厭ふはことの外の心にも有るかななど、よしなしごとはすれど、たづきも知
らぬとのみ唱へられつよ、それが中に、年有が
こしかたもこの行末のおく山の奥にも春のうぐひすぞ鳴く
いたくなわびそなど云ひつよ、男どちは事ともせず、辿り惑ひて里に出づ。今宵はしま

伊香保の道行きぶり

たづきも知らぬ
山中におぼつか
なくも呼子鳥か
な
日敷ととも
日敷が重なる
共
ほどくしき
へこたれてしま
ひさうになる
あらはに拜まれ
開帳なるべし
たのもし人にて
力にして
かげもり影
森、大宮の西南
一里、武甲山の
下
望の夜十五夜

ぶの寺に籠りぬ。日敷とともに尊き御寺どもを歩きめぐるが、峯高く谷深ければ、心が
まへすれど、路の狭き程は、あまたよびほどくしきにも、經の聲々山彦も答へあひて、
いとこそ物の悲しう覺ゆる折なれ。此度は此寺々の御佛のあらはに拜まれ給ふとて、あ
るとある人、老たるも若きも、杖をたのもし人にて縋りたる、よそめもいと苦しきや。
暮れゆく程、しものかけもりに宿りなんとす。妙見山と云ふ峯より、望の夜の月のさし
登りたるは、此世の物とも覺えず、母刀自、
春の夜の花にほへる月影の妙なる光いまこそは見れ
年有、

嶺高き霞のひまに影もりの里の名しるき春の夜の月
行きくつてさよのと云ふ寺にもなりぬ。此御佛は、つかうまつりつる殿にむかへいれ奉
れ給ひてしよなど、覺えつるまよにさよやきたるを、そこなる法師のとく聞きて、さら
ばとて彼の姫君の御ために奉れたまひし、御はたや何やと取う出でけるは、いみじう
哀れにて、有りつる御さま、つぶくと思ひ出づるも胸ふたがりぬ。
露深き笹野の奥に分入りて今日はた袖をぬらしつるかな

ことにも出でず
いはず出しては
千鳥の云々上
あめく
巡禮者などの背
に著る一種の薄
布のそでなれ
むづかしければ
うるさくあれ
わたる瀬川一渡
瀬川、今はわた
ちせと讀めり
きねー女みこ
雨づつみ雨を
避けて家に籠り
居ること
足曳の山の枕
詞、直ちに山を
指していへり
空に知られぬ
新古今集「櫻散
る木の下風はさ
むからで空に知
られぬ雪ぞ降り

と覺ゆれど、かの耳ときがうるさくて、ことにも出でず、おほかたに物して立ちぬ。き
く水寺と云ふらむあたり、平かなるにも、皆人なやましうて、足は山邊なれど千鳥のあ
とむらん様にてぞ行く。水泳てふ寺に、おひすりてふもの納むるとて、よに田舎めい
たる女の、ひとつ所に寄り居てさへづるが、かしがましうむづかしければ、此處もさる
べき程にていでつ。わたる瀬川てふ川は、武藏と上つけ野のあはひにぞあなる。をちか
たの雲にまがひて見ゆるは、信濃なる淺間の嶽と、この心ざすなる伊香保嶺なりとなん
いふ。いづこともなく遠きさかひの名所とのみ聞きつるを、かく見やるぞあはれなる。
來と來て妙義の御山に參る。きねが鼓音あやしう、少女子が打ふる袖もゆるよし有りけ
には見えねど、さすがにをかし。立出でなんとするに、今も降りぬべき雲のけはひすれ
ば、雨づつみしなど人々のよしり聞えて行くに、いづこともなく風のさそへるは、如何
にやなど云ひて、ふと見やるに、足曳の遠き近き、雪と覺しきまでの櫻なりけり。里吹
く風に亂るよは、空に知られぬなど云はれて、過ぎもやられぬを、人は暮れぬめりと云
ふ。さかし葛城の雲かは、いかでなど云ひしらふ。
散る花を衣手ごとにつよみもてかゝる山路の思ひ出にせん

人九「富士のねに降りつむ雪はみなづきのもちに消えては其夜降りつゝ」の歌による

ゆるりなく一思ひ掛けず
衣更ふべき時一
四月一日の衣更へ

しるし一記念

ひしくと一落雷のはげしき音を形容したる也
すいがい一透垣
夜はすがらに一
夜通し

た降らんには甲斐無らましやなど、いひしろひつよぞ行く。此かたへにある寺は、ゆあみする人を守ります御佛のおはすと云へば、参りたり。御前に短冊に書きたるものはとて、取りて見れば、

秋ふかき山の紅葉を手折つゝ手向けんとすれば幣とこそ散れとなんある。おもほえず珍らしければ書きつ。ゆくりなく雨の降り出でつるに、あわただしくて立歸へる程止みたり。今は衣更ふべき時にもなりぬれど、猶ありしまよなり。

今日ぞとて更へなばさすがつらからん花の香しめし旅の衣を

しるしになど覺ゆるも、さすがに旅のなさけなりけり。或夜さり雨風烈しう物騒しき心地するに、神さへおどろくしうなり出でたるぞ、思ひ掛けねば打驚きて、堪へねばふとうつ伏したる儘に、頭の上とも何とも思ひ敢へず、ひしくとしつるは、魂今ぞ失せぬると思へり。借暫く暇有るにきけば、只此すいがいのあなたに落ちたりけりと云ふに、おそろしなどは云ふも更なり。世の常にだにもあらず、かうしも人少なかれば、夜はすがらに、心ぎもの消えうする事数多度なり。朝けに、氣色やみたり、見よと云へば、はしに出て見るに、かなたの嶺は墨を磨りかけたる様にて、雲のまよふこそ物おそろしけれ。

ごはく一雷の音の形容

今しも一今頃の時は強辭

まさぐり物にして一手でもちやにしながらむべ語りするは云々一尤もらしく話をするはいやなものなれど

あらぬ響一とんでもなき響一雷鳴をいふ一屈し、氣がめいりつま一端

さればよ晝つかたまたごほくとなり出づ。かくてはとて、家長の住む所へ皆うつろふめるにも、すべて生きてきたる心地やはする。申の時過ぐる程には止みつれど、名残なほけ畏しうて、起居ん心地もせずなん。今しも寒き所なれば、大きな平るろりに、櫓とて枯れたる木の太らかなるが、長さ三尺ばかりあるを三つ四つ打ちくべたるが、暖に火のおこりて、烟も無ければ、人々そこに圓座してあめり。主の翁髭をまさぐり物にして、むべ語りするはうたてあれど、かよる時には頼もしき心地もせられて聞きをるに、此湯の水は、此處より見ゆる高嶺より落つる水の、火石と云ひて岩二つあるに觸れて、かく湯となるぞ、いと怪しくなどいふのみぞ耳留られたる。夕つかた空も晴たれば、もとの所へ歸るに、かの櫻はいと哀れに亂れたり。

伊香保風吹く日吹かぬ日しのぎ來てあらぬ響に散れる櫻か

とぞ獨りごたるよ。今はくし果てわびしかれば、湯あむわざさへ物うくて、されたるおばしまのつまのいはの上におりて、つくぐと眺め居たるに、楓の木の若葉色深くて立てるは、

なつ衣かへて程なき旅ながら憂きめに秋の花をこそ見れ

やうかへて一趣
異なりて

ぬばたまの黒
の枕詞、鳥は黒
きより其枕詞と
して用ひたる也

ほどくしう
はかしくしかり
ずしてじれつた

わはさからじ
我はかけ離れじ

くぐだち一莖
立、大根の蔓な
どの稱、菜をい
ふなるべし
今一つの物

とのみぞ覺ゆる。辛じて八日に立出づ。そこらの家どもの軒に、みな藤の花を挿したり。此里にはいつも斯く習はしたりと云ふ。實にやうかへて、郭公も聲洩しぬべきものなりけり。今朝の空氣色よからず。

浮雲のかなたこなたに立ち迷ひおほつかなくも何地行くらん

と云はれたるを、誰もさ思ひわぶる程にて人々哀れがりけり。斯て行くに、ぬば玉のからす川を渡る。よに早き水に逆ひてのほる舟どもは、棹もさしあへぬにや、下り立ちて引くなる綱手のくるしけなり。野田のわたりも水の速きに、舟の得耐へず下るめれば、引渡したる綱を手操にくりつと渡すを見るは、ほどくしうなんある。しもつけ野の佐野の舟橋は名のみ残りて、其川だに何れならんといふ。

たが中の佐野の舟橋さのみなどかけ絶ゆるまで取り放しけん

わはさからじと云ひつるこそおふけなきなめれかし。佐野の何がしが家居とや、繁き木の間に深う見ゆ。岩舟出づるなど云ふ尊き寺を拜み廻りて、夕つかたに宿とりぬ。實によきくよだちなど調じたるを、なはあれど今一つの物のありけにもあらざりぬなど云ひて、男どちは笑ふを、あなかま、みよなし山かはなど云ふ人もあり。此家の刀自は此頃旅

酒、さかなどい
ふ「な」はあれど
今一つの物はな
からんとなり
あなかま一あ
かしまし、しい
ツと云ふに同じ
く他の言を制す
る言葉
みよなし山かは
一先きの人はつ
んぼならんや、
開えぬべきを
の洒落
酒をほしがた
る今一つの物
といひたる
だに「下」に「示
させ給へ」など
補ふべし

立ちて、娘なるぞさかし人なりける。傍に古びたる草紙引き散らしてあるを、徒然なるまゝに取りて見るたるに、如何にをかしき御心ばへもあらんと思ふたまへらるゝを、かきやり給ふらん御手ならひを見聞えばやなど、小き男の童して云ひ出せるを聞くに、彼酒ほしむたる男にはかに口閉ぎなどするもをかしかりき。さるは誰が云ふならんと覺束なくて、鄙の長路の竄に、さるべき心ばへどもも、袂の下りとともに迷ひ果ててなん侍る、御もとにこそおはさめ、旅の心も慰めん、こよなかるべし、かたはしをだになど答へやりつれば、暫く有りて同じ童、小き紙に書きたるをもたり。見れば雨のうち

五月雨は事とふ人もあらざるにつれなく過ぐる山郭公

又戀とて、

思ひきや霜夜のところに松蟲の音をのみ鳴きて歸るべしとは
となん。此松蟲は蟋蟀をふと書き損へるにもやなどいふ人もあり。とまれかく情ありけなる人ありけりと、怪しうて問へば、此童のばらからなりけり。思ひかけず、人のかしう覺えて見やりたるに、いたくきたなけなるものを著て、何にかあらん彼姊と嗔いてい

せな一夫
ゆくりなき一突
然こゝに來りた
るにて別の縁も
ゆかりもなき
道のつらに云々
一つらは面、道
中の疲れにて心
屈したればその
勇氣も出でずし
つとめて一翌朝
さればよ一それ
御覽遊ばせ、蛙
の鳴くは雨を呼
ぶなりといふ我
言の的中をはこ
る也
たけきわさかは
一えらい事なら
んや
ふたら一二荒、
日光山をいふ
のたふびし一宣
ひし
まねびやらん一
形容すべし
さうぞく一註東
ゆゑしき

にたるは、せななりといふに、見驚くばかり似けなくぞ侍るは、いかなりける事にか。さるべき人の時失へるならんと思ふに、悲しうさへ覺えられて、ゆくりなき道行き人といへど、一夜の宿もさるべきにこそと思へば、問ひ慰めばやなど思ふ物から、道のつらに心くしにたれば、甲斐なくて静りぬ。つとめて急ぎ立つにも、よに名残多くて、又こそ尋ねきこえなん世もあらめ、彼所へも立出で給へかし、何てふ所尋ねて、必ず宿り給へよなど云ひて分れつるが、人していはせつ。

この宿に心はとめつ郭公つれなくすぐと思はざらん
とて行くく猶如何なるにか斯く迄は思ふらんとあやし。道のつらの小田どもに、蛙の
聲々なくも、何となく哀に聞きなざるよを、こは雨を呼ぶなりなど、供なる人のいふを聞
くには憎くなりぬ。頓て降り來れば、さればよといふ。何のたけきわさかは、よきさが
言合せたらんをりは、如何ばかりほこりかならましました、人々苦しき物から笑ふ。かく
しつと過ぐる中にも、ふたらのお山こそあれ、今は二荒てふ字のこゑをもて、日光の宮
とまうすとかや、古事しれる人ののたふびしなり。此お前はまねびやらん言葉もなし。
年毎のおほん祭のさうぞくとて、事々しきさまにしもあらず、ゆるくしき淨衣姿何と

電々しく由緒あ
りげなる
すめらぎのおほ
ん使一勅使
武藏の大城云々
一將軍家よりの
上使
みあらかし御社
かどやかし一氣
まり思し

なく床しけにて、はたすめらぎのおほん使の、又武藏の大城よりとておはせしなど、さ
るあら山中に、紫も赤も緑も、みあらかの玉に黄金にきらめきあひたる、いと尊くか
たじけなし。近きわたりの人々物見んとて、かぎりしらす立ちわたる中に、旅の寢かど
やかしかれどいかどはせん。夕づけて清たきてふほとりを行くに、松に掛れる藤の散り
がたになりてをかしきを、をらばやとてある人の、
たれをかもまつにかよれる藤の花思はぬ風のはどあやなし

我かと行きてなど云ひ居たる程、五月待つ間の聲ほのかなりつるは、僻耳にやと、其處
なる人に問へど、さなりと云ふも、又いさやなど答ふるも侍るめれば、如何ならんと迎
られて、
やよやまで深山出づなる郭公この初音しもをぐらかすべき

と詫びぬれど甲斐なし。今はとて立歸る山の木ぐれの夕ばえに、神とどろとなり出でて、
すどろに心細う覺ゆるを、葉隠に二聲なんふりでたるは、いとむくつけきもの紛しの
忍び音よとは思ふ物から、さすがに聞得にけるに、先の覺束なきをさへはるけぬる心地
すめり。此處は黒髪山とも云ふと人の語りければ、

我かと行きて一
古今集「秋の野
に人まつ蟲の聲
すなり或かと行
きていざとぶら
はむ」
聲一郭公の鳴く
いさや一否然ら
ず
をぐらかす一心
をかきくらさし
木ぐれ一木の下
神一雷鳴
むくつけき一き
びの思き

ねのそがひに見ゆるあしほ山あしかるともがさね見えなくに「あげまき！角髪の子供」昔の言の葉一慈鑑和尚四季の今様は、「花橘もにほふなり、軒のあやめもかをるなり、夕ぐれさまの五月雨に、山郭公なのりして」

ちひさきは「我に幸を授け、たぐまひ一様子」筑波根云々「筑波根のこのも彼のもの影はあれど君がみ影にまぶ影はなし」筑波山は山しげ山茂けれど思ひ入るにはさはらざりけり

いつ聞きしよりも哀と覺ゆるを、歌よむべき心地もせず。かく更けたる夜に、しらぬさかひなるをと思ふも、心細さやるかたなくて入りぬ。此峯には、女神男神なんおはしける。神もちはひ給ふにや、今日はいと晴れて侍れど、岩のたすまひなど怖しけに見ゆれば、峯までは登らずなりぬ。母刀自、餘所にのみ見てや過ぎなん筑波根の神のみ前にたてる白雲とぞある。我も伏し拜みて、

筑波山やまの雫に立ち濡れてあふぐに高き峯の姫神
おとに聞えしみな川の尾上より落るを、年有、

みな川の川岩に砕くる白波は峯より落つる花かとぞみる
とて、男は高根も何も立越えて、ほごりかにて歸りぬ。さて幾日かも此峯を見つゝ來に

けんとして、同じ人、
筑波根をこのも彼面に見つゝ來ては山しげ山今日ぞ分けぬる

となん。其夜も此近き里に宿りて、ほのくくと明くる頃出でて、かへりみすれば、峯は白雲とこころくゝにゐて、朝日にほへるけはひ、似なうきよらなり。ふと或人故郷出でて今日

とははた二十日、二十日をよび一指歸らまく歸らまはしく、歸りたく
あだしくて一氣も落ちつきて復や來ん一また來られやうもなければ、序にゆつくり見物せんしをくにて一びつしよりと濡れて

枕がみなれば一枕もとに打ちひびくなれば

は幾日ぞと云ふに、早うとをはたと云ふも餘れるに、今更に驚かれて、すどろなる事にちも有るか、人は如何にをよびを折りて待ち給ふらんものと思へば、俄に立歸らまくなりぬれど、母のぐし給ふには、よろづおだしくて、猶復や來んなどぞ思ふ。あはの大神の社と云ふ有るわたりより舟に乗りて、鹿島へとて行く。風立ちて波かしこう打寄せたるに、浮島とか云ふ岸に著きたり。雨さへそよけば、苦の雫に袖もしをよにて、如何にせんいかにせんとのみ云ひあへり。

世の中はかしこき波を過ぎ來ても身の浮島に猶ぞよりける
とぞ云ると。やうくそらの氣色やみつれば、舵取喘ぎつと漕ぐに、申の時過ぐる程に鹿島に著く。世に云ふめる要石、高天原のまなし川など教ふる物から、さる事は目も留らぬが、たど大かたの様ぞ、實にふりにたるあたりとおほしくて、見どころ多かれど、彼波風に魂失ぬるけにや、しるさんも物うくて、たど、

鹿島なる浦の荒磯神さびて波の白木綿かけぬまぞなき
とぞ云ひたる。此處は入海にて、長閑なるべう覺しきに、終夜波はたど枕がみなれば、目もあはずべきよしなし。耳馴れぬ音のかしがましきには、寐ぬ物から思ひやる事も

足がり小舟一足
輕(アシガラ)小
舟なるべし、輕
くして疾き小舟
の稱といふ

程に一程に早
く取らん、をは
強勢の助辭

うきめ一盃目に
海布を掛けて刈
ると纏けたり
松一たい松

みるめならで
あまの縁にてい
へる洒落
居なみ一居並び

なし。明けぬればやがて舟立して、向ひなるいきすの浦は、海士の子供の磯傳ふも近く見ゆれど、足がり小舟ならねばや、巳の時ばかりに寄せたり。海士の住む宿もけしきばかり見えて、青海原は遙に秋の木の葉を浮べらんやうに、百舟漕渡りつゝ、心ゆくあたりなり。宮居もいと神さびて、昔べの故ある事とかや聞きつれば、くはしう問ひも見もせばやと思ふを、風たよぬ程にをなど急ぐには、所をしも見置かば、後にもこそとてなん。又香取へ行くほどの舟にて見れば、ほのかなる沖の小島に、白き鳥どもの立ちあはるは、波かあらぬとぞあやまたる。この舟寄する程に、波いと高う立ちて、舟こそりて濡れつ。宮居拜みて、又漕ぎづるは怖しかれど如何はせん。

夏ごろも香取の浦のおきつ波かよるうきめもかるやあま

とぞいはる、宿るべき處まではえゆかた、松ともすべう聞くなりゆくはずもなし。かぢ枕して明さんも、立ちこん波の心うしろめたしとて、あやしうすよけにたるあまが屋に、みるめならで宿を借る。哀にわびしき事かぎりなし。程なき處なれば、皆居なみつゝ、袂のしほれなどあし火して乾すも、いとやつれゆきて、ともに海士人の姿に異らぬにやと思へば、

鳴く一聲に古
今「夏の夜の臥
すかとすれば時
鳥鳴く一聲に明
くするのくめ」
さまことに一様
子變りて
さるかたにさう
ぞき一田植は田
植だけに其向に
それよ洒落こ
みて
鳥いよ一白し
一杜浦「江碧鳥
遙白、山青花欲
然、今春看又過
何年是歸年」
よご一草の名に
夜子の意を掛く
るが千陰の説
に「東國にては
こといひ土佐人
はるぐといへ
り、葉は蘭に似
て小さく、根は
白く小さくあり
て味少しるぐ
し」
かみづふさ一上
総

浦波に濡れにをぬれし袖よりもあまがほしけん衣からばや、とぞおもほゆ。鳴く一聲に明行くも、なか／＼様かはれるところのあさけをかこう見ゆ。やがて追風よしとて漕出づ。沖行く船どもの真帆を引きて、舟子どもうたひつれつゝ、いみじう心地よけなり。今は陸にしなり行けば、何時の程もなくさまことに見えて、さなへとり／＼うよるは、里もとどろに賑ひて、おのがじしさるかたにさうぞき、ならべる笠どもの白きが、青きなへの中に見ゆるも涼しきを、鳥いよ／＼白しなど、男どちはすしあへり。田歌を聞けば、

よごをひろふと晝田は植ゑすあだし男の夜田をはふ

とうたふを、皆人打はやしつゝ行く程に、萬葉にるぐとるとよみしとかやは、るぐはへの事にて、田などに多きものなり、かみづふさ人は、よごといへるぞと、賀茂のぬしの云ひたふびし事、ふと思ひあはせられて、只なるよりは興あり。又おほかた諺ふものは、五つ七つのことばして物するを、此田うたは、本を七つ七つ、するを七つ五つと云ひとちむるよ、こも一つのはうしなるべし。夕つかた一むら里のかきほに、郊の花のいと多く咲きつどきたりけるを、又も波のたち來る心地するはと云ふに、こよなの物ごりやとて、

賀茂のぬし一眞
淵
はうし一拍子
道ゆきづと一道
中のみやげ

袖のまよひ一袖
のこらび、和名
抄に「紺萬與布
繪欲一壞也」
つゝましろ一恥
しう
にほどりの一枕
詞
つめ一集め
物から一物なが
らも

人々笑ふ。今は明日ばかり歸りつきなんと云ふを聞くに、物あらたなる心地せられて、道のきづとも思ふばかりはなかるをなど思ふも、今更めきたり。紅の花多く見ゆる里あり、

紅のすゑつみはやし染むるとも袖のまよひは隠れしもせじ
とのみ覺えて、見知れる人めつとましろなりぬ。にほどりの葛飾わたりには、ゆかり有る人侍れば、今宵は其處にとて行くに、其邊なる松原の見ゆる程、いはん方なく嬉しきも、故郷に變らぬ松風のもとづれも、此處には有りぬべう思へばなり。さるははかなういひ思ひし事を、かく書きつめたるは、人笑へなる業ながら、己が物から、後見んには心慰む物とぞ聞きしゆる。

伊香保の道行きぶり終

旅のなぐさ 或は西歸といへり

賀茂 眞淵

都一京都
あからさまに一
かりそめに、つ
まかりまうして
一お暇乞ひして
道行ぶりに一旅
行の途上に
なほざり一通り
一廻
ことわり物し一
辨じ
行く手云々一旅
ならずとも考へ
得べき事なるべ
けれど
なぐさ一なぐさ
め

久しくもなりにけるかな、都の誰彼いとむつまじくなりたるにつけて、おもへども猶こひしきものは、故郷にぞあなる。いでやあからさまにゆきて來なんとて、やむごとなき御わたりく、まかりまうして、卯月の末にたちぬ。稻荷の神づかさなる、非藏人なる、其ほか一人二人、關までとて送る。此たびは道行きぶりに見えたらん所々書きつめて、やむごとなき御わたりにも奉れかし、なほざりならんは何のめづらしき事かあらん、ふるき名所などのよこなまりいふなどを、ことわり物したらんや、わろからじとあるに、けにも古きことは、行く手ならでもかうがへつべかめれど、旅のなぐさに心ゆかん時書きつけんずるは、ねぶりさますわざならんとて。

山科に御廟野といふ野あり、その所の山ぞ天智天皇のみさどきなめる。山しなの鏡の山

旅のなぐさ

額田王の御歌一
萬葉卷二「從山
科御陵退散之
額田王作歌一
首」とある長歌
やまとぶみ一日
本紀
日嗣のみこ一皇
太子
おきてく一掟て
て、命じ定めて
かざり云々一墓
側に奉仕すべき
期間も経過して
各自分散する時

ひがこと一倅
事、問違
あらぬこと一飛
んでもない問違

に此みさどきあるよしは、額田王の御歌にぞあなる。うべも圓なる山のかたちなれば、さは名づけたるにや。さて此すべらきは、御馬にのりていでましよに、行きませる所をしらず、沓の落ちたる處を御さどきとせりなど、紹運録といふものに書けり。すべて此ふみはあとなしごとのみ多きぞかし。やまとぶみに此みやまひあつしくませる時、おほとののうち日嗣のみこをめして、後の御事をのたまひおきてよ、かみあがり給へること見え、萬葉集に、御やまひしたまへる時の太后のみやの御歌も、かみあがり給ひて後のもあり。かのみさどきに御墓仕せるつかさぐの人、そのかぎりはてよあがるよ時の、ぬかだの王の御歌もあれば、近江大津の宮にかみあがりまして、此山にをさめ奉り給ひしこと疑なし。又さうよろくには、田原の天皇とも申し奉るとあるよ、それは此すべらきの七柱にあたるみこを、志貴のみこと申せしが、光仁天皇の御父にましましよかば、追崇みて春日の宮の天皇と御謚奉り給ひ、田原といふ所に御陵のあれば、田原のすべらぎとも申し奉りしを、正しき史をもうかどはで、ひがことしけるなり。さて天智天皇は後の御世の法をさだめさせ給ひなどして、あるが中に尊ければ、七陵のうちにて、たえず御つかひの立ちぬべきことなど、物にもみゆるを、世くだりぬれば、さるあ

つた事
浪風しく浪風
しきりに起る
世の亂るをい
ふ
さること一如何
にも然あるべき
事

體一體言

連聲一音便

らぬことをも申すにや。つかさ位のひくきいにしへの歌よみ人の、たどしきふみにも見えぬなどを、さまざまにいひさわぐなるも、けにうべなりけり。やよもすれば世の浪風しくめるが、治りて後いでたる人のさかしらするぞかし。
相坂山に手向することは、さることにて、こよをすなはち手向山ともいひけん、萬葉に見近江海晩頭還來作歌

ゆふだたみ手向の山をけふ越えていづれの野べに庵せむ手等

とあり。是は昔ならの都より近江にかよふには、宇治川を渡りてあごねの原といふ原より、山科のいはたのもりなど過ぎて、相坂を越ゆるよし、萬葉の長歌に見えたり。また萬葉に「齋禮」とも「祈」とも書きて「たむけ」とよめるは、今手向することなるを、すなはち體にいひなして、其神ともするが故に、貫之のぬしは、手向をいのりともかよれしなるべし。又或人は、俗に山のたうけといふは、國のさかひのみね、あるはあら山のいたどきなど通る人の、そこにならず手向する事なれば、そこをやがてたむけといふを、連聲にてたうけといふなるべしといへり。さもあるべし。又貫之家集に、あひしりたる人の物へ行くにぬさやるとて、

旅のなぐさ

玉銚の枕詞

ひきもの神下
文の説の如くひ
きもは禪(引裳
か)にて、禪を
投げ捨て給へる
時に成れる神の
意なるべし
あはきが原一櫃
原

かの人の歌一次に引せる「これやこの」の歌
上にあやしげなる一非常に見すばらしき

長明一鴨長明

行くけふも歸らん時も玉銚のひきもの神をいのれとぞおもふ
といふ歌あり。此ひきもの神も道の神とおもはるれど、後には聞えぬ御名なり。古今集に、下の帯の道はかたぐ別るともと有るを、顯昭律師の説もあしからねども、或人のいはく、いざなぎの大御神あはきが原にて御帯をなけすて給ふ時に、なれる神の御名を、道のながちはの神といふ、これぞ道のかみにて、そのものだねは御帯なるがゆゑに、下帯の道とはつゞけたるならんといへり。此ことより所あり。同じ御神御禪をなけすて給ふに、なれる神の御名をちまたの神といふ、此はかまをひきもともいふにやとおもへば、ことの次にいふになん。

こゝに蟬丸の社とてあり。めつづれたる人なりといへるはひがことなり。後撰集の人の歌に、あふさかの關に庵室作りて住みけるに、行きかふ人を見てとはし書あればなり。さて宇治物語に、博雅の三位といひける人は、木幡とかやに目つづれたる法師の、よにあやしげなるに琵琶はならひけりと有るは、別人なるべし。又良少將の和琴ならひに通はれけるよし、長明無名抄に見え、清正集に、ある所にて琴など弾きて遊ぶに、夜更けて月も入りぬ、うちの人々も入りぬる音しけるに、琴をしらべていだしたるに、

あがまへーあがめの延言

あふさかの下の句「行方知らねば俗びつとぞぬる」
えぎ一延喜

つとめて一翌朝
かなしの宮一悲し、四の宮

腰の句一第三句もてあそぶ本一類
小倉百人一首の

あふ坂の關路に年はへぬれどもけふのしみづや名をば流さん

と有るなどは、より所めきたり。又延喜第四の皇子なりといふは、いとくあらぬことなめり。皇子にましまさば、いかに出家し給ふとも、蟬丸とのみはかくべき。さらば朱雀天皇の御爲にも、村上天皇の御ためにも、御兄皇子なるを、後撰集にあがまへても書かざるをも思ふべし。歌のさまも延喜より前のものと聞ゆるをや。又或説に、古今集にある、あふさかの嵐の風はさむけれどなどいふ歌を、此作れるといふつけそへごとを誠として、えぎの御よはひのほどをおして、御子にあらずといふは、道ゆく人に問ひて境を争ふたぐひなり。又逢坂に四の宮あることは、延喜よりまへのことなるべし。小町家集に、四のみこうせ給ふつとめて風吹くに、

今朝よりはかなしの宮の秋風やまたあふ坂もあらじと思へば

是は今の四の宮川の事と聞ゆといへる説はよし。又、

これやこの行くも歸るも別れつと知るもしらぬもあふ坂の關
といふ歌を、よくとき得たる物のなきにや、此腰の句を、後撰にも素性集にも、わかれつとあるを、わらはべのもてあそぶ本どもには、わかれてはとあなり。歌よく心得ぬ

そらがき暗書

人のそらがきしてあやまれるにこそ。素性集はおほつかなき物ながら、もとより別れつ
つと有りけんより所とはなれり。相坂はまぢかく都に出入るところなれば、行きかひし
けきを、行くものも歸るものも、知るも知らぬも、別れつと逢ひつとするは、是や此あ
ふ坂の關なりといふを、關の名によせて、知るも知らぬもあふといひかけ、さてつとは
上におきて、下の逢ふといふ詞にもくばりて心得る。古の句の例にて、わかれつとあひ
つよといふてにをはなり。いとふるき歌の此たぐひをかうがへ合せて知るべきなり。又
此五文字を心得かぬる人もあるとかや。萬葉に、越勢能山時阿閉皇女御作歌、
これやこの倭にしては我こふる木路にありとふ名におふせの山

木路一紀伊路

日並皇子
尊なり

河内皇女は元明天皇にま
しまして、戀給ふ御夫は

かれもこれも云
云一契沖は諸事
に通曉せる僧な
るが會者定離の
説は初めと終と
の句意に叶はず
して採らずとの
意

これらを思ひ合すべし。また蟬まろの歌は會者定離の心なりなどいふを、契沖といふ法
師は、かれもこれもしれる法師なるが、はじめと終との句の意にたがひもとれりとて
とらずなむ。末の世にはことの心をばよくもしらで、佛の道のみ崇めるが故に、みだり
なることをのみいひよせぬるを、定家卿の書き給へる物には、歌ははかなくのみよむこ
ととぞ、やよもすればのたまひける。まことにしかなり。凡そ歌の作りざまには、たど

うちかへして一
反對にひつくり
かへして

懷風藻云々一懷
風藻は奈良朝の
漢詩集にして我
國最初の詩集也
其中なる麻田連
陽春の一首に
「近江惟帝里 神
寂庭山、山靜
俗塵寂、谷間眞
理等、於穆我先
考、獨悟關、芳終
寶殿臨、空構、梵
鐘入風傳」の句
あり

ちによみくだせるあり、句をへだてよ心をかよはせるあり、上下にわかちてことをおけ
るあり、うちかへして心得べきあり、よくそれにしたがひてとくべきなり。右の歌は、一
の句と五の句にかけ、二の句は四の句につらねてこころ得、三の句はまた五の句へかけ
て見べきなり。三十一字にて思ふ事をさまざまにいはんとすれば、いつもたどちのみに
は、句のおきがたきなめり。

比叡の山は、傳教大師のひらかれたりと人の思へども、懷風藻をみれば、いと早くよ
り寺はありけり。日えの社を日よしといふはあやまれり。ふるきふみに日枝と書きたり。
しかも古は、よしをばえしといひて、吉の字をばえとよみけるなり。古事記の歌に、
みえしぬのえしぬと有るを、後にはみよしののよしといへり。住吉をもふるきものに
はすみのえとのみ有るを、吉の字をよしとのみよみならへる人は、いとことざまにやおも
はん。ふるき物を見て知るべし。ひえの山のふもとにます御神なれば、ひえの神といは
んぞことわりなりける。

あふみのみかみ山は、和名抄に、此國の野洲郡に三上、爾保、篠原の郷などあり。延喜式に
は此神社を御神と書かれたり。和名抄に三上と有るは、ことばの同じことなれば、さも

さく波の下の句「荒れたる都見れば悲しも」

しぐれもいたくもいたくも雨の下葉のこらず色づきにけり古今集

鈴鹿山一後撰下の句「しほなれけりと人々見ららん」

書く事もありけるなり。それにつきて、萬葉に、さく波のくにつみ神のうらさびてとあるを、或物に、日吉の御神大物主にましませる故とあれどもおほつかなし。此山を御神といふは、國つ神のましませる所なれば、その郷をもみかみといひ、その浦をもさはいふべきにこそ。此海のかたへに爾保の郷あれば、其方ならでも、にほの海といふごとく、志賀の大津の方にて、ことによりてはみかみのうらといふにこそ。

もる山は、草津の驛の美濃路にかゝる所をもり山といへば、貫之のぬしの、しぐれもいたくとよみけむは、それならんと思ふに、同じぬしの集に、竹生島にまうづるに、もる山といふ所にてとて、歌のあるをおもへば、右のもり山は、京より此島にかよふ行く手にあらねば、いづこにかあらむ、猶考へていふべし。

鈴鹿山いせをのあまのすて衣といふ歌、過ぎにし比、やんごとなきわたりにて、ある家に問ひ給ふに、明らかに答ふることあらざりき。東萬呂うしに、ある人の問へりしに、きはめてしれざる事なり、しかれどもしひていはず、これは伊尹朝臣の歌にて、女のもとにきぬを脱ぎおきてとりにつかはすととはし書があれば、みづからをたとへて、やがて男の海人といふにやあらん、さても猶、すどか山とていせをのあまといはんつどけも

こころ得ず、すどか川とあらば、此川は瀬の多ければ、五十瀬といふ國の名にいひかけたるのみともいふべきをなどぞ答へたりける。今おもふに、海にもをといふ事のあるにや、なるをといふ所もあり、水脈といふ詞もあれば、猶かうがへば、より所も有りなむや。

神風の伊勢といふことは、崇神天皇の御時、天照大御神をこゝにいはいはひまつれるよりのことこのやうに、顯昭などはいひつれども、此ことばは神武天皇のおほん歌にはじめて見えれば、かの風土記に、伊勢津彦の八風を起し給ひしよりのこととあるぞ、しばらくさる事と覺ゆるに、是又神武天皇の前いくほどもなき事と見ゆれば、やがて神武天皇の冠言葉におきてよませ給はんもおほつかなし。とにかくにいとふるく神代よりのことばにて、伊勢の國にのみいふべきならねど、神武の初めていせとつどけさせ給へば、其例によりて、後々は此國にのみいふにや。いとあがりたる世のかうぶりことばは、たゞ一ことにつどけたる多し。猶いふことの多かれど、こゝには残せり。

伊勢人はひがことしけり津島よりかひ川ゆけば和泉野の原

とよみたるいづみ野はこよといへり。此國にはいかなるにかひがことといふことのあるらん。清輔朝臣の書ける物に、いせ物語のことをいふとて、ひが事を構ふる故のよしにて、いせ物語といふ、伊勢は僻といふ故なりとあり。けにも此物語のことによくなへる説なりけり。堀河院百首の池といふ題にて、藤原忠房朝臣、

いせならばひが事ぞとも思はまし大和なるてふみまさかの池

とよまれたり。此ことちかきほどの諺などならば、題詠の歌にはとり出づべくもあらねば、いとふるくよりいひ來れることなるべし。西行法師の歌にや有りけむ、

伊勢人はひが事しけりさよぐりの篠にはならで柴にこそなれ

ともよめり。今より考ふべきたよりもあらねども、しひていはど、二つの説あるべし。一つにはかの齋宮の犯され給ふことのまことにて、京わらはべのわざ歌に、それとはさまで、いせ人はひがことしけりとうたひけるが、後までも諺に傳へしにや。又伊勢や日向の物がたりとて、これらの國人の一所にねたりけるが、魂のうつかりかはりてければ、伊勢人は日向に、日向人はいせに行きたりといふ事のあれば、そのことをやひがことといふらん。此二つのうち、齋宮の御事は、物がたりにあれば、似つかはしき所もあらんか。

伊勢人は一山家集に見ゆ

齋宮の云々伊勢物語「君や來し我や行きけんおもはず夢かうつつか寐てかさめてか」の條をいふ

伊勢や日向のものかたり一諺草に「俗諺にもな

たこなたの一方ならぬ物語をいへり、神代に御目命、猿田天彦大神に問うて曰、汝何處に到りなさんや、對て曰、天神の御子は則ち當に筑紫日向の高千穂檉觸峯にいたりますべし、吾は則ち伊勢の狹長田五十鈴川上に到るべし、是より起る諺也」をこのこと一馬鹿氣たる事かくるへごとかくれたる秘密の事

似つかはしく尤もらしく心をこになし一意味を變へ

さて此物語は、伊勢の御の書きて七條後に奉れりなどいふ事のあるにや。いとくことろ得ぬことなり。二條後は七條後の御をばにましまして、七條後は延喜の七年にかくれ給ひ、二條後はおなじ十年にかくれ給ひければ、みなおなじ御時にましますを、ことに御姪の後に、そのましますほどの御をばの後のみそかごとを書きあらはして奉るをこの事やあらん。そのころ昭宣公のいきほひなどをか憚らざらむ。むかしの事をいふには、答なきに心安くて、心にまかせていひなすめり。時世のありさまをよく考へ知りてこそいふべき事なれ。又業平のみづから書けるなりなどいふも、いかにぞや。おふけなき事をも、其外にも道ならぬことをもなして、それしかりとみづからしるしおきてたれに傳へむとすらん。又心のうちのかくろへごとをば、あだし人のしるべからねばなどあるも、いかどあらん。ふみつくるもの常として、有りけんことよりも、ふかくも似つかはしくも書きなすぞかし。又物がたりのやうをよく見しらぬ時世には、古今集より先なる物と思へる誤さへあるなり。此つくりざまは、あらぬ歌をもて贈答ともし、或は一こと二ことをかへて心をこにし、時世つかさ位などもことごとくたがへて、その人にして其人のことならぬやうになせし物なり。およそ物語といふは、實録にはあら

ぬを、人の口のはにかけて興きようにそなへんとの心にて、物語とはいふめるを、實録のやうにさへおもひて、ことの證據しんこにも引きなどせるは、いとこゝろ得ぬ事なめり。この事はこゝに用なきに似たれども、何事にもあしきいひならはしのありて、ふるき事いふに、これがために明らかならぬことあれば、わらはべのためにいふなり。

あさけ川といふ川あり、是は朝明郡あさけのほりなるべし。萬葉にも、いもにこひあかの松原と、聖武天皇のよませ給へる所は、三重の郡にて、朝明あさけにちかきよし、右のおほみ歌の左にしるせり。此行幸は天平十二年十月なり。おほみ旅寐たびねの夜を、妹にこひあかすといふ心につゞけさせ給へり。むかしは吾をわれとはいはで、あれとも、あがとも、あともいひたれば、吾は明のこゝろにいひかけ給へり。いひかけの詞ことばには、すみにごりを厭いとはざる事にて、たまかづら影に見えつゝなどのたぐひなり。

物語に、伊勢尾張のあはひの海づらにたつ波を見てとあるに、同じつゞきに、信濃なるあさまのだけの歌あるを、とりふぐにあけつらへど、淺間の山の烟みのせの美濃路みのぢより見ゆべきにあらず、はた伊勢尾張の海づらを行きて、美濃路みのぢにかゝるべくもおほえず、たとひ業平なりひら此くだられしたびはおなじくとも、此尾張いせを過ぐる道行きぶりのことにてはあ

いもにこひあかの松原見渡せば潮干のかたにたづ鳴きわたる
たまかづら一萬葉一人はいさ思ひやむとも玉葛かげに見えつゝわすらえぬおも掛影との掛詞也
物語一伊勢物語
とりふぐに云々一様々に論ずれども

一つら一連、同一個所
後撰集に云々一前に物語に云々と一へると同一の歌にて「とどしく過ぎ行く方の戀しきに羨しくも歸る波かな」といふ歌也

るまじきを、さりとてあだし所によしなく出いすべからねば、こゝにならべのせたるにや。此物語には、同じほどの歌とおほしきを、こと所ところにも出し、こと時のをも一つらに書きたる様やうのこと多ければなり。後撰集に、あづまにくだるに、過ぎぬるかた戀しく思ひけるに、川のほとりを行くに、波のたちにければとあれば、此物語に、伊勢尾張のあはひの海づらと書きたるは、例の作りかへたる物なれば、さるたぐひもとりふぐ多きなめり。

催馬樂さいばらに

櫻人さくらびと、その舟ちどめ、しまつだを、十まちつくれる、見てかへりこんや、そよや、さす歸りこんや、そよや、

ことをこそ、明日あすとはいはめ、をちかたに、妻つまさるせななれば、あすもさてこじや、そよや、しやすもさてこじや、そよや、

此櫻人さくらびとをことなる説せつどもあれば、これはさくらといふ所の人をいふにて、難波人なにはびと、須磨人すまびとといふたぐひなり。萬葉集に、

櫻田さくらだへたづ鳴き渡るあゆち瀾がたしほひにけらしたづ鳴きわたる
とあり。和名抄に、尾張の愛智郡あいちのほりに厚田、作良、成海の郷などつゞきて見ゆれば、熱田あつた、

あはひ一問、境
むかへ見て一併
せ勸へて

我せこに云々一
萬葉にあり、此
下に「梅の花と
れとも見えず雪
の降れば」
あらぬ一あるま
じき、間違ひた
る

鳴海のあはひなどの海邊にて、さくら田もその田をいふべく、かれこれをむかへ見て、此國の所の名なる事を知れり。その舟ちどめとは、知と止と音のかよへば、其舟とどめなり。あゆちがたなどに、さくら人の舟こぎ行くらんを、その舟とどめよ、のりて島に千町つくりおきたる田を見てこんとなり。そよやは拍子のことばなり。さすかへり來んは、あすかへりこんなり。ことをこそ明日とはいはめとは、ことばにこそは明日とはいはめなり。ことにこそといふべきを、いにしへの詞はかゝるたぐひ有り。古事記に、ことをこそ菅とはいはめ。日本紀に、ことをこそたよみとはいはめなどあり。をちかたに妻さるせななればとは、彼方に妻しある君なればなり。さるはしあのかへり左なれば、つづめていへり。せなは人をあがめていふ、いにしへのことばなり。君をも父兄夫をもすべていふなり。後の人はいもせといふことのみをおほえて、せとは夫婦にいふとて、赤人の、我せこに見せむと思ひしといふ歌をも、あらぬことに引くめり。萬葉に、家持と池主とかたみにわがせことよみかはしたる歌などを見て、あがめていふ事なるを知るべし。ことにせなといふなは、そへたる詞なり。ふるくは兄をなせ、姉をなね、妹をなにもと、なの語を上にもそへたり。さねこじは實不來なり。しやすもは、志也のかへりは左なり、

はうしー拍子

眞名に云々一眞
字伊勢物語二
卷、此書の眞名、
作者の如何につ
きて古來諸説あ
り、宣長は後世
の眞書と斷ぜ
り、寛永二十年
刊行す

たか／＼一方
ちあちちこち

さすもにて上のごとし。はうしありて謠ふ物は、すべて音便にてさる事の多きなり。物語に八橋のことをいふに、水ゆく川のくもでなれば、橋を八わたせりとあるをも、いかに心得てかいぶかしとする人もなし。眞名にかける此物語を見れば、水堰川の蜘蛛なればとあるを、水ゆく川とはよみがたければ、水で川とよめる人もあり。堰をるでとよむはさる事ながら、かくつづけて水で川といふ例もなく、詞の様もいかにぞやおほゆれば、よく考へ見るに、せとゆと少し字の様の似たるに、筆消などせばまがひぬべし。されば水せく川とよむべし。凡川水を堰くは、苗代などに引きかけむため也。水行く川をせきたちて、其せきの上つかたにて、右左へ四つ八つの溝をなして、横さまに水をやれば、蜘蛛の手の四つつたつにて、八つあるが如くなれば、さてこそ水せく川のくもでなればといふなれ。其川ぞひの道の兩方にあらんには、橋も四つ八つわたすべし。かゝることゐるなかにはかたぐにあれど、一所に八つまでわたしたらんは、まためづらしければ、おのづから所の名ともなりにけんかし。

催馬樂のぬき川のうたに、

ぬき川のせどのやはらたまくら、やはらかにぬる夜はなくておやさくるつま、

旅のなぐさ

二段、おやさくるつまはましてるはしも、しかしあらばやはぎの市にくつかひにかん、三段、くつかはどちかいのほそしきをかへ、さしはきてうはもとりきてみやぢかよはん、

ひぢりこ一泥、軟きものなるよ、り手枕やはちかにの縁に用ひたる也、さこのふなはし、一上つゆぬさぬの船はしとり、ぢし親はさくれどむじさかれが

ぬき川は美濃國にいづぬき川ありと、ある物に見えたれど、美濃の國なるをとりいでていふべき歌のさまにあらねば、三河にさる名の川あるなるべし。せどのやはらはひぢりこなり。やはら手枕といはん料にて、あつぶすまなごやが下にといはん如く、やはらかにぬる夜はなくなり。おやさくるつまとは、萬葉に、さの船はしとりはなし親はさくれどといふに同じ。是は女のいふなり。つまは夫をさす。二段おやさくるつまはましてるはしもとは、おやのさくれればあふ事もまれなれば、ましてうるはしく、其夫をおもふとなり。るはしもは、うを上略せるなり。ひとつの本にてる日はしもとあやまれるもあり。さてこれらも女のいふなり。しかしあらばやはぎの市にくつかひにかんとは、しかしのしは助字にて、しかあらばなり。矢作の市は、三河の岡崎とふところなり。かひにかんは、かひにいかんを、にの字を引きていへば、いの音のある故に、はぶきいふいにしへの例なり。又ゆかんをいかんといふは、拾遺集に、かめ山にゆくをいく薬とつ

行まほしき云々、桐壺の巻に「限りとて別るる迄の悲しきはいかまほしきは命なりけり」かねて一掛けて

此うち一同じく催馬樂の中に意、催馬樂は本文庫古代歌謡集中に収めたり

だつ物の様なるもの

づけ 源氏物語に、行まほしき生まほしきとかねていへるたぐひ多し。さて是は男のいふ詞にて、しかばかり我をうるはしと思ふからは、行きかよふ料に 市にてくつかはんとなり。三段くつかはどちかいのほそしきをかへさしはきてみやぢかよはん、是は女のいふなり。ちかいは、和名抄に、線鞋を漢語抄を引きて、千開の久都とある千開にて、せんかいといふべきを、千かいと書きしを、ちかいとよみ誤れるなるべし。せんかい音なれども、此うちにとばり張をとも、大領のまなむすめともいへる例なり。又同和名に、繩綫兼用男女通著とあれば、女の料にちひさく作りたるもあるべければ、細しきをかへと、男の料なれども、女のこころにて細くやさしきを好みていふにや。又さきのは、男の通はんとて沓かはんといふを、女のわれもかよはんの心にて、女の料のくつかへといふにや。うはもと取り著ては男と女のわかちあり、ここのやう女のことばなれば、沓も女の料なるをいふなるべし。さてうはもは裙をいふ。下裳は褶をいふ。褶を衣服令の集解に、枚帯とあるは、ひらみといふに同じ。ひらおびとひらみとはことば通へり。是を後にしびらともいふ。源氏物語に、しびらだつ物けしきばかり引きかけてといふは、夕貌の宿のしのびたること故に、上裳をばそぎて、下裳ばかり引きかけたるなり。此下にも、

寶飢郡一今「寶飯郡」

人わらへ一人に笑はるること

うはものすそになどもよめり。又男は袴はかまのうへに褶ひらみを著くるが故に、俗にははかまのひらみといへり。或説に、褶をうはもとよむとあるは、男のひらみにまがひたるなるべし。みやぢは此國寶飢郡ほいごほりの宮道を、和名抄に美也知とよみたり。かのみやぢ山もそこなるべし。さて此女この郷に住みける故にさいふか 他にありて通ふ道みちにても有るべし。矢作やはぎ川は加茂郡のころものさとを経て、其上はさなぎ山の麓ふもとをながれ來めり。此川邊に豊川とよかはといふ里さともあり。和名抄に、寶飢郡にいだせり。さなぎは、延喜式に、挾投神社とあり。今は景行天皇をいはひまつれりといへり。遠江濱名はまなの橋はしは今の新居あらゐのわたりの所なり。今もはしもとの里さと有り。されど今のわたりの所よりは南によりて、いと海のきはなるべし。これは書くべきももれ、有るまじきも書きまじへて、こともつとくかず、いとくたくしかれど、たびのなぐさのみにしあれば、人わらへをいとはずなむ。

旅のなぐさ終

岡部日記

或は東歸といへり

賀茂眞淵

あはれ都みやこにありつる程ほどは、あからさまながら年としのはに故郷ふるさとに歸りなどしければ、さのみもあらざりしを、今はたはやすくも歸るまじく思ひなしつれば、千里ちとせの遠とほに老いたるたらちねを置きまつりて、とみの事ありともいかでかしらん、しるとも如何いかでかとみにゆきいたらん、今やいかなる事かあらん、いかなる心にかますらんなど、人やりならぬ胸むねさわがれつること日ごとひごとにありしを、世のさがはあはれなる物にて、うつたへに忘わするとはあらねども、友がきもいで來て、高きいやしきゆきかひしけるに、二つなき心のまぎれやすくて過しぬ。此秋はいざなふ人さへあれば、いでや母をもをがみ、つま子はらからにも逢あはどやとて、後の七月八日つとめてたちいづ。此あらましいふころ、人々別れをしむとて、からやまとの歌、うた 一百ひゃくばかりもあらんかし。そはこと物にしるしつ。友がきの

都一京都
あからさま一か
りそめ
年のはに一年毎
に
たはやすく一た
やすく
とみの事一急の
事
人やりならぬ一
人にせしめらる
るにあらず我心
からの意
さが一習はし
うたへに一
概に
ゆきかひ一往復
後の七月一閏七
月
つとめて一早朝
あらまし一豫定

こと物一別の物
なごり一別るる
心残り
ちぎりあぐい
ついつは歸ると
約し置く
いたしつらし
ゆはびか一幽雅
あをだ一あんな
だ、篋輿
ときあらひぎぬ
一解洗衣、萬葉
「ゆふされば秋
風さむし我妹子
が解洗ごるも行
きてはや著々
關吹きこゆる一
新古今「秋風の
關吹き越ゆるた
び毎に聲うち添
ふる須磨の浦
波」
故郷人は云々一
我は常に富士を
ながめて故郷を
偲び、故郷の人
は又これを見て
此方を見ふと
也、故郷は遠州

なごりなきにしもあらねど、ちぎりおく日數いくばくならねば、先すよまるよ心にはい
たしともおもほえず。品川の驛わたりは、海の面ゆほびかななり。夜の雨晴れて、白雲お
ほく海の空にかよれるは、伊豆のみ崎と安房の大山となり。此所は袖の浦とぞいふなど、
あをだかく奴のみだりにいふはをかしき物から、いづくにまれときあらひぎぬきん日ま
では、其名のゆかしきや。あさかぜいとどしく身にしむに、

旅人は衣、手さむししばし猶こころして吹け浦の秋風

關吹きこゆるなどよみけん思ひいでらる。富士の山はひつじさるの空にみゆ。是ぞおの
がながむる方なるに、故郷人はこなたをこそと思ふもこたびはうれし。をちつとし束に
來にけるほどに、

東路にありと聞つるふじのねを夕日の空にかへりみるかな

とながめて、かぎりなく遠くも來にけりとわびつるにはかはれり。六郷の渡は玉川にぞ
あるらん。和名抄に、此國に六座郷あり、同じ所にはあらずや。此水上に多婆川といふ里
ありといへり。ことばのすみにごりにつけて、ふるき名なる事猶あきらかなり。さがみ
川は今ばにふといふ。古の道はいと北の方なめれば、此水上やむさし相摸のさかひな

日記一更科日記
しもつふさ一下
總

まつち山云々一
萬葉、下句「すみ
だ河原に獨かも
ねん」
紀路にいらたつ
一萬葉卷四登朝
臣金村の長歌の
一句
しるし一明か也
うちぎき一打
聴、人より聞き
たる事を記録し
置くもの
つと一土産
雨づつみ一雨や
どり
山もと一山の根

らん。菅原孝標が女の日記に、在五中將のいざこととはんとよみける所は、むさしさが
みの堺の川なるやうにぞある。されども武藏としもつふさのあはひにすみだ川のあるよ
し、古き物にはみな見えたるを、所の人の教へたるがたがへるまよに、日記には書ける
なるべし。凡そすみだ川といふ所こそ多けれ。古今六帖に、いづはなるあをとが關のす
みだ川、と詠みしは、出羽の國にあるべし。辨基がまつち山夕越えくれて庵崎の、とよみ
けるは、きの國にある事、紀路にいらたつまつち山とあるにてもしるし。後の人はふる
き書をよくも見ざるにや。すみだ川はむさしと下總のあはひにのみとおもひて、辨基が
歌をもそこにつらね、今はそこに庵崎といふ名の村さへありといへり。ゆふこえくれて
といはんほどの山もあらぬものを、こと好むものの、ともすればいつはり事をかまへ
て、古事をばうしなふものぞかし。かくの如き事は、うちぎきめきたれど、人に見すべ
きものともかまへざれば、旅のなぐさめがてら、ともなふ人にかたるを、古郷のつとに
ちやと書き付くるなり。ほどがやの宿するほど、空くもりみ晴れみたどならねば、雨
づつみするに、しばらくして氣色やみにけり。藤澤のうまやにやどるらんとて行くに、
しなの坂といふ坂をくだれば、田の上山もとなどに、濁りたる水いと高きは、こよにし

もいたく降りにけるなりけり。大山は今もふりぬべき雲のふるまひなり。此山ぞあふりの神にておはします。

藤澤や野澤にござりて水上のあふりの山に雲かよるなり

つとめて一翌朝
早く
夕つけて一夕方
にかりりて

つとめて驛をたつ。夜の雨に道いとあしくて、従者わぶめり。大磯小磯といふわたりは、よろぎがいそなるべし。夕つけて箱根山にかよる。關まではくるしとて、畑といふ所にやどる。いとはや夜さむなれば、ねもいらぬに、瀧の音、鹿の聲、うちこめたる由の秋風、聞きあかされて立出でぬ。ほのくくと明けゆく山のかひよりかへり見れば、朝霧しらくたちわたれるは、海を見ん心地す。關こゆるほど、日さしのほりて、湖の面のどかに見わたさる。かなたこなた山をめぐれる水の面は、三巴といふや似つらん。蠶叢に擬したる人はたればかりなるや。其後いくそばくの人かのぞみ見けむ。此湖にさせる聞えなきぞあやなき。延暦十一年に富士の山やけて、石など飛びちりければ、足柄の道ふたがりりとて、初めて此道はひらかる。されども又の年、もとのあしがらにかへされける事は、書に見ゆるを、後又こなたをこゆる事になれるは、いつばかりよりならん。貞觀六年七年にもやけて、甲斐駿河の池など埋れしことあれば、其ころよりの事なるべし。富

聞きあかされて
一耳につきて睡
ちずに夜を明し
かひ一峽、はざ
ま
三巴一支那蜀に
あり、水東南流
し曲三廻巴字に
似たるよりの名
蠶叢一支那蜀の
地、李白見説靈
叢路崎嶇不易
行
ふたがれり一ふ
さがれり

士の烟の絶えしは、延暦のころよりたびく、焼けし故なるべし。凡そ高き山には、水あり火ありて相うつ故に、鳴澤もありけんを、火終に大に起りて、岩をとばし土をちらし、水をたくはふるいきほひなければなるべし。山は火あるのみにては烟たよざるか、寶永の比もやけにけれど、其前つかたに烟たちし事をきかず。水の火あるいはほにふれてたてるいきなるべし。何がしのだけでもしかなりといへり。今はたよすといへるをおもひ合すれば、貞觀の時にたえたるにやあらん。けふは何がしの國より貢物おくとて、さりあへぬまで行きかひたり。荷前の箱の荷の緒にもなど誦してくだるに、ふりさけ見らるる海山の興あるにも、過ぎし比雨にこえし折おもひ出でらる。すべてみ山は雨ばかりあはれなるはなし。こよかしこくゆりいづる雲の、うすき濃きに、山々はおもかけばかりぞみゆる。人面より起ると吟じてこえつる、苦しからぬにしもあらねど、あなをかしたみしはといふに、人々は例のひがこよろにこそ、いぶせかるべき物ごのみなめり、龍にのるらん山人にやあつらへましなどわらふ。からうじて三島の驛に至る。ふるき歌にちちの實の父とつゞけしは、木の實にて、此國にありといふ人のありしかば、問ひもとむれど見しれる人もなし。

いき一蒸汽
何がしのだけ
浅間嶽
さりあへぬ一途
もよけきれぬ
荷前の云々一萬
葉「あづまどの
荷前の箱の荷の
緒にも妹が心に
乗りつけるか
も一
雨ばかり一雨ぐ
らみ
人面より起る
李白「山從人面
起、雲傍馬頭
生」
山人一仙人

ちくのみなきぞ
一郷里に母のみ
にて父なきを此
地にちくのみと
いふ木の實なき
に掛けていふ

古郷のはよその蔭はとひゆけどちよのみなきぞ悲しかりける
けふは雲まよひて富士も見えず。原の宿わたりより雨ふらんとす。富士川は明日こそわ
たるべきを、水嵩やまさりなむ、夜をかけてだに蒲原の宿までいかでゆかんとて、夕つ
かたより立ちまよふ雲のあしとともにいそぎつゝ行くに、空晴れて、おもはざるに月さ
やかにいでにけり。

夜舟こぐふじの川とに霧はれて高ねにいづる月を見るかな

いぬ一午後八時

令一 大寶令

今の五里一古は
支那の里程にな
らひて六町一里
とす
たより一便利
からめいたる一
唐風の
たぐまひ一様
子たしぬ一作ら

夕の雲のいざなはざらまじかば、かよる所の月はみざらましを、心ありけりなどいひあ
へり。いぬのはじめばかり蒲原の宿にいたる。此驛は貞觀七年に富士川の東の野にうつ
されたるよし、史に見ゆるを、一とせ川水いたくあふれて、驛みなながれければ、今の
所におかれたるなり。いにしへ令の時の驛は、阻嶮ならぬ所には、三十里ごと一つを
おくといへり。これ凡そ今の五里ばかりなり。今はさる所すくなし。かよることにてう
つしかへける故なるべし。遞送も五里にてはあまりにたよりあしかるべし。十一日さつ
た山をこゆ。なにがしの湖みるらんけしきおほえて、からめいたる入江のたよまひ
なり。詩作らましを、年頃いはざりければ、なか／＼にてもだしぬ。おきつの濱すぐる

ずして止みたり
あまのまでがた
一後撰集に「伊
勢の海にあまの
までがたいとま
なみながらへに
ける身をぞうち
むる」夫木抄に
も用例見ゆ

すろさう一水晶

清少納言が詞一
枕草紙「牛の歩
むまゝに水晶な
どのわれたるや
うに水の散りた
るこそをかしけ
れ」

かちより一徒歩
にて

に、あまのまでがたといふ事、こよにてぞ心得られしと、東萬侶大人のかたられしを思
ひ出でぬ。けにもたごとといふ物を、繩して枋のかなたにあなたにかけて、おのが肩にな
ひながら、うちつくる波にさかひて、左右の手を繩にそへて、かたをうごかして汲むな
り。古語にひだり右ふたつの手をまてといへり。又くみ來てはすなごにうちそよぎて、
又なきさにおりたちてくむ、見るめもくるしく暇なし。古語よく意得たらん人に、猶く
ちづからいふべし。清見瀉はなか／＼言の葉もなし。夕つけてあべ川わたる。うすく
霧わたれる夕日の、さど波にかけろひて、駒のあがきにちり碎くる水の、するさうなど
のわれたるやうにみゆるは、清少納言が詞おもひいでられて興あり。うつの山はいとさ
かしかれど、むかしの道にあらずといふぞ口をしきや。和名抄に、此郡に内屋といふ郷
あり。今もさいへり。霧立ちていとくらし。

夕霧に行く先くらきうつの山うつよのやみにこえまどひつよ

くれ過ぎて島田の宿にやどる。あすはふる郷なりけりと心いそがれて、夜ふかくいでて
大井川わたるほど、ほの／＼と明け行く。さやの中山は朝霧わけんも珍らしかりなんと
て、かちよりこゆ。菊川の里、むかしは驛亭にやありけん、右大將頼朝卿建久元年十一

日野云々此一條太平記の趣に
よれり

月十三日こよにやどり給ひし事、物に見えたり。また日野右少辨俊基二たび東にくだりける時、かれいひすよむとて輿を此宿の庭にとどむるに、轆をたよきて、まもりの士をよびて、所の名を問ふに、菊川と申すといひければ、承久のいくさのをり、院宣書ける罪によりて、光親の卿を鎌倉に下しけるに、此宿にてうしなひけるを、「昔南陽縣菊水、汲下流而延齡、今東海道菊川、宿西岸而終命」と書きたりける、遠き時の筆の跡、今はわが身の上によとて、

關東紀行一本集
の中に既出せる
東關紀行をいへ
る也

山名郡一遠江の
一部、明治に及
びて磐田郡と合
併す
かひがねを云々
古今集東歌也

いにしへもかよるためしをきく川の同じ流に身をやしづめん
とよみて、宿のはしらに書き付けられしとぞ。關東紀行といふ物には、中御門中納言宗行卿なりとあり。いづれかまことならんとも思ひわかねど、あはれなるむかしがたりをえ思ひすぐさで、人のしれる事ながらしるすなり。さやの中山はさや郡にあればなり。今の世此郡をさよといふはよこなまれり。續日本紀養老六年に、遠江國佐益郡八郷を割きて、始めて山名郡をおくと見え、延喜式に佐夜郡と書く。またかひがねをさやにもみしがといひて、末にさやの中山といひ、古く六帖に、
東路のさやの中山さやかに見えぬ雲るに世をやつくさん

新古今集忠岑が歌に、

新坂一振假名原
本のまゝ、今「に
つさか」と通稱
せり
記一枕草紙
わかへ一参照し
て
相摸一大江目
守公資の妻、有
名なる歌人にて
其歌後拾遺以下
の勅撰集に見ゆ
ねごと一願ひ
事

東路のさやの中山さやかに見えぬ人ゆゑに戀ひやわたらん
といへり、古はかよる語勢多し。さればさやの中山といふにて、郡をさや郡といふべきをしり、さや郡といふによりて、さよの中山といふ誤をもたどすべし。下れば新坂の宿なり。すくのはてなる社を、今の世には八幡の社なりといふ。こは延喜式に佐夜郡已等の麻知神社とあるなるべし。はやく文徳の御時、從五位下の神位になし給へるには、任事社としるされたり。清少納言が記にも、ことのまよの明神、いとたのもし、さのみ聞きけんといはれんと思ふぞいとをかしき、とかきたるにむかへ見れば、ことのまちとあるぞおほつかなき。さて鴨長明も、さやの中山のくちにあるなることのまよの社、とかければ、其頃まではうたがひなかりけむ。和名抄に、此郡に山口といふ郷ありて、今もあれば、よくかなへり。是を此國の一宮なりといふものもあれど、周智郡小國社をこそ、古く一宮とはいひつれ。相摸のよみけむ歌の詞書にも、こととありしやらん。とまれかくまれ、此やしるねごと聞き給ふとて、人々のうちこそりてたふとみまうづれば、ことのまよなる社とこそいふべければ、行く手にをがみて過ぐるもたのもし。右の

あは―あれは何
山ぞ

―れしき瀨云々
うれし涙に袖
を濡すと也
門により―母が
他國に在る子の
歸るを待ちわぶ
るをいふ、戰國
策に、王孫賈の
母が賈に向つて
「汝朝に出でて
晚に來れば吾則
ち門に倚りて望
む云々」といへ
る故事
髪の上もぎ―老
いたる我が蓬髮
あよづけ―およ
すけの誤、成人
まことのいたれ
る―親子の至情
まで―語で
こたみ―今度

かたはるかに秀でたるはあはがだけなり。

空たかくたつ白雲のあはが嶽あはとがめてしぬ人ぞなき

懸川の宿わたり、ゆかりあるかたへおとづれて過ぎぬ。夕つけて天龍川わたる。むか

しの歌には、あまの中川とぞよみたる。人々むかへにとて來つよ、おい人の事なきよし

まづいひて、いとめづらしとおもひたるけしきどもうれしくて、

まれに渡る天の中川なく、にうれしき瀨にも袖ぬらしけり

くれ過ぐるほど、岡部の家にいたる。まことに門によりてまちうけ給ふ。いとさなき姪

どもなど、はせ來れども、見しらぬかほなればにやあらん、とみにもむつれず、なれし

ばかりの人々は、髪の上もぎは似ずなりぬれど、くにぶりの詞のみやしるかりけん、

いづれの所よりは問はざりける。つまなる人はたはやすく來べからぬ故あれば、先子

をおこせたるに、年比へて見るに、およづけにたるぞうれしき。まことのいたれること

とて、なつかしく嬉しとおもへるけしきもあはれなり。常はしたしからぬさへ訪ひ來て、

日にくかたらふに、庭の上もぎも露かわくひまのありけなり。こよにまで來たりにい

れば、京にもと思ひぬれど、東にちぎりつる日數しあれば、こたみはえまうでぬを、や

むごとなきあたりあしからず申入れ給ひねと、非藏人親盛などに文つかはす。

八月十日ばかり、民部少輔暉昌の家に歌よまんとするに、東にて、わがあらぬほどに、

月前遠情といふことを人々よめりといひおこせつれば、すなはちその題を人々とともに、

いく千里月にむかひておもひやる心のはてや白川の關

おなじむしろに題をさぐりて、曉更萩風といふことを、

いかでたゞ夕のもの聞きつらんうきはねざめの萩の葉風を

藤原龍萬呂、ことしむ月ばかり身まかれりけるに、そのはかに高松山といふ所にまうで

て、花など手向けて、松の茂れる中にたよすむに、秋風のいと身にしむ心地すれば、

松たかき山のあらしの聲のみやそこはかとなく聞きて歸らん

その繼母なるもうせて、墓の竝びてあるに、同じく手むけつ。哀さいはんかたなし。

手向する心や野べにかよふらん折る花ごとに露こほれつよ

又藤原のくにあきらも此夏身まかりにたりと、東にて聞きて、おどろきてよみける歌の

あるを、國滿のもとにつかはす。

めかるれば疎ならひを思ふまに永きわかれとなりけるかな

身まかり―死に

聲のみや―墓の
主の聲は聞くべ
くもあらねばと
意を含めて見る
べし

めかるれば―あ
ひ見ずに離れて
居れば

とむらひ一甲問

くさ一種

のたまひつれど
折角の仰なり
しかども

こよなく一此上
もなく

まだきなる物か
ら一この色の紙
を用ふるに、早
き時候なれども
うけ一芝べ
とりまかなひて

一世話しとくの
へて

ゆはびか一幽雅
舞澤一今の舞
坂、下文に其辨
あり
はらくに一ちち
はらと、そここ
これ

氣賀一傍訓原本
のま今「ケガ」
と呼べり
遠江歌一遠つあ
ふみ引佐細江の
みをつくしなれ
を頼めてあさま
しものを

たどる一不明確
にて何處ならん
と疑ふ

その妻まさきは東萬侶大人の姪なり。なけきのほどおもひやられて、とむらひけるに、目もなきはらしながらたどりいでて、あはれなること物語するついでに、東にてさるべきことのはもあるらん、思ひなぐさみぬべきくさともなりなん、いとまには訪ひ来てかたり給へかしなどあれば、二日三日すぎて文つかはす。

のたまひつれど、さはる事のみありて、まうでも聞えなぐさめまるらすべくも侍らず、これは野を分け侍るに折りつる花なり。

此秋は露のかよらぬこと草をいづこに得てかなぐさめにせん
うすにびの紙に書いて、草の花をさまぐあつめておくりけり。かへし、

いとど露けき秋に、うちしをれくらし侍るに、よみ給へる歌どものおもしろきを聞き侍らば、こよなく心なぐさみてまし。猶ひまもとめてとひ來給へかし。

いづこをか更にもとめん珍らしき人のことばの花ならずして
枯野いろめきたる紙に書いたるは、まだきなる物から似つかはしきや。

月のさかりは、水の面こそ物よりもわかね、濱名の橋の程遠くも近くも、月に舟うけたらんぞこよなかるべきとて、人々小舟とりまかなひて、入野の村の入江よりさしいいでて、

雄踏などいふ村右に見てさしわたす。この所はむかしの湖にて、遠つ淡海とよびしも

これによれらんを、今はうしほうち入りて、ゆほびかなる入海なり。西は高師山たかく

雲間に見え、左は舞澤の松さながら波のうへにたてり。其西はかの濱名の橋かけたりけ

ん所にて、今は大海にうちつどきて、大船小ぶねはらよに行きかひたり。右のかたはい

く里ともなく、入江はるくと見わたさる。其入江のおくぞ引佐細江なりける。されば

其所の山の名を、大いなさ小いなさといひて、其あたり引佐郡にて、引佐村もあり。あ

らるの渡り波風あらしきを、濱松の城の北より道ありて、氣賀の關こえてゆけば、此

入江まぢかく見えて、けしきえもいはずおもしろし。これは萬葉集の遠江歌に、いなさ

細江のみをつくしとよみしより、名だたる所なり。其比かのわたりの任にてすめる人

か、あるは郡司などの歌なるべし。後の人は今の大道のほとりならでは、みやこ人など

のゆきかふ道あらじと思ふより、舞澤より濱松へすぐる道の右の方なる蓮ある池の長き